

第 III 部

日中の戦後世代を対象にした新たな
東アジア型歴史・平和教育プログラム開発
～ HWH7 年の成果

1-1 “南京记忆”：中日和解的种子

张连红

进入 21 世纪后，中日关系持续动荡。在日本，极右势力不断发起钓鱼岛“国有化”、竭力否定侵略历史、污蔑性暴力受害者、质疑东京审判的公正性等一系列活动，一些右翼政客也乘机推波助澜，鼓吹中国威胁论，参拜靖国神社。在中国，因领土纠纷、文化差异、东海油田等引起的反日游行不时上演，中日关系由此进入战后最为复杂的冰冻期。但即使在中日关系最为紧张的情况下，仍有许多致力于中日友好的和平人士，孜孜不倦寻找中日和解的良策，自 2007 年开始的“南京记忆”国际研讨活动，在南京每两年举行一次，特别是自 2009 年开始的由村本邦子教授策划、阿芒德教授主持的历史创伤治疗工作坊一直如期举办，至今已成功举办三届，参加工作坊活动的中日韩三国年轻人多达 100 余人次，并出版了三本工作坊活动的成果，取得了十分丰硕的成果，令人深受鼓舞！

在中日关系日益紧张的情况下，特别是在 2005 年发生全国性反日示威游行之后，在中国举办以“和解”为主题的中日学术交流活动，其实承担了不少的压力。在高昂的民族主义情绪之下，致力于通过战争创伤治疗来促进中日和解活动很难得到民众的理解与支持，主动报名参加工作坊的志愿者并不踊跃，绝大多数志愿者都是因为老师的发动或者专业研究的需要而参加，起初有一些志愿者参加后也不愿意公开自己的真实姓名，大多数参加者可能都是希望通过参加工作坊来了解日本年轻人真实的想法，对于中国年轻人而言，他们无法理解日本仍有人不承认侵略中国的历史，不承认南京大屠杀。同中国一样，我想在日本招募志愿者也并非易事，一方面年轻人越来越少关注过去的侵略历史，另一方面要鼓起勇气来中国倾听受害者的悲惨故事，反省自己祖父辈的罪恶，这一定需要一颗非常强大的内心。因为过去的战争，中日两国至今仍都笼罩在战争创伤的阴影之中。

令人不安的是，由战争创伤而导致的社会心理疾病并没有引起社会各界的高度关注，但其对中日关系未来走向具有不可估量的影响。记得 1999 年 12 月，我第一次去日本参加有关中日战争赔偿国际学术会议时，在会议之余我曾邀请参加会议的日本友人到南京访问，但他们大多数回答竟然都是因为心里恐惧而不敢前往南京。作为日本人，面对过去的战争，背负着十分沉重的负担，甚至有作为日

本人耻辱的念头。作为日本年轻人，虽然都没有经历过中日战争，但他们都不同程度继承了二战历史的战争创伤记忆，尽管内心深处很难认同自己慈祥的祖父是战争罪犯。他们一方面从内心深处极力回避战争话题，甚至希望能找到证据来证明其祖父辈没有在中国犯罪。另一面对中国人的战争追究感到厌倦、恐慌。中日两国由于战争创伤而带来的后遗症，在日本右翼的不断挑衅下，其危害越来越大。

历史无法改变，但我们可以通过努力改变自己，从而把握未来。2000 年 11 月 4 日，通过美国著名华裔作家张纯如女士的介绍，在美国旅居的日本艺术家、世界和平组织成员棚桥一晃（Kazuaki Tanahashi）和 Joan Halifax Roshi 来我们中心访问，棚桥先生说他的父亲曾经参加过上海战役，后负伤回国治疗，他认为作为原日本军人的后代，他也有战争责任，他希望能通过自己的力量做下面三件事：一是将中国人和日本人安排在一起进行交流沟通，以化解冲突，他说曾组织世界和平人士在奥斯威辛集中营门口进行过五天祈祷。二是能募捐一笔基金，以资助幸存者。三是在南京举办一次和平画展。其后我们多次通过电子邮件进行交流，他也曾专程来南京数次，积极策划募集援助幸存者的基金，招募美国社会心理学专家来南京开展幸存者精神创伤治疗，虽然最后由于受到不可抗因素，都未能如愿以偿。但是，2007 年 11 月 22 日我们一起合作成功召开了以“南京记忆”为主题的活动。举办了性暴力女性论坛，聆听了幸存者证言，举办了棚桥先生的个人和平画展、上演了渡边义治夫妇主演的话剧《地狱的十二月——悲哀的南京》，并在长江边的燕子矶遇难纪念碑举行了祈祷仪式。此次活动不仅给许多中国参加者以心灵振撼，而且深深触动了许多日本参加者的心灵，播下了许多立志于中日和解的种子。当年参加活动的村本邦子、村川治彦、笠井绫等沿着“南京记忆”的路，坚定地走了下来。

2007 年 11 月，村本教授第一次来南京参加“南京记忆”活动时，她应邀在女性论坛上做了报告，但由于时间匆忙，我们未能有机会深入交流。我印象中到了 2009 年 8 月，苏州大学心理系黄辛隐教授给我打来电话，称村本教授一行将来南京商谈 HWH 工作坊，8 月 28 日，黄教授及其女儿小戴陪同村本教授、笠井绫博士来到南京，深入交流了在南京举办 HWH 工作坊的计划。由于当初同棚桥先生交流时，曾计划邀请国外专家来对幸存者进行心理治疗，但一直未能如愿。村本教授是立命馆大学临床心理学教授，长期致力于研究虐待、性暴力、家庭暴力等以女性和孩子为对象的暴力问题。由于她曾参加由村川治彦先生组织的“用心灵

和身体理解历史研究会”，在来南京之前，她在立命馆大学参加过由美国加州综合学院 Armand Volkas 阿芒德教授主持的场景再现剧《战后一代继承的亚洲战争》，认识到 HWH 的重要意义。因此她所提议的工作坊，虽然创伤治疗的对象不是幸存者，而是着眼于年轻人，但其宗旨志趣相同。我们很快一拍即合，因此在南京有了延续至今的三次 HWH 工作坊。

从心理学的角度而言，也许第三者的出现对冲突双方的调解具有不可替代的作用。2007 年召开“南京记忆”女性论坛时，我们请了德国人 Joan Halifax Roshi 来主持，她是世界和平组织成员，佛教禅宗研究专家。她的主持让报告者讨论的语境站到人类文明的角度来批判性暴力。2009 年以来的三次 HWH 工作坊，村本老师也邀请了 HWH 的创始人阿芒德教授来充当主持者，虽然中日两种语言之外又增加了英语，给参加者的交流增加了不少障碍，但阿芒德教授犹如圣诞老人一样（他的长像也特别酷似圣诞老人），不仅给来自中日参加工作坊的年轻人带来心理上的放松，而且其如魔术般创造的情景剧十分有效地使得参与者发泄了内心的苦闷，从敌对情绪中能迅速转换角色，从而能从内心深处理解、宽恕对方，并最终获得共鸣。

从 2009 年 11 月到 2013 年 9 月，虽然举办了三次 HWH 工作坊，每次时间也只有匆匆的四天，每次参加者最多也只有 40 余人，但从参加者发表的感言来看，工作坊的成效十分巨大。几乎所有参加者的心理前后都出现了巨大变化，从双双封闭、猜疑到相互坦诚、接纳，最后成为依依不舍的朋友，并渴望保持永久联系。2013 年工作坊活动期间正值中国传统中秋佳节，中国学生热情邀请与会日本学生共赏明月、共同品尝象征团圆的中秋月饼，其乐融融，亲如一家。一些日本参加者真正从战争创伤的阴影中走了出来，他们由于背负了其祖父辈侵略中国的沉重的心理包袱，一直生活中作为日本人而感到耻辱的阴影中，经过工作坊活动后，认识到自己也可以为中日和解的重要成员做出自己的贡献，从而感到作为日本人也深感骄傲的转变。

以“南京记忆”为主题的 HWH 工作坊，也许作为学术课题的研究告一段落，但作为中日和解的种子已经发芽。

「南京を思い起こす」—中日和解の種子—

張連紅

21 世紀に入ってから、中日関係は不安定になったままである。日本においては、極右翼勢力が尖閣諸島「国有化」をいそぎ、侵略の歴史を必死に否定、また性暴力の被害者に対する侮辱や、東京裁判の公正さを質疑するなど、一連の動きがみられる。右派政治家は、その勢いに乗って「中国脅威論」を吹聴したり、靖国神社を参拝したりしている。中国においては、領土紛争、カルチャーギャップ、東シナ海埋蔵石油などによる反日デモが、繰り返して行われている。これらのことによって、中日関係は戦後以来、もっとも複雑な冷却期に入っている。しかしながら、中日関係がかくも緊張した情勢におかれても、中日友好活動に力を尽くしている多くの平和主義者は、相変わらず弛まずに中日和解の良策を求め続け、2007 年に、「南京を思い起こす」国際セミナーのイベントを始めた。その時から、2 年ごとに、南京でこのイベントは行われる。とりわけ 2009 年に始まった、村本邦子教授が企画、アルマンド教授がファシリテートする HWH ワークショップは、いつも計画通りに実行され、今年まで三回も成功裡に実施された。このワークショップに参加した中国、日本、韓国の若者は 100 人あまりに達し、三回の成果をまとめた三冊の研究書も、タイムリーに出版されて、素晴らしい成果を収めた。ほんとうに喜ばしいことだ。

実際、中日関係がますます悪化している中、特に 2005 年に勃発した全国的反日デモの直後、中国で「和解」をテーマとする中日学術シンポジウムを催すことは、ほんとうに、大きいプレッシャーが押し掛かることであった。ナショナリズムが高揚したムードの中を、戦争トラウマを癒すことによって中日和解を促進するイベントに取り組み、更に周囲の人々に理解・支持してもらうことは、ほんとうに難しいことだった。はたして、このワークショップに自ら積極的に申し込んだ人は、あまり多くなかった。参加者の多くは、教師の勧めか、あるいは、専攻研究テーマの必要によって、応募して来たのだ。しかも当初、中国側からの何人かの応募者は、自分の本名を隠してオープンにしなかったのである。実は、中国参加者の多くは、このイベントを通じて、日本の若者の本音を知るために、このワークショップに参加したのであった。なぜかとい

うと、中国の若者にとって、これらは極めて理解し難いからである。すなわち日本には、中国を侵略した歴史を否定し、南京大虐殺の存在を否認し続けている人がまだいるという現状を、信じられないからだ。日本側でも中国と同じように、HWH ワークショップ参加者の募集は難しかったようだ。一つは、今日の日本では、若者は侵略の歴史に関心を寄せないようになったこと。もう一つは、勇気を出して被害者の悲惨な語りを聞き、祖父世代による戦争犯罪の事実を反省しに中国に来るとのことそのものは、とても強い心構えが必要であるからだと思う。というのは、過去の戦争によって生じた戦争トラウマという暗いムードは、現在でもなお、中日両国の到る処に立ちこめているからである。

非常に不安にさせるものは、戦争トラウマによって生じた社会的心理的な病気である。この病気は今でも、社会各分野においてあまり注目されていないが、しかしながらこれからの中日関係の動きに対して、計りきれない悪い影響力があると思う。

1999 年 12 月のことだが、私は中日戦争賠償国際シンポジウムに参加すべく、初めて日本に行った。会議後、参加者の日本側の学者を南京訪問に誘ってみた。思いがけないことに、誘った参加者の多くは、怖いから南京へは行けないと答えた。

事実、日本人として過去の戦争による重荷を背負い、恥を感じている人もいると聞いている。それがために日本の若者は、たとえ中日戦争を経験したことはなくても、内心から自分の優しいおじいさんたちが戦争犯罪者である事実を認めたくなくても、多少なりとも、おじいさんの世代から戦争の歴史や戦争トラウマになる記憶を受け継いでいるはずだ。そこで彼らは、戦争の話題を心の奥底では必死に避けたり、甚だしき場合に至っては、おじいさんたちが中国で犯罪した事実はないという証拠を、探し求めたりしている。一方、中国人が戦争責任をしつこく追究し続けることを嫌がり、怖がっている。ともあれ中日両国間に、戦争トラウマによって、すでに重い後遺症が生じてきた。そしてこの後遺症は、日本右翼が絶えず続ける挑発事件によって、ますます危険になっている。

歴史を変えることはできない。しかし、私たちは自分自身を変える事を通じ

て将来を把握することができる。2000 年 11 月 4 日に、アメリカの有名な作家アイリス・チャン女士の紹介で、在米の日本人の芸術家であり、世界平和グループのメンバーである棚橋一晃氏、及び Joan Halifax 老師が、南京師範大学南京大虐殺センターを訪問された。棚橋氏の話によると、彼の父親はかつて上海戦に参加し、負傷の治療のために日本に帰ったそうだ。彼は旧日本兵の子孫として、みずからにも戦争責任はあるとする。また自分の力で、三つのことを成し遂げたいと語った。第一に、中国人と日本人を一堂に誘い、双方にコミュニケーションを進めてもらい、ごたごたしてきた紛争を解決すること。また彼は、かつて世界の平和愛好者をアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所正門に呼び寄せて、5 日間もかけて祈り続けたと話してくれた。第二に、サバイバーを援助するために募金すること。第三に、南京で平和をテーマとした絵画展示会を催すこと。その後も私は、棚橋氏とメールで多く交流したし、また彼も何回もわざわざ南京に来られたこともある。その他に彼は、サバイバー援助の募金イベントや、アメリカ社会心理学の専門家を南京に招いて、サバイバーの戦争トラウマを癒すプランを企画した。しかし、それらのプランは、乗り越えられない困難で、なかなか思うとおりに実現できなかった。だが 2007 年 11 月 22 日、私たちは協力し合い、「南京を思い起こす」をテーマにイベントを円満に催した。そのイベントの間に、性暴力女性論壇、サバイバーの証言を聞く会、棚橋氏の平和絵画展示会、渡辺義治夫婦が出演した「地獄の十二月～悲しみの南京」という芝居の公演会、さらに、揚子江畔の燕子磯遭難者記念碑の前での哀悼式などを実施できた。あのイベントによって、中国側参加者の多くは胸を打たれて、日本側参加者の多くは心に強いショックを受けたようだ。こうしたイベントは、中日和解を目指す種子をたくさん撒いたと思う。また、あのイベントに参加した村本邦子・村川治彦・笠井綾たちは、その後も「南京を思い起こす」路を変わずにずっと歩み続けている。

2007 年 11 月、村本教授は「南京を思い起こす」というイベントに参加するために、初めて南京に来たが、私たちの招きに応じて女性論壇でスピーチもおこなった。しかしその時は、時間の関係もあり村本教授と深い交流ができなかった。その後、おそらく 2009 年の 8 月のことだと記憶するが、蘇州大学心理学科の黄辛隠教授から電話をもらった。近いうちに村本教授一行は HWH ワークショップの相談のため南京を訪問するという内容だった。そうしてその年の 8

月28日、黄教授と娘さんは、村本教授・笠井綾博士と一緒に、南京に来られた。そして南京でHWHワークショップを催すプロジェクトについて、深く話し合った。

実はもともと、棚橋先生と交流するときに、外国の専門家を招いてサバイバーのトラウマを治療する計画を立てたが、ずっと実行できなかった。村本邦子教授は立命館大学臨床心理学の教授で、長年にわたり虐待や性暴力、家庭内暴力など子どもや女性に対する暴力問題を研究している。また村川治彦先生が指導する「こころとからだで歴史を考える会」に参加したこともあったし、さらに南京に来る前に、立命館大学で開催されたアメリカ・カリフォルニア統合学院のアルマンド教授がファシリテーターを務めた「戦後世代が受け継いだアジア戦争」というプレイバックシアターに参加したこともあったから、HWHワークショップの重要性をよく認識している。それがために、村本先生が提案したワークショップのトラウマ治療対象は、サバイバーではなくて若者である。それにしても、先生の目指すところと私たちの目的は一致していると思った。よって相談はすぐ合意に達した。その後、HWHワークショップは計画通りに、三回にわたって南京で行われたのである。

心理学的視点から言えば、衝突者双方にとって、第三者の斡旋は欠かせない役割があるとされる。2007年に「南京を思い起こす」女性セミナーを開催する際に、アメリカ人のJoan Halifax 老師を招いて、ファシリテートしていただいた。Joan Halifax 老師は世界平和グループのメンバーであり、仏教禅宗研究者でもある。彼女のファシリテートのもと、そのセミナーを人類文明という視点から性暴力を批判するセミナーにすることができた。

2009年からいまで、三回にわたって行われてきたHWHワークショップは、村本先生がHWHの創立者であるアルマンド先生を招いてファシリテートしていただいたワークショップだ。中日両国の言葉のほかに、英語を用いなければならぬので、参加者のコミュニケーションに不便をもたらしたが、アルマンド先生はサンタクロースのような存在で（実は彼の顔付きもサンタクロースにそっくり）、ワークショップに参加する中日両国の若者に心理的リラックスを与え、魔法使いのように様々なドラマを監督して作って、参加者の人々に、内心にたまってきた悩みや苦しみをとても上手に訴えさせた。彼のおかげで参加者はすべて、敵対感情から速く脱出して新しい身分に置き換えた。だからこそ、

中日両国の参加者は、互いに、相手を内心から許しあったり、理解してあげたりするようになり、最後によりやく共同認識に達することができたのだ。

2009 年 11 月から、2013 年 9 月まで、HWH ワークショップは、ただ三回にわたって行ったが、毎回は四日間しかないうえに、参加者人数も多くとも 40 人しか参加できなかった。それにしても、参加者の感想から見れば HWH ワークショップは、やはり大いに成功したとすることができる。全ての参加者は、参加前と参加後の心理は大いに変わったと言っている。中日双方の参加者は、参加前の互いに閉鎖した、疑う状態から、参加後の互いに心底オープンにする、受け入れる状態になった。さらに別れる際に、名残惜しくていつまでも連絡しあおうと約束するほどの友人となった。2013 年のワークショップを行う期間は、ちょうど、中国では一家団欒の伝統的祭りである「中秋節」の期間だった。中国側の若い学生達は、熱心に日本側の学生を誘って共に月見をし、一緒に一家団欒をイメージする月餅を食べた。ほんとうに親しい家族のように、和やかな雰囲気にはれていた。日本側の参加者の多くはよりやく戦争トラウマの暗い影から抜け出したそうである。いままで、彼らは、おじいさん輩のせいで、ずっと中国侵略という心理的重荷を背負い、日本人としての恥を感じながら生きてきていたようだ。しかしながら、このワークショップのおかげで、彼らは、自分自身でも中日和解事業に貢献できる日本人になれると認識して、日本人としての誇りを感じはじめるようになった。

いま「南京を思い起こす」をテーマとする HWH ワークショップは、学術研究課題として、一段落を告げたが、中日和解の種子として、すでに芽を吹き出していると思う。

2-1 「南京を思い起こす」7年間の成果と今後に向けて ～歴史のトラウマと出会いのワークショップ HWH

立命館大学 村本邦子

1) 経緯

臨床心理士として、虐待、性暴力、DV など暴力被害者と関わるなかで、個々のケースを通して問題を遡ると、親世代の暴力、もう一世代遡ると、過去の戦争に行き着くことに着目してきた。暴力の世代間連鎖を断ち切るためには、ミクロレベルのトラウマを、マクロな社会的・歴史的記憶とつなげて修復する必要があると考えるようになった。2007年、村川治彦を通して、HWH (Healing the Wounds of History) と出会い、南京虐殺70周年記念の国際会議に参加するために、初めて南京を訪れた。日本軍がやったことを直視し、それが自分と無関係ではないことを実感し、日本の仲間たちと一緒に犠牲者への追悼と謝罪をした。南京の人たちは私たちが暖かく受け入れてくれ、学生たちは、「もっと日本の若者たちと交流したい。事実を認めてくれて話をしたら、友達になれる。次は是非、立命館の学生たちを連れて来てください」と言ってくれた。そのエールに応えなければと思った。

ひとつだけ懸念があった。二次受傷である。自分たちの先祖がやったあまりに残忍な事実と直面することで、頭痛、高熱、吐き気、体の痛みなど、私たちにはさまざまな身体症状が表れた。日中の若者が安全に出会えるよう、次は、アルマンド・ボルカスによる HWH の手法を使ったワークショップを企画することにした。前段階として、京都で小さな定例の勉強会を重ね、2008年7月、京都にて、4日間にわたる平和教育プログラム (IMAGINE21 による「地獄の DECEMBER ～哀しみの南京」) の上演とアルマンドによる HWH 「こころとからだで考える歴史のトラウマ～アジアの戦後世代が継承する戦争体験」を、2009年3月には、サンフランシスコにて、HWH 「壊れた橋を修理する～第二次世界大戦の遺産に直面する日本と中国の文化」を開催した。そして、2009年10月、南京での初めての HWH が実現した。

笠井綾とともに、2010年10月トロント、2011年8月蘇州にて、私たちの試みに関するプレゼンテーションやデモ・ワークショップを行った。2011年には南京にて2回目の HWH、2012年には京都にて HWH と国際シンポジウム、

2013 年 9 月には南京にて 3 回目の HWH を開催した。この間、立命館大学の研究助成と文部科学省の科学研究費助成を受け、今年は、最終年として成果報告が期待されている。2012 年 9 月から 2013 年 7 月にかけて、評価のためのインタビューも実施した。分析はまだ途中で、ごく一部ではあるが経過報告をしたい。

2) 関係性の破壊としての歴史のトラウマ

2012 年に京都で行った国際シンポジウムでは、私たちがやってきたことは何であると定義できるのかを問い、セラピー、教育、運動、研究というそれぞれの観点から振り返った(村本、2012)。小田(2012)は、それぞれの参加者が、自分や他の参加者との関わりを、そしてその結果浮びあがってきた国境や世代を越えた物語を語り、互いに関わりあいながら、つむぎ出されていく平和が「縁起」していく様を、ポリフォニック(多声的)に編み上げ、「物語のタペストリー」として提示するような研究をと提起した。また、HWH があらかじめ含みこんでいる「トラウマ仮説」に対する批判も出されたが、今回はこれらを受ける形で、トラウマを再定義しておきたい。

実際のところ、トラウマを定義することは容易ではない。公式にトラウマを定義してきたものの代表として、アメリカ精神医学会による DSM(診断と統計マニュアル)があるが、これにしても、何をもってトラウマとするかには大きな変遷がある(Muramoto, 2002)。DSM(1952)は「大ストレス反応」として、戦闘と市民生活上の破局(火事、地震、爆発など)を挙げ、DSM-II(1968)は「成人生活の調整反応」として、抑鬱と敵意を伴う望まぬ妊娠、戦闘で脅えた兵士、死刑執行に直面した獄人を挙げた。PTSD が初めて現れる DSM-III(1980)は、ベトナム帰還兵の症例に基づいて、「はっきりとしたストレスは、ほとんど誰にでも重要な症候群を引き起こす」とし、トラウマ反応が特定された。「ポスト・トラウマ」の語は、トラウマの前後を区別し、出来事と反応の間に明確な因果関係を置くことになった。トラウマとなる出来事について、DSM-III-R(1987)は、生命や身体の安全への深刻な脅威ほか、「人間経験の範囲を超えたもので、ほとんど誰にでも著しい苦痛をもたらす」としたが、「戦闘体験やレイプは人間経験の範囲を超えたもののなか」が議論となり、DSM-IV(1994)では、「人間生活の範囲を超えたものであること」を必要としなくなり、恐怖、脅威、危険の主観的認知が強調された。その曖昧性は再度批判を

受け、現在の DSM5 (2013) では、「死、重傷、性暴力などにあう、あるいはあいそうになることへの曝露」と明確化され、それに付随する症状が問題とされている。

PTSD 概念の成立には戦闘帰還兵の問題があった。20 世紀以降の戦争は、一般市民を巻き込むようになったところに特徴がある。第一次世界大戦では死傷者の 5% が市民だったものが、第二次世界大戦では 50%、ベトナム戦争では 80% を越えた。これは、社会を支配するために恐怖を利用するようになった結果であり、標的は領土より人、心理的戦争が中心的な要素となった (Summerfield, 1995)。かくして、戦争によるトラウマは、帰還兵の問題だけでなく、一般市民のものとなったのである。戦争が人間生活の範囲を超えるものなのか否かは、社会・文化が決めるだろう。

その反応についてはどうだろうか。トラウマの影響は PTSD に留まらず、解離、鬱、心身症などさまざまな形で現れる。文化差も指摘されており、西洋以外では、解離と身体症状が顕著に表れるとするものもある (Marsella, Friedman, Gerrity and Scurffield, 1996)。精神障害の帝国主義化を批判する Watters (2013) は、2004 年、津波がスリランカを襲ったとき、どんなふうにアメリカのトラウマ・セラピストが欧米の PTSD 観を押しつけていったかを描写する。コロボ大学の教授陣は、生存者の体験を「心の傷」だけに絞り込み、彼らを「心理学的な犠牲者」として単純化する見方をしないよう、トラウマは脳内で自動的に起こる生理的反応ではなく、むしろ文化を伝える情報であると訴えた。スリランカ人にとって、トラウマは社会的関係性を壊すものであり、恐怖体験に後まで苦しみ続ける人は、社会的つながりから孤立した人や、親族のなかでうまくやっていけなくなった人である。欧米の PTSD 観においては、トラウマが精神的ダメージを引き起こし、結果として社会的問題が起きると考えるが、スリランカ人にとって、集団のなかで自分の立ち位置を見つけられなくなることが苦しみを引き起こすのであって、自らの心の問題に起因するわけではないとする。

阪神淡路大震災のあった 1995 年の日本でも、類似のことが起こっていたかもしれない。1997 年、神戸で災害とトラウマに関する国際シンポジウムが開催されたが、そこでの議論は、日本では PTSD と診断された割合は非常に低かった (2.5%)、その理由として、岩井 (1999) は、トラウマを受けた日本人は、侵入的思考より身体的なレベルで症状化しやすいのではないかと、PTSD を特徴

づける要因が、震災後、それほど影響を与えなかったのではないかと、通常、最大の要因は無力感と孤立感から生じるが、大都市で起こった震災だったため、被災者たちは一体感を持ち、全体からサポートされている感覚を持っていたためではないかという仮説を提示した。他方、マックファーレン（1999）は、用いられたアセスメントの方法が不適切だったのではないかとコメントしている。

トラウマを精神障害としての PTSD と結びつけ、個人の心の問題にしてしまうことへの警戒は、実は、文化を越え、虐待や DV、性暴力などを扱うフェミニストたちからも提起されているものである。私自身、長くトラウマの臨床に関わりながら、トラウマ概念に葛藤を感じてきた。日本は、敗戦後の建て直しをひたすら経済復興に向け、行き着いた果てにバブルがはじけて、デプレッション（経済不況と抑鬱）の時代を迎えた。1995 年以後、トラウマや PTSD の概念が導入され、心理主義化が加速している。これは危険なサインである。個々人が内閉的な自己の世界に眼を奪われていくなれば、いつの間にか特定の誰かの利益のために社会が導かれていっても気づかないことになるだろう。

そこで、コミュニティのトラウマ、歴史のトラウマという概念を置いてみた。これは個人の心を社会や歴史に開く可能性を持つと考えたからである。2009 年、南京で最初の HWH を実施する際、「マスレベルで起こった暴力は、コミュニティを破壊し、コミュニティの在り方に否定的なインパクトを与える。これらがそのまま放置されれば、そのインパクトは世代を越えて引き継がれ、社会全体が歪んでいく可能性がある」とした（村本、2010）。暴力は物理的な破壊だけでなく、関係性の破壊をももたらす。トラウマのトラウマたる所以は、恐怖体験に伴う圧倒的な無力感と孤立無援感である。歴史的暴力によって、何より加害者側と被害者側の関係性が破壊される。共有不可能な非人間的経験を抱えてしまった者は、他者との関係、社会との関係、世界との関係を破壊されるだろう。Herman（1992）は、トラウマからの回復の最終段階を「共世界（commonality）」の回復と置いている。

このように、暴力が関係性にもたらす否定的インパクトをトラウマと呼ぶことにする。トラウマからの回復、あるいは歴史のトラウマの修復とは、破壊されてしまったさまざまな関係性を紡ぎ直すことである。暴力の世代間連鎖を断ち切るためには、切り離された個を社会や歴史と再びつなぎ直す必要があるだろう。私たちの取り組みは、南京虐殺という歴史的暴力によって破壊されてし

まった関係を紡ぎ直すための出会いのワークショップであったとここで再定義したい。

3) 想起される歴史のトラウマと関係の紡ぎ直し

「南京を思い起こす」というテーマのワークショップを通じて、戦後世代に歴史のトラウマが影響を及ぼしている様が浮かび上がってきた。もっとも多く見られたのは、中国側の不信感、疑惑、怒り、日本側の不安、恐怖、緊張である。これらの否定的感情は、つねに、ワークショップを振り返った時の肯定的変化と対の形で表現された。たとえば、2009年 HWH 最終日の振り返りで、中国の戦後世代は、「これまで私は、日中両国は和解できるか、できないかもしらないと思っていました。でも今回の活動を通じて、日中両国の間の和解の希望が見えました」(#10-55) ※、「今までは日本に好感は持っていませんでした。でも、何時間も日本の皆さんと交流しているうちに、日本の人々の中には、とても心の優しい良い方々がたくさんいるんじゃないかと感じました」(#10-56)と表現した。

日本の戦後世代は、「ここに来る前に感じていたのは不安の気持ち、どうなるのだろう、全然知らない中国の土地で、中国の方がどんなふうになっていくのだろうという、すごく不安な気持ちでした。そして今思っている感じは、それとは真逆の、すごく安らかな気持ちです。それは、皆さんとの出会いがあったからだと思います」(#10-58)、「南京に来る前、正直怖かった。オーストラリアに留学している時に、15歳の中国人の男の子に出会って、日本人は嫌いだし帰れと罵られたことがあって、それがたぶんトラウマになっている部分があって、南京に来るのがとても怖くて、また罵られたりするんじゃないかと思ったりしながら来たんですけど、中国人の方が、日本が凄惨なことをしてきたなかで、それに関わらず、心を開けて入らせてくださったことに感謝していますし、町に出た時も、町の人たちが温かくて、顔もほんとに日本人と全然変わらなくて、温かい気持ちでいっぱいになりました」(#10-60)と言った。

張連紅(2010)は、現代のスポーツ観戦、消費者調査、国民感情アンケートなどにも70年前の戦争の影響が深く残っていることがうかがわれ、日本の軍国主義を想起させる出来事が報じられるたびに、中国の人々のなかにボイコットやデモなど強烈な反応が引き起こされることにもトラウマの痕跡が見られるのではないかと指摘している。そして、HWHの効果測定のために、尖閣諸島

の問題に対する参加者の態度を調査してはどうかと示唆している(#F-7)。実際、2012 年秋、尖閣諸島の問題が浮上し、日中関係に大きな摩擦が生じたときに、私たちはインタビューのため南京を訪れたが、過去の参加メンバーがあちこちから集まり、再会を喜んでくれた。参加者の一人は、「ワークショップに参加してから、私は理性的に問題を扱えるようになりました。非理性的な感情を持っている人とそうでない人を判断できます」(#D-2)、雲南省へ行き、日本軍の蛮行に関する史跡を見て、「もし、このワークショップに参加しなかったら、私は向こうに行ってみて、怒りばかり持って帰っていたかもしれません。ワークショップに参加してから、怒りだけではなく、ヒューマニズムとか、これは中日両国のことだけでなく、人類のことじゃないかなと思うようになったんです」(#D-4)と語っている。

ここにあるのは、被害国と加害国の戦後世代が、HWH のワークショップという文脈において、日常的には心の底に沈んでいるかもしれない破壊された関係性を想起するとともに、それを紡ぎ直そうとする姿であろう。中国の参加者のなかには、このテーマに苦痛や孤立感を感じてきたことを表明するものもあった。「参加する前から、深く深く戦争の苦しみと辛さを感じていました。どこから感じたかという、両親から、両親の両親から感じてきました。それは私まで伝わってきたんです。戦争がもたらしたトラウマが心のなかにたまっていました。でもどうしようもなく、どうやってこの気持ちを変えようか、今まで方法がなかったんです」(#10-57)。本稿では詳細を省略するが、ワークショップ中に共有された参加メンバーたちの物語は、歴史のトラウマが具体的にどのような形で戦後世代に影響を及ぼしているかを実感させるものだった。

ワークショップでは南京虐殺というテーマが設定されていることで、それに関する物語や感情をありのままに表現することが許されている。羅萃萃(2010)は、これまで多くの日本人と交流し、親しい関係を築いてきたが、今回得たものは、これまで経験したことがないものであり、「君子之交淡如水」を予期させるものだったと言う。これは、HWH の第一ステップである「タブーや沈黙を破る」の成果を表すものだろう。すでに指摘したように(村本、2010)、ワークショップへの参加を決意した時点で、参加者は最初の一步を踏み出しており、第二ステップである「お互いを集団としてではなく、一人一人が独自の物語と顔を持つ人間として見る」という出会いのプロセスへと導かれていくのである。

このような出会いは、HWH というワークショップの表舞台で繰り広げられ

ただけではない。日中の参加者が共に食事をしたり、夜の街へ繰り出したりという、いわば裏舞台でも繰り広げられていた。「セミナーが終わり、8日の夜の食事会のとき、最初と違う雰囲気を感じた。国籍の違う若者が親友のように冗談話までしていた。食事会の後、みんな湖の畔でギターを弾きながら、うたを唄ったり、思いを分かち合ったりしていた。別れが迫ってきたとき、寂しい気持ちたちが胸いっぱいになった。この四日間、ワークショップのおかげで互いに心を開き、よく知りあうことが出来たからだと思う。セミナーの終わりに、痛々しい歴史のトラウマから抜け出せ、気分が明るくなった。これまで、みんな友好的な雰囲気です話し合ってきたけど、礼儀正し過ぎて、間の距離感がずっと存在しているような気がしていた。今の雰囲気はいいスタートではないかと思う」(#11-175)、「セミナーの時間外でも一緒に飲みに行ったり、また最終日の夜、南京師範大学のキャンパス内で缶ビールを飲みながら、一緒に歌を歌ったり…。日本人である私たちのことを『ベストフレンド』だと言ってくれた中国の友達。ともに過ごした4日間は決して忘れることのない、本当に幸せな時間だった(#11-146)」などの感想のなかに、その成果を見ることができるだろう。

4) 国境を越える多様な関係の紡ぎ直しへ

アルマンドは、もともとHWHを「和解の行為 (Acts of Reconciliation)」と呼んでおり (ボルカス、2010、p.91)、「謝罪には癒しの力があると信じている」と言っている (ボルカス、2011、p.45)。ワークショップには、「ごめんなさい」vs「ひどいよ」を交互に言う「台詞の繰り返し」や、皆の前で「私は中国人です」「私は日本人です」と言ってみる「アイデンティティのワーク」が含まれ、2011年のワークショップでは、さらに「椅子のワーク」と「謝罪のワーク」が加えられた。「椅子のワーク」とは、「日本の椅子」「中国の椅子」を向かい合わせて置き、日本人、中国人問わず、椅子に座って集合的な声を代弁するというものであり、それぞれの椅子には「表の声」と「裏の声」が置かれた。このワークでは、政府からの謝罪を要求する中国人に対して、日本人は政府に対する圧倒的無力感に打ちひしがれ、中国人はそれに苛立つという構図が現れた (村本、2011)。

日本政府は謝罪をしていないわけではない。このワークショップも日本政府の助成金を得て実現したものである。世界に向けて英語で発信されている外務省のホームページには、「歴史問題 Q&A」があり、「南京大虐殺」を認め、「日

本は、過去の一時期、植民地支配と侵略により、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えたことを率直に認識し、痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを常に心に刻みつつ、戦争を二度と繰り返さず、平和国家としての道を歩んでいく決意です」と回答している。それにも関わらず、これを反古にするような一部の政治家や右翼の声が大きく、一般の認識になっていない現状がある。このような状況下で謝罪に焦点があてられるとき、ある意味で参加者間の出会いは困難になるかもしれない。日本からの参加者は、政府を変えない限り、中国の人たちと出会う権利はないように感じてしまうし、中国側の思いを受けて日本へ帰れば、孤立感が増し、それだけ苦しみは大きくなる。

小田（2011）は、HWH のワークが「（中国）国民と（日本）国民との和解」という物語に添って組み立てられており、ナショナリズムを再生産することになるのではないかと批判している。イスラエルの社会心理学者ダン・バル＝オンは、ナチ党员の子孫とホロコースト生存者の子孫との共同ワークを組織するにあたり、あえて「和解」という語を使わず、ドイツ人やユダヤ人という集合的アイデンティティに基づく議論を避け、個人的な物語を互いに語り受容することを通じて、集合的アイデンティティとそれに結びつくステレオタイプを解きほぐしていくという。金丸（2011）もまた、日中間にイメージされる「和解」は「善・悪」や「被害・加害」といった二元論的試行に陥りやすく、対立を激化させるベクトルになりえると指摘している。

幸存者証言や揚子江での追悼式の場合においても日本人側から謝罪のテーマが現れてくるが、笠井の調査によれば、第三世代の若者たちは、年長者が膝をつき深く頭を下げている場面を目の当たりにすると、謝罪を強制されているような居心地の悪さを感じるという。思い起こせば、2007 年、国際会議を準備してくれた先達は、追悼式において「日本からの参加者皆で土下座をしましょう」と呼びかけた。これに違和感を覚えた私は「それぞれが自分の気持ちに素直に追悼すればいいのではないかと主張して認めてもらった経緯がある。実際には、回を重ね日本軍の蛮行を知れば知るほど頭は垂れる一方だったが、それでも上世代の謝罪の姿勢にギャップを感じたのは事実であった。若者世代が感じたという居心地の悪さは、おそらくこれと同種のものだろう。今回、日中の溝よりも世代間の溝を大きく感じるようになったのは興味深いことであった。2011 年の公開プレイバックシアターで出てきたテーマは世代交代であり（村

本、2011)、回を重ねるにつれ、日中問わず「戦争の話を直接聞いたことがない」「自分のなかに歴史のトラウマを感じない」と言う参加者が出てきたことに気づく。

振り返れば、このワークショップを通じて紡ぎ直してきたものは、日中の関係だけではなくた。2007年、私は密かに日本の上世代や男性たちとの関係の紡ぎ直しをしていた。2011年には、国境を越える女性たちとの新たな出会いを経験し(村本、2011)、中国の同世代との出会い直しをも体験した。とくに、一緒にワークした羅萃萃の物語は、時代に翻弄され傷つきながらも必死に生きてきた母を思い支える娘の物語として、まるで自分自身と合わせ鏡のような体験であった。後のインタビューで、羅の母と私の母は偶然、同じ呼び名を持っていたことを知る。不思議な縁を感じるものである。同様に、セミナー開催を通じて育んできた臨床心理学を共有する陶琳瑾や沈喻らとの絆があった。

ある中国の参加者は、上世代のサイコドラマに自分の父親を重ねていた。「このような場面を見て、まるでお父さんの子供時代に見えるようだった。……まるで自分も時空を超えて、お父さんと一緒にその時の辛さを体験し、彼が遭った嘲笑い、その時の不公平を経験したようだった。……今、この場にいる私は、昔理解できなかったことの答えを全てワークショップの中で見つけた。私により教育を受けさせ、彼の子供時代の憧れ、実現できなかった夢を私に果たそうとさせたわけだ。」(#11-173)。おそらく、歴史のトラウマ、すなわち、戦争によって破壊された関係は日中の関係だけではなくたのだ。父と息子、母と娘、男と女、世代と世代など、多くの関係が破壊された。私たちのアイデンティティは多様な関係性のなかでその都度立ち上がっていくものである。

もともと、HWHの魅力は多声性の尊重にあった(村本、2010)。歴史のトラウマによって損傷を受けるのは必ずしも国家や民族の関係性だけではない。小田(2013)は、近代国民国家は、明確な国境線とその中に住む均質な国民とで特徴づけられるが、国境線を引くこと自体が自然の流動的な関係性を人工的かつ暴力的に分断することであり、明確な国境線とそれに対応する国民アイデンティティ自体が関係性の分断として原トラウマ的だと言えるとする。HWHの3番目のステップは、「自分の中の加害者になる可能性に気づく」である。自らが、実は、日常的に加害・被害の錯綜する構造的暴力のなかに身を曝していることに気づきつつ、第4ステップである「深い悲哀」へと進むためには、出来事の背景にある歴史・社会的文脈にも目を向ける必要がある。張(2012)

は、第二次世界大戦後、冷戦体制のもとで二つの勢力が妥協する形で戦後処理が進められ、冷戦体制崩壊後、被害諸国のナショナリズムの高揚により、加害国と被害国との間の歴史問題が一気に顕在化したことを指摘している。さらにそれを利用しようとする勢力もあるだろう。このように外から出会いを妨げたり、影響を及ぼす力をどのように認識していけるのか、あらためて学際的な出会いが求められている。境界を越える多様な関係性を紡ぎ直すことで、一人一人を構成する多様な関係性から立ち上がるアイデンティティを尊重できるところへ向かっていけるといい。

5) 今後に向けて

トラウマからの回復の最終段階は、共世界（commonality）の確立であるとすれば、これには歴史の共通認識が不可欠である。今後、私たちのこの取り組みをどのように継続していけるだろうか。いくつかの計画がある。ひとつは、これまでの取り組みと成果をまとめ、日中英の3ヶ国語で出版することを考えている。日中戦後世代の出会い直しと関係の紡ぎ直しの小さな歴史を広く共有したい。張連紅はこれを留学生や学生の国際交流のテキストとして使うことを提案しているが、これまでやってきたことの成果を最大限有効活用する方法を検討してみたい。

ふたつめは、HWHの手法を少数先鋭のセラピーとしてでなく、一般の歴史・平和教育に応用し広めていくことである。セミナーのたびに中国側から提起されてきた「こんな少ない人数でやっても力が足りない。もっともっと多くの人に働きかけなければ」という声に応えることでもあり、今回、日本の若者の参加がきわめて少なかったことをどのように解決していけるのかということにも関わるものである。日本からのある参加者は、「その疑問とは扱っている問題の大きさに対してあまりにも一見さんお断り感が強いのではないかということである。やはり初めて見る人からは明らかに変なことをしている集団に見えるであろうし、それを中に入ってみればまともなことをしていると分かると言うのはどうなのであろうかということである」（#11-163）と言っているが、多くの若者たちが気軽に入ってこれるように間口を広げる必要性を感じている。2013年9月、最初の試みとして、立命館大学国際平和ミュージアムにて、歴史・平和教育に携わる教師やボランティアのためのワークショップを試みた。今後、立命館大学においてどのような展開ができるか検討中である。学部レベ

ルの平和教育や国際交流、教職課程に導入することができるのではないかと考えている。

三つめは、この出会いのワークショップの継続である。南京師範大学の心理学部でも陶琳瑾を中心にこれを検討してくれている。2013年10月には台北にてこの取り組みを紹介する機会があったが、今後、テーマを拡げて実践していくことも可能かもしれない。

最後になったが、専門的技術はもちろんのこと、ずっと大きな愛と配慮で私たちの歩みを支え続けてきてくれたアルマンド・ボルカスに感謝したい。歴史の大きな深淵に飛び込む勇気を与えてくれたのは、アルマンドへの信頼だった。他の参加者たちにとっても同様であることは、どの参加者感想を見ても明らかである。そして、深い理解のもとで私たちを受け容れ続けてくれた張連紅への感謝は尽きない。「南京を思い起こす：負の遺産を共有財産へ」（張、2011）の信念のもと、彼が南京で日中の大きな懸け橋となり続けていることは間違いない。2013年中秋節、彼は月餅を持ってセミナーを覗きに来てくださった。私たちは家族であるというのがそのメッセージである。その他、歩みをともにしてきた共同研究者や協力者、参加者の皆さんにも感謝を表したい。みなさんの理解と協力を得て、このような舞台設定をもって繰り返し南京を訪問することが可能になったことで、日中の参加者たちがあらためて歴史のトラウマを想起し、関係の紡ぎ直しを大きく前進させることができたことは大きな成果であったと考えられる。

<文献>

張連紅（2010）「トラウマを癒す～日中関係における避けられない課題」『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす2009」の記録』

Herman, J. L. (1992). *Trauma and recovery*. New York: Basic Books. （ジュディス・ハーマン著、中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房、1995）

岩井圭司（1999）「被災地のその後」こころのケアセンター編集『災害とトラウマ』みすず書房

金丸裕一（2011）「戦争史研究の諸問題」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす2011」の記録』

Marsella, A. J., Friedman, M. J., Gerrity, E. T., & Scurfield, R. M. (1996). *Ethnocultural*

- aspects of PTSD: Some closing thoughts. In A. J. Marsella, M. J. Friedman, E. T. Gerrity, & R. M. Scurfield (Eds.). *Ethnocultural aspects of posttraumatic stress disorder: Issues, research, and clinical applications* (pp. 529-538). Washington, DC: American Psychological Association.
- マクファーレン (1999) 「自然災害の長期的転帰」 ころのケアセンター編『災害とトラウマ』 みすず書房
- Muramoto Kuniko (2002) Women's trauma and healing in Japanese culture. Dissertation, the Union Institute
- 村本邦子編著 (2010) 『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性：国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』立命館大学人間科学研究所ヒューマンリサーチ 19 (http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html)
- 村本邦子編著 (2012) 『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み：国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録』立命館大学人間科学研究所共同対人援助モデル研究 3 (<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>)
- 村本邦子編著 (2012) 『人間科学と平和教育～体験の心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から』立命館大学人間科学研究所共同対人援助モデル研究 5 (<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>)
- 小田博志 (2011) 「南京と和解～歴史の深淵に橋をかける」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録』
- 小田博志 (2012) 「物語のタペストリー」『人間科学と平和教育～体験の心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から』立命館大学人間科学研究所
- 小田博志 (2013) 2013 年 11 月 12 日付け著者宛電子メール
- Summerfield, D. (1995). Addressing human response to war and atrocity: Major challenges in research and practices and the limitations of Western psychiatric model. In Kleber, Figley and Gersons (Eds.). *Beyond trauma: Cultural and societal dynamics*. (pp. 17-29). NY: Plenum Press.
- ボルカス, A. (2010) 「南京の悲劇の歴史に共に立ち向かう日中文化」『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』
- ボルカス, A. (2011) 「『南京を思い起こす 2011』ファシリテーターとしてのリフレクシオン」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』
- Watters, E. (2010) Crazy like us: Globalization of the American psyche. NY: Sterling Lord Literistic. (イーサン・ウォッターズ著、阿部宏美訳、『クレイジー・ライク・

※引用は過去の報告書からであり、たとえば「(#10-55)」と記載されたものは 2010 年版のセミナー報告書 55 頁を意味する。「(#A-10)」はインタビューデータ A の 10 頁を示している。

2-2 「回忆南京」7 年的成果和今后的展望 ～与历史心理创伤相识的工作坊 HWH ～

立命馆大学 村本邦子

1. 经过

作为临床心理士，在与虐待，性暴力，家暴等的暴力受害者的接触中，追溯一个个案例的话，父母那一代的暴力会出现在我们眼前，再往上追溯一代的话，又能看到过去的战争。我认为要切断暴力的世代间连锁，有必要把微观的心理创伤与宏观的社会・历史的记忆相结合进行修复。2007 通过村川治彦，我与 HWH (Healing the Wounds of History) 相识，并为参加南京大屠杀 70 周年纪念的国际会议，第一次拜访了南京。亲眼看到日本军的所为，我感觉这件事与自己也是有关系的，我和同行的日本伙伴一起为牺牲者追悼并向他们谢罪。南京的友人们亲切地接待了我们，而且学生们对我们说“想和日本的年轻人进行交流。如果能承认事实互相了解的话，我们可以成为朋友。下次请一定带立命馆大学的学生们一起过来”。那时我想一定要回应同学们的呼声。

只是我担心一件事，那就是二次创伤。亲眼目睹自己的祖先所作的过于残忍的事实，我们出现了头疼，发烧，呕吐，身体疼痛等身体症状。为了能让日中双方的年轻人安全地会面，我们运用 Armand Volkas 的 HWH 手法，企划了工作坊。作为前阶段，在京都定期开过学习会，并于 2008 年 7 月在京都举办了为期 4 天的和平教育研讨会（IMAGINE21 制作的「地狱的 DECEMBER ～悲伤的南京」上映，以及 Armand Volkas 的 HWH「用身心思考历史心理创伤～亚洲战后世代继承的战争体验」，2009 年 3 月在旧金山召开了 HWH「修理毁坏的桥～直面第二次世界大战后的日本和中国的文化」。也于 2009 年 10 月在南京首次实现了 HWH。

2010 年 10 月在伦敦, 2011 年 8 月在苏州, 我和笠井绫试着做了相关的发表和工作坊。2011 年 8 月在南京举办了第 2 次 HWH, 2012 年在京都召开了 HWH 和国际研讨会, 2013 年 9 月在南京举行了第 3 次 HWH。这期间得到立命馆大学的研究经费和文科省的科学研究经费的大力支持, 今年是最后一年, 期待成果报告。2012 年 9 月到 2013 年 7 月期间, 也实施了评价访谈。还在分析的阶段, 虽然只是一部分结果, 我想汇报一下经过。

2. 破坏关系性的历史心理创伤

2012 年在京都举行的国际研讨会上, 从治疗, 教育, 运动, 研究等的观点探讨了能否把我们做过的事总结成一个定义的问题(村本、2012)。小田(2012)提出, 每位参加者分享一下自己的, 或是与其他参加者的沟通中出现的跨国界或世代的故事, 并把互相沟通中作为和平良好的「开端」的故事, 像编织锦绣一样编制成「故事集锦」。并且, 他对 HWH 包含的「心理创伤假设」也提出了批判, 这次的研讨会以接受这个假设的形式, 想对心理创伤进行再定义。

实际上, 定义心理创伤并非易事。作为正式定义心理创伤的代表, 有由美国精神医学学会编制的 DSM(诊断和统计手册), 即便如此, 以什么为基准来定义心理创伤有很大的变迁。(Muramoto, 2002)。DSM(1952)中, 作为「重大精神压力反应」, 列举了战斗和市民生活上的破局(火灾、地震、爆炸等)», DSM-II(1968)中, 作为「成年人生活的调整反应」, 列举了抑郁, 不被期待地伴有敌意的怀孕, 战斗中畏惧的士兵, 面对执行死刑的牢犯。最早出现 PTSD 概念的 DSM-III(1980)是以越南归还兵的症状为基准, 写道「明显的精神压力是, 无论谁都会引发的重要的症候群」, 特别规定了心理创伤反应。「Post-Traumatic」这个词, 也是把重心放在区分心理创伤的前后, 事件和反应之间的明确因果关系。关于造成心理创伤的事件, DSM-III-R(1987)中定义为, 除了对生命和身体安全带来深刻的威胁外, 「超过人类经验范围的, 给谁都带来显著痛苦的事件」。但是, 出现了「战斗体验或强奸是超过人类经验范围的事件吗」的议论, 所以在 DSM-IV(1994)中阐明「超过人类生活范围的事件」不是必须的, 而强调恐怖、威胁、危险的主观认知。但是定义的模糊再次受到批判, 现在的 DSM5(2013)中, 明确为「遭遇死亡、重伤、性暴力等, 或是暴露可能遭遇的事件」, 并把附随的症状作为问题来看。

PTSD 概念的成立背后有战争归返兵的问题。20 世纪之后的战争的特征是把一般的市民卷入进来。第一次世界大战中死伤的市民占 5%, 而在第二次世界大战中占 50%, 越南战争中则超过 80%。这是为了支配社会利用恐怖的结果, 标

的不是领土而是人,心理性的战争是中心的要素(Summerfield, 1995)。这样一来,由于战争造成心理创伤的对象不单是归返兵,也有一般的市民。战争是否是超过人类生活范围的事件,能通过社会·文化来决定。

心理创伤的影响不止停留在 PTSD, 也通过分离、抑郁、身心症状等形式表现出来。但也有人指出有文化差异,比如在西方以外的国家,分离和身体症状很明显(Marsella, Friedman, Gerrity and Scurffield, 1996)。批判精神障碍帝国主义化的 Watters (2013), 描写了 2004 年海啸袭击斯里兰卡时,美国的心理创伤治疗师如何灌输欧美的 PTSD 观念。而科伦坡大学的教授们呼吁,要把幸存者的体验当作「心灵的伤痕」,不要把他们当作「心理学的牺牲者」,心理创伤不是大脑自动产生的生理反应,而是传达文化的情报。对于斯里兰卡人来说,心理创伤是毁坏社会关系性的东西,因为体验恐怖痛苦到最后的人,是从社会生活中孤立的人,是在亲戚关系中出现不顺的人。欧美的 PTSD 观念认为,心理创伤引起精神打击,结果引发社会问题,而对于斯里兰卡人来说,在集团中找不到自己的立足之地会引起痛苦,而不是起因于自己的心理问题。

1995 年发生阪神淡路大震灾的日本或许也发生了类似的事情。1997 年、在神户召开的有关灾害和心理创伤的国际研讨会上讨论道,在日本被诊断为 PTSD 的比例非常低(2.5%)。岩井(1999)阐述了原因,他有如下的假设,受到心理创伤的日本人的表象,比起侵入的思考更容易出现身体症状、PTSD 特征的要因在震灾后,并没有产生特别大的影响,一般来说,作为最大的要因是产生无力感和孤立感,但因为是在大都市发生的震灾,受灾者整体得到援助因此有一体感。另外,MacFarlane (1999) 也指出,使用的心理评估不恰当。

实际上,跨文化从事虐待,家暴,性暴力等的女权论者们也提出了,要提防把心理创伤与作为精神障碍的 PTSD 相结合从个人的心理问题来看待。我自身在长年从事心理创伤的临床工作中也对心理创伤概念产生了纠结的情绪。日本在战后的重建上只着眼于经济的复兴,结果导致泡沫经济爆发,迎来了经济萧条和抑郁的时代。1995 年以后,心理创伤, PTSD 概念被引入,加速了心理主义化。这是危险的信号。如果个人只关注被封闭的自我世界,很难注意到,社会被为了个人利益的某些人所摆布。

因此我们从地区社会的心理创伤,历史心理创伤的概念来看,这是因为考虑到个人的心灵可能在社会或历史中敞开。2009 年、在南京实施第一次 HWH 时,我认为「集团引起的暴力会破坏地区社会,并带来消极的打击。如果这样放置的话,这种打击会超越时代被继承,可能会使社会整体产生扭曲」(村本、2010)。暴力

不是物理的破坏，会带来关系性的破坏。所以心理创伤伴随着恐怖体验的压倒性无力感和孤立无援感。历史的暴力，会破坏加害方和受害方的关系。经历过不能共有的非人类体验的人，会破坏与他人的关系，与社会的关系，与世界的关系。Herman（1992）指出，恢复心理创伤的最终阶段是恢复「共世界（commonality）」。

综上所述，我们把暴力对关系性带来的消极打击称为心理创伤。心理创伤的恢复，或是历史心理创伤的修复，需要把被破坏的各种关系重新连接起来。我认为，为了切断暴力的世代间连锁，有必要把被断开的个人与社会或历史重新连接起来。因此要重申，我们立志于把被南京大屠杀这样的历史暴力破坏的关系重新建立起来，为此开展工作坊。

3. 被忆起的历史心理创伤和关系的重建

通过以「回忆南京」为主题的工作坊，历史心理创伤对战后世代造成的影响浮出了水面。最常见的是，中方的不信任感，疑惑，愤怒；日方的不安，恐惧，紧张。这些否定的情绪，总是与回顾工作坊时肯定的变化以对应的方式表现出来。比如，在 2009 年 HWH 最后一天的回顾中，中国的战后世代这样说道，“之前我一直以为日中两国可能不能和解，但是通过这次的活动，我看到了日中两国和解的希望”（#10-55）※、“以前我对日本没有好感。但是在和日本朋友交流几个小时后，我感觉，日本人中，心地善良的人也有很多”（#10-56）。

日本的战后世代这样说道，“来之前我感觉很不安，不知道会发生什么。在我完全不了解的中国，不知道中国人是怎样的。而现在感觉到的是，与之前完全相反的心情，非常安逸。我想这是因为认识了大家”（#10-58），“说实话，来南京之前感觉很可怕。我在澳大利亚留学的时候，认识了一位 15 岁的中国男孩，他说讨厌日本人，还被他骂到滚回去，那件事给我留下了阴影。所以这次来南京我感觉很害怕，想是不是还会被骂，但是，即便是日本做出了那么悲惨的事，中国人还是敞开了心扉欢迎了我，非常感谢。走在大街上，人们也很和气，长相也和日本人没有什么两样，让我感觉很温暖”（#10-60）。

张连红（2010）通过观看现代的体育比赛，消费者调查，国民情绪问卷调查等发现，70 年前的战争留下了深刻的影响，每当报道回忆日本军国主义事件时，就会引发部分中国人民的抵制日货或游行等的强烈反应，他指出这也是心理创伤留下的痕迹。并且，为测试 HWH 的效果，想调查一下参加者对钓鱼岛问题的态度（#F-7）。实际上，2012 年的秋天、因钓鱼岛问题日中关系发生巨大摩擦的时候，我们为访谈来到了南京，以前的参加者们也从四面八方聚集起来，大家都很高兴。

其中一位参加者这样说道，“参加完工作坊后我更理性的看待问题了，能判断非理性情绪的人和理性的人”（#D-2），这位参加者去了云南省，参观了日本军蛮行时的史迹，说道“如果我没参加这个工作坊，去到那边后，我也许会带着愤怒的情绪回来。但是参加了工作坊后，不单是愤怒的心情，而是能从人道主义的角度想，这不仅是日中两国的事，我觉得是人类共同的事”（#D-4）。

这些受害国和加害国的战后世代，通过 HWH 的工作坊，想起了在日常生活中沉浸在心底的破坏关系，但同时又在重建这个关系。在中国的参加者中，也有对这个课题感到痛苦和孤立的人。“一直以来我都深深地感受着战争带来的痛苦。这是从父母，父母的父母那里感受到的。并且这种痛苦也传给了我。战争带来的心理创伤一直积压在心底，我没办法，也不知道该怎样改变这样的心情，到现在为止没有任何方法”（#10-57）。这里省略一些详细的内容，但是在工作坊中，与我们共同分享的参加者们的故事，让我深深感到历史心理创伤以怎样具体的方式影响着战后世代。

工作坊以南京大屠杀为主题，所以也就允许有关的故事，情绪如实的表达出来。罗萃萃（2010）说道，至今为止跟很多的日本人有过交流，也构建了亲密的关系，但是这次体会到了没有过的感受，正如「君子之交淡如水」。这也是 HWH 第一阶段「打破禁忌和沉默」的成果。综上所述（村本、2010），下决心参加工作坊本身就是参加者迈出了最初的第一步，第二步就是「彼此不是以集团，而是以拥有各自的故事和面孔的个人来认识对方」。

这样的相知并不只在 HWH 工作坊这个舞台上展开，日中的参加者们还一起吃饭，一起去夜市。“研讨会结束，8 号晚上的宴会上，我感到了跟刚开始时不同的气氛。国籍不同的年轻人们像亲密的友人一样开着玩笑。宴会后，大家在湖边，谈着吉他唱着歌，分享着彼此的心情。离别临近时，寂寞的心情涌现心头。这是因为 4 天的时间，通过工作坊我们互相敞开了心扉，加深了彼此的了解。研究会结束时，从痛楚的历史心理创伤中走出，心情也豁然开朗了。会中，大家虽然在友好的氛围中交谈，但是太彬彬有礼，之间一直有距离感。而现在的气氛是个很好的开始”（#11-175），“研讨会以外的时间大家也一起喝酒，而且最后一天的晚上，在南京师范大学的校区里我们一边喝着易拉罐啤酒一边唱歌…。中国的朋友们对我们日本人说，是『最好的朋友』。一起度过的 4 天是绝对不会忘记的，这是真正幸福的时光”（#11-146）。等等的感想中，我看到了成果。

4. 超越国界多样的关系重建

Armand 称 HWH 是「和解的行为 (Acts of Reconciliation)」(Voulkos, 2010, p. 91), 说「相信谢罪有治愈的能力」(Voulkos, 2011, p. 45)。工作坊中包含了, 互相说「对不起」vs「太过分了」的「重复台词」, 在大家面前说「我是中国人」「我是日本人」的「自我同一性的工作」, 在 2011 年的工作坊中又增加了「椅子工作」和「谢罪工作」。「椅子工作」是把「日本的椅子」「中国的椅子」相对放置, 不分日本人或是中国人, 参加者坐在椅子上代言, 并且每把椅子又设置「表面的声音」和「内心的声音」。在这个工作中, 对要求政府谢罪的中国人, 日本人面对政府的无力感被打垮, 中国人表现出很着急的样子(村本、2011)。

日本政府并不是没有谢罪。这个工作坊也是因为日本政府的助成金才得以实现。通过英语向世界发信的外务省的网页上「历史问题 Q&A」中, 就承认「南京大屠杀」的事实, 并回答道, 「我们坦诚地认识到日本在过去的一段时期, 由于对殖民地的支配和侵略, 给很多国家, 特别是对亚洲诸多国家的人民带来了巨大的损失和痛苦, 痛切地反省和发自内心的歉意, 时刻牢记于心, 下定决心绝不再发动战争, 今后走和平国家的道路」。即便如此, 一部分政治家和右翼的反抗声音强烈, 使得这样的回答还没有成为一般的认识。这种状况下把焦点对准谢罪的话, 我们两国的参加者要见面可能就困难了。日本的参加者感觉, 如果政府不发生改变的话, 就没有与中国人见面的权利, 而接纳了中国方面的想法回到日本的话, 又会增加孤立感, 痛苦也就变大了。

小田(2011)批判, HWH 的工作是按「(中国)国民和(日本)国民的和解」的故事构成的, 这样会再产生民族主义。以色列的社会心理学家 Dan・Baru = On (日语读音) 在组织德国国社党党员的子孙和大屠杀幸存者子孙的共同工作时, 特意不使用「和解」这个词, 避开德国人或犹太人谈论集合的自我同一性, 而是通过谈论各自的故事互相接纳, 来消除集合的自我同一性和与其相关连的固有模式。金丸(2011)也指出, 日中之间被意象的「和解」容易陷入「善·恶」或「受害·加害」的二元论试行, 也是容易成为激化对立的矢。

幸存者证言或是在扬子江的追悼式上, 出现了日本人谢罪的主题, 但是根据笠井的调查, 第三世代的年轻人看到年长者下跪低头的场面, 有种被强迫谢罪的不舒服的感觉。回想起来, 2007 年准备国际会议的老师们呼吁, 在追悼会上「让日本来的参加者都下跪」。对此感觉不谐调的我主张「每个人用坦诚的心情来追悼就好」, 这个想法得到大家的赞成。实际上, 次数越多, 对日本军的蛮行了解

的越多，头就低得更深，但是对上一代人的谢罪感到有隔阂也是事实。年轻世代感到的不舒服，或许也是同样的心情吧。此次，比起日中的鸿沟感觉世代的鸿沟更大，也是相当有意义的。在2011年公开的即兴演剧中看到了世代替换的主题（村本、2011），随着次数增多，我注意到不论日方还是中方，有的参加者说「没有直接听说过战争的事」「没有感觉到自己有历史心理创伤」。

回头想想，通过这个工作坊重建的不仅是日中的关系。2007年我暗自重建了日本上世代和男性们的关系，2011年经历了和跨国界女性们的相遇（村本、2011），也体验了和中国同世代的重新认识。特别是一起工作的罗萃萃讲述的，女儿支撑着被时代愚弄伤痕累累但拼命活下来的母亲的故事，就好像是我自己的经历的写照。之后的访谈中偶然知道，罗的母亲和我的母亲是同名，这真是不可思议的缘分。而且，通过研讨会的举办，也加深了与同样是临床心理学专业的陶琳瑾和沈喻等之间的纽带。

一位中国的参加者在上世代的心理剧中看到了自己父亲的影子。他这样说道“看到这样的场面，我仿佛看到了父亲的孩童世代。……好像自己也穿越了时空，和父亲一起体验那时的艰辛，经历他所遭遇的嘲笑，和不公。……此时此刻通过工作坊，我找到了以前不能理解的一些事情的答案。（父亲）让我受到良好的教育，是让我来实现他儿时的憧憬，完成他不能实现的梦想”（#11-173）。或许，历史心理创伤，也就是由于战争被破坏的关系，不只是日中的关系。父亲和儿子，母亲和女儿，男人和女人，世代和世代等，很多的关系被破坏了。我们的自我同一性在多样的关系中一次又一次的建立起来。

本来，HWH的魅力是尊重多声性（村本、2010）。历史心理创伤带来的损伤，一定不只是国家或民族的关系。小田（2013）阐述道，近代国民国家的特征是，明确的国界线和居住在里面的均质的国民，但是划分国界线本身就是对自然的流动关系进行了人工的或是暴力的分割，这种明确的国界线和与其对应的国民自我同一性本身就是关系性的分割，可以说是原心理创伤。HWH的第3阶段是，「注意到自己可能变成加害者」。注意到自己的日常生活可能置身于加害·受害的错综的构造暴力中，并为了进入到第4阶段「深度的悲哀」，我们有必要知道事件背后的历史·社会的文脉。张（2012）指出，第二次世界大战之后，在冷战体制下，两大势力以妥协的形式进行战后处理，冷战体制崩溃后，受害诸国高扬民族主义，使得加害国和受害国之间的历史问题一下子表露出来。也有想要利用这种关系的势力。像这样防止外界的进入，怎样认识这样的影响力，还需要跨学科的研究。但愿在跨越国界重建起来的多样关系下，能尊重从构成个人的多样关系建立自我同一性。

5. 今后的展望

在心理创伤的恢复最终阶段，要确立共世界（commonality），对历史的共通认识是不可缺的。今后，我们的工作该如何继续下去。我有几个计划。第一，总结至今的努力和成果，并以日中英3国语言出版。想把日中战后世代的重新相识，和重建的关系，这样的小历史推广开来共同分享。张连红提议把出版物作为留学生或是学生国际交流的教科书来使用，我也想探讨最大限度的有效活用至今的成果的方法。

第二，不是少数先锋的咨询师会使用 HWH 的手法，把它应用于一般的历史·和平教育进行普及。响应每次研讨会中国方面提出的“这么少的人做还是力量不足，要发动更多的人”的呼声，探讨这次参加的日本年轻人过少的问题如何解决。日本的一位参加者这样说道，“问题是这个组织的工作一看就太容易被拒绝。外人第一眼看上去有种这个组织做的事有些不同寻常，但如果走进来知道了做的是正儿八经的事的话，说法可能不一样”，我觉得有必要扩大范围让更多的年轻人容易走进来。作为最初的尝试，2013年9月，在立命馆大学国际和平博物馆，对从事历史·和平教育的教师和志愿者们做了工作坊。今后立命馆大学还会有怎样的活动还在探讨中，我在考虑能不能把它导入学部的和平教育，国际交流的教职课程。

第三，持续工作坊。在南京师范大学心理学部以陶琳瑾为首的老师们也在讨论这个话题。2013年10月在台北有机会介绍了我们的工作，今后有可能把扩展课题落实到实践上。

最后，要感谢不单拥有专业的技术，而且一直用伟大的爱和关怀支撑我们每一步前行的 Armand Volkas。是因为对 Armand Volkas 的信任我才能有投入到历史深渊中的勇气。看到大家的感想就知道其他的参加者们也同样如此。并且也要感谢理解我们并直接接纳我们的张连红。在「回忆南京：把负的遗产转化为共有财产」（张、2011）的信念下，他矢志不渝地在南京为日中搭建着一座大的桥梁。2013年中秋节，他还拿着月饼来研讨会看望我们。这表示我们是一家人。另外，也要感谢一路走来的共同研究者，协助者，参加者们。因为得到了大家的理解和协助，我们才能有这样的舞台，能一次又一次的拜访南京，也才能有日中的参加者回忆起历史心理创伤，为重新构建关系大步向前。我觉得收获的成果很大。

<文献>

张连红（2010）「治愈心理创伤～日中关系不能逃避的课题」『由于战争产生的心理创伤世

代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2009」记录」

Herman, J. L. (1992). *Trauma and recovery*. New York: Basic Books. (Herman, J. L. 著、中井久夫译『心理外伤和恢复』MISUZU 书房、1995)

岩井圭司 (1999)「受灾地区的后来」心理援助中心编辑『灾害和心理创伤』MISUZU 书房

金丸裕一 (2011)「战争史研究的诸问题」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2011」记录』

Marsella, A. J., Friedman, M. J., Gerrity, E. T., & Scurfield, R. M. (1996). Ethnocultural aspects of PTSD: Some closing thoughts. In A. J. Marsella, M. J. Friedman, E. T. Gerrity, & R. M. Scurfield (Eds.). *Ethnocultural aspects of posttraumatic stress disorder: Issues, research, and clinical applications* (pp. 529-538). Washington, DC: American Psychological Association.

MacFarlane (1999)「自然灾害的长期转归」心理援助中心编辑『灾害和心理创伤』MISUZU 书房

Muramoto Kuniko (2002) Women's trauma and healing in Japanese culture. dissertation The Union Institute

村本邦子 (2010)「由于战争加害产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的尝试」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2009」记录』
(http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html)

村本邦子 (2011)「续・历史心理创伤和修复和解的尝试」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2011」记录』
(<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>)

村本邦子 (2012)「国际研讨会・工作坊『人间科学和和平教育～从以体验心理学为基础开发历史・和平教育计划的视角』～HWH 的展望」『人间科学和和平教育～从以体验心理学为基础开发历史・和平教育计划的视角』立命馆大学人间科学研究所
(<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>)

小田博志 (2011)「与南京和解～在历史的深渊上架桥梁」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2011」记录』

小田博志 (2012)「故事集锦」『人间科学和和平教育～从以体验心理学为基础开发历史・和平教育计划的视角』立命馆大学人间科学研究所

小田博志 (2013) 2013 年 11 月 12 日发给著者的电子邮件

Summerfield, D. (1995). Addressing human response to war and atrocity: Major challenges in research and practices and the limitations of Western psychiatric model. In Kleber, Figley and Gersons (Eds.). *Beyond trauma: Cultural and societal dynamics*. (pp. 17-29). NY: Plenum Press.

- Volkas, A. (2010) 「共同面对南京悲剧历史的日中文化」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2009」记录』
- Volkas, A. (2011) 「『回忆南京 2011』作为 Facilitator 的精神恢复」『由于战争产生的心理创伤世代间连锁和修复和解的可能性～国际研讨－「回忆南京 2009」记录』
- Watters, E. (2010) *Crazy like us: Globalization of the American psyche*. NY: Sterling Lord Literistic. (Watters, E. 著、阿部宏美译、『Crazy・like・American ～心病怎样输出』纪伊国屋书店 2013)

※引用了过去的报告书，比如「(#10-55)」是指 2010 年版的研讨报告书 55 页。「(#A-10)」是指访谈数据 A 的第 10 页。

2-3 “Remembering Nanjing” Results from the last 7 years and our future plans HWH: A workshop focused on building new relations through examining history and its traumas

Ritsumeikan University, Kuniko Muramoto

1. Sequence of events

As a clinical psychotherapist working with victims of violence, such as domestic violence and sexual violence, I have come to realize that much of the problem can be traced back to the parent's generation and even further back to the grandparent's generation where violence was closely linked to their experiences during the war. In order to prevent violence from being passed down from generation to generation, I found there was a need to work with traumas we carry on both the personal level and a group level, where traumas were linked to our historical and social memory. In 2007, I came in touch with HWH (Healing the Wounds of History) through Haruhiko Murakawa and visited Nanjing for the first time to participate in

an international meeting commemorating the 70th memorial day of the Nanjing Massacre. After personally witnessing the aftermath of what the Japanese Imperial Army had done, I realized that their actions were not unrelated to me, and with my fellow Japanese participants I went on to pay tribute and apologize to all the victims of the Nanjing Massacre. The people of Nanjing welcomed us warmly and the students told us that they “wanted more opportunities to interact with Japanese students. We can be friends if they acknowledge the fact and share the stories. So please bring students from Ritsumeikan University next time you come”. I strongly felt the need to respond to their request.

I had one worry: secondary traumatization. When we confronted the cold-hearted actions of our ancestors many of us had physical reactions such as headaches, fever, nausea, and aches in our body. In order for the younger generations of both Chinese and Japanese to meet in a safe environment, we decided to plan a workshop with Armand Volkas and his techniques known as HWH. As a preliminary step we had many small study sessions in Kyoto, a 4-day peace education program (watching the play “Hell in December ~Sorrow in Nanjing~” by Imagine 21 and a HWH session facilitated by Armand called “Thinking about historical trauma with both your mind and body ~The War experiences in Asia that are passed down to the younger generation~”) in Kyoto during July, 2008, and a HWH session, “Rebuilding the broken bridge ~Japanese and Chinese cultures confronting the aftermath of WWII~” in San Francisco during March, 2009. This all led to the first HWH session to be held in Nanjing during October 2009.

Along with Aya Kasai we had presentations and trial workshops in Toronto during October of 2010 and in Suzhou during August of 2011, which explained and modeled our plans in Nanjing. In 2011, we had our 2nd session of HWH in Nanjing, in 2012, a HWH session in Kyoto and an international symposium, and during September of 2013 we held our 3rd session of HWH in Nanjing. During this time, we were given research grants from Ritsumeikan University and scientific research grants from the Ministry of Education and are therefore responsible for presenting a final report by the

end of this year. For the purpose of our evaluation from these two sources, we worked on interviewing people who attended the workshop between September, 2012 and July, 2013. Although we are still in the midst of analyzing our work, we would like to report back on our progress so far.

2. Historical trauma as a reason for broken connections

In 2012, during the international symposium held in Kyoto, we questioned how to define the work we were doing from different points of views such as, therapy, education, social movement, and research (Muramoto, 2012). Oda (2012) proposed that it was research in which each participant, through their interaction with him/herself and other participants, found stories that had no borders or generation boundaries, which led to the development of peace and positive superstition, which then led to the braiding of polyphonic voices, and to its final representation as “a tapestry of stories”. Also there was criticism against the “trauma hypothesis” that HWH inherently contained, so this time I would like to redefine the word trauma considering all of these factors.

In reality, it is not easy to define the word trauma. The American Psychiatric Association created an official definition for the word in the DSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders) but even this definition can vary greatly depending on the context (Muramoto, 2002). The first diagnostic and statistical manual that the American Psychiatric Association published included trauma in the category “Gross Stress Reaction” (APA, 1952) and in the DSM-II (1968), GSR was placed into the category, Adjustment Reaction of Adult Life, with three short examples. These were (1) an unwanted pregnancy accompanied by depression and hostility; (2) a frightened soldier in combat; and (3) a prisoner facing execution in a death penalty case. In 1980, Post Traumatic Stress Disorder (PTSD) emerged in the DSM-III for the first time. As a result of psychiatric evaluation and treatment of Vietnam veterans, specificity about reactions to trauma reappeared. The prime criterion of diagnostic consideration was “existence of a recognizable stressor that would evoke significant symptoms

of distress in almost everyone". The important changes were that stress disorders were no longer restricted to acute responses in healthy individuals and that the new diagnosis PTSD was placed in the anxiety disorders section (Brett, 1996). The words "post-traumatic" indicate that there is a change in state of well-being +after injury (Wilson, 1995). The revisions were made to sophisticate language, meaning, and specificity of reactions to trauma in DSM-III-R (1987). The stressor criteria characterized traumatic events as being, "outside the range of human experience that would be markedly distressing to almost anyone". DSM-IV (1994) reflects minor changes from DSM-III-R, but the most significant change was made in the definition of the traumatic event. The new criteria no longer required that an event is infrequent, unusual, or outside of a mythical human norm of experience and the more subjective perceptions of fear, threat, and risk to well-being are stressed. In the most recent DSM V (2013) trauma is more narrowly defined as, "being involved in death, injury, or sexual violence or otherwise being exposed to these circumstances," and there is more focus on the symptoms that are a part of trauma.

The worry for and reemergence of PTSD came from the problem of war veterans. The wars since the 20th century were characterized by the involvement of civilian populations. In WWI only 5% of the death came from civilians, however, in WWII this number went up to 50% and in the Vietnam War it exceeded 80%. This was the result that the primary method to control societies became fear and the main target in the war became civilians and psychological warfare rather than land (Summerfield, 1995). Thus, trauma through war not only became a problem for war veterans but also for the civilian population. Whether or not war exceeds actions taken during normative human lifestyle should be determined by each culture and society.

Concerning the reactions to this worry for PTSD, we must consider that the symptoms of trauma are not only limited to PTSD but also include dissociation, depression, and physical reactions. People also point out the differences between cultures and how excluding Western cultures, dissociation and physical reactions are prominent amongst patients of

trauma (Marsella, Friedman, Gerrity and Scurffield, 1996). Watters (2013) who argues against imperializing mental disorders describes how in 2004 when the tsunami hit Sri Lanka, European and American trauma therapists overly emphasized the PTSD view. The professors from Colombo University argued that it was not right to round up the survivors as “psychological victims” and simplify their experiences as a “mental hurt”. They further argued that trauma is not an automatic reaction forged in the brain and that it was a way to pass down culture. For Sri Lankans, the trauma was an event that destroyed social connections and people that continue to suffer from fearful experiences were usually isolated from society and were not able to get along with their family. According to the PTSD view of Europeans and Americans, they tend to believe that trauma triggered the psychological damage and led to social problems, but for Sri Lankans, not being able to find their spot amongst a group is what brings torment and is not exactly caused by their own psychological problems.

The Great Hanshin earthquake in 1995 in Japan is another example as similar situations could be seen amongst the victims of the earthquake. In Kobe during 1997, there was an international symposium on natural disasters and trauma, where the low percentage of patients diagnosed as PTSD was debated. Iwai (1999) hypothesized that the reasons for these low numbers were the following: traumatized Japanese showed symptoms that were physical rather than psychological, the unique characteristics of PTSD did not greatly affect the population after the earthquake, normally the reasons for being diagnosed as having PTSD come from feelings of powerlessness and isolation but since this earthquake hit a major city, the victims had a sense of unity and the clients felt as though they were being supported by everyone. On the other hand, McFaren (1999) commented on this subject saying that the assessment used in this case was inappropriate.

The caution against linking trauma with PTSD, a mental disorder, and a defect in the individual's mind is a subject that crosses cultural borders and has been brought to the attention of society by feminists who work with DV, sexual violence, and assaults. As a psychotherapist who has been

working with trauma, I too, have struggled with the concept of trauma. After losing in WWII, Japan has focused the reconstruction of its nation on economic prosperity, which led to the crash of the economic bubble and to an age of economic depression (economic stagnation and depression). After 1995, the concept of trauma and PTSD were implemented in clinical psychology and the ideology of psychologism is quickly becoming popular. This is a dangerous sign as if we focus too much on the inner and outer world of each individual, we will not be able to realize when society is driven in a certain direction for the benefits of a certain individual.

This is why we chose to focus on the concept of shared trauma within a community or trauma embedded in history. We believed that this would enable us to open up the emotions and thoughts of individuals to society and history. In 2009, when we first implemented HWH in Nanjing, we focused on how; “violence that occurs at a mass scale will destroy communities and leave a negative impact on how a community should be. If this impact is left as is, it will be transferred beyond generations and will have the possibility to distort a whole society” (Muramoto, 2010). Violence not only implies physical destruction but also the destruction of relations. The reason that a trauma becomes a trauma comes from the utmost powerlessness and isolation triggered by an overwhelming experience of fear. Especially in violence related with historical events, there are often times a broken relation between the victims and the perpetrators. For those who have experienced inhumane actions that cannot be shared with others, their relationship with others, the society, and the world would be destroyed. Herman (1992) places “commonality” as the final stage of recovery from trauma.

In this way, I will define trauma as the negative impact that violence brings to relationships. Recovering from trauma or restoring historical trauma is mainly based on rebuilding the many relationships that were destroyed by the certain experience. In order to prevent violence from being passed down from generation to generation, there is a need to rebuild the relation between the isolated individual and society and history. Therefore,

our efforts to work with the Nanjing Massacre can be redefined as a workshop that provided an opportunity for people to meet and rebuild relations destroyed by historical violence.

3. Embracing history and rebuilding relations

As we worked with the theme of our workshop “Remembering Nanjing”, we could see the clear effect that historical trauma had on the post-war generation. The emotions most frequently seen amongst this generation of Chinese was distrust, suspicion, and anger and the most frequently seen amongst the Japanese was anxiety, fear, and nervousness. These negative emotions were always presented in comparison to the positive changes that people perceived in their reflection of the workshop. For example, during the reflection on the last day of HWH in 2009, the Chinese post-war generation said that, “Until now, I was not sure if reconciliation was possible between Japan and China. However, after participating in HWH I began to see hope in of reconciliation between the two countries” (#10-55) ※, “until now I never had a good impression of Japan. However, after hours of interacting with Japanese people I realized that amongst them, there were many kind-hearted people too” (#10-56).

The Japanese post-war generation expressed their thoughts by saying things such as, “before I came here I felt very anxious as I was going to China, a land I was unfamiliar with, and had no idea how the Chinese people were going to treat me. However, right now I feel the complete opposite and am feeling very relaxed. I believe this change was caused by the many people I met during my time in China” (#10-58), and “I was honestly very scared before coming to Nanjing. When I was studying abroad in Australia, I met a 15-year-old Chinese boy who told me he disliked Japanese people, verbally abused me, and told me to go home. I think this experience had become a trauma for me and was a big reason for my fear in coming to Nanjing, as I thought I would be abused again. I would like to thank the Chinese people as, despite all the atrocities that Japan committed, the Chinese people welcomed us warmly and when we went out into the city,

the people there were also very welcoming and this filled me with warmth and happiness" (#10-60).

Professor Zhang (2010) pointed out that the after-effects of the war 70 years ago could also be seen in the modern age in situations such as watching sports, consumer research, and civilian questionnaires. He also pointed out how the symptoms of historical trauma could be seen in situations such as radical Chinese boycotts and demonstrations every time there are events that portray Japanese imperialism. As a measurement for the effects of HWH he suggested that we take a survey revealing the participants' emotions on the problem of the Senkaku islands. In reality, when much friction reemerged between the two countries because of the Senkaku islands during the fall of 2012, we visited Nanjing to interview the people there and at this time many of the past participants rejoiced at seeing each other. One of the participants even said that, "after participating in the workshop I have been able to look at problems more objectively. I am able to tell apart those with a rational mind and those who without" (#D-2), After going to the Yuunan province and observing the barbaric actions of the Japanese Imperial army one participant replied saying, "if I had not participated in this workshop, I probably would have gone to China and left with a feeling of anger. After I participated in the workshop I was taught not to be angry at the Chinese and learned more about humanism and that this sort of problem not only revolved around Japanese-Chinese relations but around humanity in general" (#D-4).

What we have here is an example of how through the context of HWH, the post-war generation of both the perpetrating country and the victimized country discovered emotions and destroyed relations that would otherwise remain unrevealed, and made an effort to rebuild them. Amongst the Chinese participants there were many who expressed emotions of uneasiness and isolation when dealing with this theme. "Even before participating in this event, I had been feeling a deep sense of pain and distress concerning the war, as these were the emotions that could be perceived from my parents and grandparents. The traumas that came from

the war were stored inside of me as well. However, there was no way in which I could deal with these emotions thus far“ (#10-57). In this manuscript I leave out some details, but during the workshop it was possible to perceive the specific ways in which historical trauma has been passed down and affected the post-war generation.

In this workshop we worked with the theme of the Nanjing Massacre and therefore participants had the freedom to express stories and emotions that were related to this theme. Luo Cuicui (2010) had previously interacted with and befriended many Japanese people, but what she gained in her time during this workshop was something she had never experienced and was an experience that foreshadowed the Chinese proverb, “a hedge between keeps friendship green”. Her experience is the result of the first step in HWH “breaking silence and taboos”. As I pointed out before (Muramoto 2010), the participants have taken their first step forward when they made the decision to participate in the workshop and this leads to the second step, “not looking at each other as a group but as individuals who all have different stories and personalities”, which is a process that focuses on meeting each other.

This sort of encounter was not only limited to the time that the actual workshop was going on but also happened at times after the actual workshop was over and the Japanese and Chinese participants had meals together or went out into the city at night. The results of these sort of encounters can be seen from the following thoughts of the participants: “After the seminar was over and we went to the dinner party on the 8th, the atmosphere was very different compared to when everyone first met. Young people of different nationalities were talking and even joking around with each other as though they were best friends. After the dinner party we all gathered at the ridge by the lake to sing, play the guitar, and talk to each other about our feelings on the workshop. When the time for goodbyes was drawing near I was filled with a sense of loneliness. I think this was because I was able to really open up and get to know everyone during the past 4 days of the workshop. At the end of the workshop I was much more optimistic as

I was able to escape the pain of historical trauma. Until now, I felt that although we had a friendly relationship we were still a bit too polite with each other and that this left a little bit of awkwardness. I feel that the relationship we have now is an ideal starting point" (#11-175), and "Even in the time outside of the seminar we would go out drinking together and on the last night we walked around Nanjing Normal University with beers in our hands and sang together... My Chinese friends called us Japanese participants 'best friends.' The four days that I spent with them will be a time of happiness that I will never forget" (#11-146).

4. Crossing borders and rebuilding various relationships

Armand originally called HWH "acts of reconciliation" (Volkas, 2010, p.91), and said that, "I believe apologies have the power to heal" (Volkas, 2010, p.45). The workshop included activities such as "Repeating lines" where participants took turns reciting the lines, "I'm sorry" and "that hurt me" and work dealing with identity where participants stood in front of the group saying "I'm Japanese" or "I'm Chinese". In addition to these activities, in the 2011 workshop we added activities such as "work using chairs" and "work using apologies". In "work using chairs" we would place two chairs facing each other and label them as a "Japanese chair" and a "Chinese chair" and have participants, regardless of ethnicity, sit in the chairs to speak on behalf of the collective voice of the two sides and put additional chairs behind the original two to represent the actual voiced opinions and the unexpressed voices. From this work the irritation of the Chinese became apparent, as they were demanding an apology from the Japanese government and the Japanese were distraught by a sense of powerlessness against their own government (Muramoto, 2011).

It is not that the Japanese government did not apologize. Even this workshop was an event that was feasible only with the grant given by the Japanese government. In the English written portion of "Historical Issues Q&A" on the Ministry of Foreign Relations homepage, they accept the "Nanjing Massacre" as a fact and it is written that, "Japan candidly

acknowledges that during a certain period in its history, Japan, through its colonial rule and aggression, caused tremendous damage and suffering to the people of many countries, particularly to those of Asian nations, and holds a firm resolve to never repeat war again and to advance the path of a peaceful nation with feelings of deep remorse and heartfelt apology always engraved in mind.” Despite this, the voice of certain politicians and right-winged activists that deny the Nanjing Massacre seems to be reflected so much more, causing this understanding and acceptance to be under recognized by the general public. Under these sorts of circumstances it would be hard for participants to attend a workshop that puts a focus on interacting and apologizing of the victims and perpetrators. For the participants from Japan it would feel as though they did not have the right to go and see Chinese people unless there is a change in the government and would therefore feel even more isolated and uneasy when they come back to Japan carrying with them the hopes of the Chinese participants.

Oda (2011) criticized the work done in HWH, as he believed it was based on the storyline of, “the reconciliation of Chinese and Japanese civilians” and that it would recreate a strong sense of nationalism. When facilitating work between the descendants of Nazis and the descendants of Holocaust survivors, Israeli social psychologist Dan Bar-On avoided the use of the word “reconciliation” and the idea that there is a collective identity that German and Jewish people hold. Instead he focused on the personal stories of the people on each side, making them easier to accept and by doing so, unraveled the stereotypes that were linked to their collective identity. Kanemaru (2011) also pointed out that the “reconciliation” imagined by both the Chinese and Japanese side often has the danger of falling into a dualistic way of thinking where there is a “good and bad” and “a victim and a perpetrator” and this would lead to further conflict between the two nations.

In situations such as hearing the stories of the survivors and having a memorial at the Yangtze River for the victims, the theme of apology came up from the Japanese side. According to Kasai’s research, during this time the

younger people of the third generation (the generation that experienced the war being the first generation) felt uncomfortable and thought they were being forced to apologize, as they watched elder people go down to their knees and bow their heads down to the ground. Looking back to 2007, I remember how the leaders of the International meeting told everyone, “all the participants should come together and kneel down” at the memorial event. However, I felt that there was something wrong about this and suggested that, “each person should act in whatever way they feel right during the memorial” and my suggestion was approved. In reality, every time we went to Nanjing and realized more and more the barbaric acts that the Japanese Imperial Army committed my head kept sagging downwards, but nonetheless it must also be stated that feeling a gap with the apologetic attitude of the older generation was also an apparent sentiment. The uncomfortable feeling that the younger generation felt must be something similar to this. The fact that the gap between generations was larger than the gap between the Chinese and Japanese relations is an interesting point that became apparent through this process. I also realized that as the theme for the 2011 playback theatre was the alteration of generations (Muramoto, 2011), as the years passed regardless of Chinese or Japanese there were many participants who, “did not directly hear about war experiences” or “did not feel as though they had experienced historical trauma.”

Looking back, the Japanese-Chinese relation was not the only thing that this workshop was able to rebuild. In 2007, I was quietly mending relations with the older generation and with the men of Japan. In 2011, I was able to create new relationships with women who cross borders (Muramoto 2011), and reestablish connections with Chinese people of the same generation. Especially the story of Luo Cuicui, a daughter supporting her mother who desperately found a way to live despite being hurt and used by the events at the time, seemed identical to my own experiences. In a later interview I discovered that her mother and my own mother coincidentally had the same name, making me feel a strange connection. Likewise, I share a bond with Tao Linjin and Shen Yu who work in the same profession of

clinical psychology and we together developed these seminars.

One Chinese participant overlapped the image of his father with an older generation's psychodrama. "Watching this scene was like seeing my father's childhood. [...] It was as if I slipped through time to experience the pain, the ridicule, and the unfairness that he felt. [...] Through this workshop, I was able to find the answers to everything I was unable to understand in the past. My father wanted to give me a good education so he could have me accomplish the dreams and aspirations of his childhood that he was unable to realize himself." (#11-173). Most likely, the traumas of history, hence the relations destroyed by war were not limited to the Japanese-Chinese relations. Many relations, such as those between father and son, mother and daughter, man and woman, and older and younger generations were destroyed. Our identity is built through each of these multitudinous relations.

Since the beginning, the appeal of HWH lay in the consideration for multiple perspectives. The damage dealt by historical traumas is not necessarily limited to the relations between the country and its people. Oda (2013) claims that the modern nation state is characterized by a homogenous population living within a clearly defined border, but to draw a border in itself violently and artificially breaks the natural relationships. Thus a clear border and the identity of the citizens who try to react to this can become the original trauma relating to the destruction of relations. The third step of HWH is to "realize the inner potential of becoming the perpetrator". We need to pay attention to the historical and social context behind these events, in order for us to move on to the fourth step of "deep grief" while we become aware that we are constantly exposed to the structural violence in which perpetration and victimization are complicatedly mixed up. Zhang (2012) points out that after World War II, the resolution of post war issues were processed by two powers in the midst of a cold war compromising with each other, and when the cold war system got collapsed, the victimized country's elevated nationalism resulted in the historical problems between the perpetrating country and the victimized country suddenly become

tangible. In addition there appeared powers, which tried to use this to their advantage. Thus, there is a need for interdisciplinary encounters to reevaluate and understand how larger scale outside influences may interfere personal relations from developing. I hope that by fixing the multitude of relationships that transcends borders, we are able to respect each individual's identity that arises from these relationships.

5. For the future

If the final step of recovering from a trauma is to establish a commonality, this requires a common awareness of history. How will we be able to continue this effort? We have some plans in order to do this. The first is to summarize our efforts and results, and to publish them in Japanese, Chinese, and English. I want to be able to share this small history of the post Sino-Japanese war generation reestablishing connections and mending relationships with as many people as possible. Professor Zhang has proposed using this as a textbook for international students and for students looking to pursue international relations, and I would like to further investigate a method to utilize the results to its maximum potential.

The second is to incorporate the methods used in HWH in general history and peace education instead of limiting them to smaller therapy sessions. This is a response to the voices of the Chinese side claiming, "Such a small number of participants does not make a big impact. We need to have more people involved", while simultaneously addressing the issue faced this time of the lack of younger Japanese participants. One participant from Japan said, "the problem is that in relation to the size of the issue being faced, the sentiment towards having qualified participants is too strong. For those who see it for the first time, the organization appears questionable and it is not convincing to have to tell them that they will understand the importance of the cause if they join." (#11-163) . I feel the need to widen the scope of our work to increase the accessibility for the younger generation. As the first step towards accomplishing this, in September 2013, a workshop for teachers and volunteers of history and peace education was held at the

Kyoto Museum for World Peace, Ritsumeikan University. I am currently examining how to further develop this at the Ritsumeikan University in the future. Some ideas include incorporating this in the peace education programs and international relations on the undergraduate level and into the teaching curriculum.

The third plan is to continue this workshop, which provides an opportunity for new encounters. The psychology department at the Nanjing Normal University, led by Tao Linjin, is also considering this possibility. In October, 2013 there was an opportunity to introduce this project in Taipei, and we may be able to expand the themes and practice these workshops in the future.

Lastly, I would like to use this opportunity to express my deep gratitude towards Armand Volkas, not only for sharing his expertise, but also for supporting us with great consideration and love. I was given the courage to tackle such a large and deeply rooted historical issue because I trusted Armand greatly. Through reading the participant questionnaires, I can say with confidence that this sentiment is shared by all of the other participants. I also cannot thank 張連紅 enough for his deep understanding and continued acceptance that he showed us. There is no doubt that he continues his role as the bridge between Chinese and Japanese people in accordance with the beliefs expressed in "Remembering Nanjing: Converting the inheritance of wartime loss into a shared fortune" (Zhang 2011). During the mid-autumn festival of 2013, Professor Zhang visited the seminar, bringing with him some moon cakes. This was a message of treating us as a family. I would also like to express my appreciation towards the participants, collaborators, and fellow researchers of this project. I believe that creating such a stage to repeatedly visit Nanjing for the Japanese and Chinese participants to remember the traumas of history, which resulted in a big step towards mending Chinese-Japanese relations, was a great result made possible through everyone's support and understanding.

bibliography

- 張連紅 (2010) 「トラウマを癒す～日中関係における避けられない課題」『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』
- Herman, J. L. (1992). *Trauma and recovery*. New York: Basic Books. (ジュディス・ハーマン著、中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房、1995)
- 岩井圭司 (1999) 「被災地のその後」こころのケアセンター編集『災害とトラウマ』みすず書房
- 金丸裕一 (2011) 「戦争史研究の諸問題」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録』
- Marsella, A. J., Friedman, M. J., Gerrity, E. T., & Scurfield, R. M. (1996). Ethnocultural aspects of PTSD: Some closing thoughts. In A. J. Marsella, M. J. Friedman, E. T. Gerrity, & R. M. Scurfield (Eds.). *Ethnocultural aspects of posttraumatic stress disorder: Issues, research, and clinical applications* (pp. 529-538). Washington, DC: American Psychological Association.
- マクファーレン (1999) 「自然災害の長期的転帰」こころのケアセンター編『災害とトラウマ』みすず書房
- Muramoto Kuniko (2002) *Women's trauma and healing in Japanese culture*. Dissertation, the Union Institute
- 村本邦子編著 (2010) 『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性：国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』立命館大学人間科学研究所ヒューマンリサーチ 19 (http://www.ritsumeihuman.com/hsrsrc/resource/19/open_research19.html)
- 村本邦子編著 (2012) 『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み：国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録』立命館大学人間科学研究所共同対人援助モデル研究 3 (<http://www.ritsumeihuman.com/cpsic/model3.html>)
- 村本邦子編著 (2012) 『人間科学と平和教育～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から』立命館大学人間科学研究所共同対人援助モデル研究 5 (<http://www.ritsumeihuman.com/publications/read/id/78>)
- 小田博志 (2011) 「南京と和解～歴史の深淵に橋をかける」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2011」の記録』
- 小田博志 (2012) 「物語のタペストリー」『人間科学と平和教育～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から』立命館大学人間科学研究所
- 小田博志 (2013) Oda, H. email message dated on Nov.12th, 2013

Summerfield, D. (1995). Addressing human response to war and atrocity: Major challenges in research and practices and the limitations of Western psychiatric model. In Kleber, Figley and Gersons (Eds.). *Beyond trauma: Cultural and societal dynamics*. (pp. 17-29). NY: Plenum Press.

ボルカス, A. (2010) 「南京の悲劇の歴史に共に立ち向かう日中文化」『戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』

ボルカス, A. (2011) 「『南京を思い起こす 2011』ファシリテーターとしてのリフレクシオン」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～国際セミナー「南京を思い起こす 2009」の記録』

Watters, E. (2010) *Crazy like us: Globalization of the American psyche*. NY: Sterling Lord Literistic. (イーサン・ウォッターズ著、阿部宏美訳、『クレイジー・ライク・アメリカ～心の病はいかに輸出されたか』紀伊國屋書店 2013)

※ Citations are from past reports. For example, when written "#10-55", it means the citation was taken from page 55 of the seminar report from 2010. "A-10" means page 10 of interview data A.

3-1. Healing Collective Shame and Guilt

Armand Volkas, MFA, MA MFT, RDT/BCT
Associate Professor, California Institute of Integral Studies
Clinical Director, Living Arts Counseling Center
Director, Living Arts Playback Theatre Ensemble
Founder, Healing the Wounds of History: Center for Peacebuilding and the Arts
armandvolkas@gmail.com
www.livingartscenter.org
(510) 527-5577

Auschwitz/Berkinow, Poland

August, 1995

A group of German students piously till the ground of Auschwitz/Berkinow concentration camp with small digging tools. In a trance, as if involved in a religious rite, they silently search for objects that had been taken from Jews before being sent to the gas chamber to be killed. In their haste to hide the evidence of their evil deeds the Nazis had burned down the enormous warehouses filled with valuables confiscated from camp inmates. The fire had burned so intensely that all the metal artifacts had melted and become buried in the ground. Now 50 years later, young Germans take the objects that they find and place them reverentially inside a protected grid, forming a mountain of twisted glasses, broken watches and melted silverware.

The students dig in the ground in search of historical memory and in the process unearth the ghosts of the 3 million dead who haunt this place. They are filled with tremendous grief for their shattered connection with their German identity while trying to honor the Jewish victims in an almost futile attempt to ease their personal and collective pain.

Berkeley, California, March, 2007

A young Turkish woman stands trembling at the microphone before a packed auditorium in Berkeley, California with tears running down her face. There is a hushed silence from the audience in anticipation of her words. Her fear yet determination to speak her truth are evident in her eyes and on her face. In the aftermath of a groundbreaking all-day Healing the Wounds of History workshop with people from the Armenian and Turkish communities, an evening of interactive theatre, dialogue and reflection on the historical legacies of these two cultures is taking place. "My Armenian friends, I have felt your hurt, humiliation and the degradation of your experience of the Armenian Genocide being denied by my people. I cannot speak for my government. But, I am moved to apologize to you on behalf of my ancestors."

Article 301 from the Turkish Penal Code makes it illegal to call what happened to the Armenian people “genocide” and thus insult and dishonor Turkey and the Turkish nation and this woman could be arrested upon her return to her country. The courage of this young Turkish woman was evident to the middle aged Armenian man whose mother, as an orphan and survivor of the Genocide, was forced to march bare-foot through the Der El-Zor Syrian Desert in 1915. Many of the Armenian immigrants to the United States were the descendants of orphans and their memory and inherited pain about the 1.5 million Armenians who were killed spans four generations at this point. The Armenian man weeps in disbelief, “I never thought I would hear an apology from a Turk in my lifetime.”

Nanjing, China, October 2009

The scene is at The Yangtze River at the end of a ritual below a memorial stone commemorating the Nanjing Massacre. A group of eight Japanese women, huddled together in a cluster of support, are weeping and wailing inconsolably in an expression of profound anguish. The pressure behind their grief has built up over the previous four days of a Healing the Wounds of History workshop and now needs release.

Students and teachers from Ritsumeikan University in Kyoto, Japan and their counterparts at Normal University in Nanjing, China had come together to face the legacy of the War. They had visited the Nanjing Massacre Museum, which documents, in graphic detail, the horrifying atrocities and the pain, cruelty and humiliation that their Japanese ancestors had inflicted upon the Chinese during the Sino-Japanese War. They had listened to a Nanjing Massacre survivor share the story of the murder of his family and the rapes he witnessed by Japanese soldiers as a 9 year old boy fighting for his own survival while trying to save his wounded younger sister’s life. Drama therapy and expressive arts therapy were used to help them move through and emotionally face their difficult legacy. The Chinese participants stand silently around the memorial grounds as

witnesses of the agony of the Japanese women. Their tears of grief and shame seem to stream out of their eyes and hearts and into the fast moving current of the Yangtze.

San Francisco, California

November, 2013

As I reflect upon my recent experience facilitating my third Remembering Nanjing Project encounter in September 2013 and my work with intercultural conflict transformation for the past 25 years, I find myself moved by the courage of the descendants of perpetrators in choosing to face their difficult legacies. The vignette snapshots above, drawn from my experiences with German/Jewish, Turkish/Armenian and Japanese/Chinese encounters I have facilitated, illustrate the emotional complexity of this task. Germans, Turks and Japanese cultures are expressing guilt, shame and grief. As a psychotherapist, drama therapist and peacebuilder I have worked with more than 20 cultural conflicts and collective traumas and have developed an arts-based and psychological model to work with these emotional inheritances which I call Healing the Wounds of History (HWH) (Volkas, 2002, 2009, 2010, 2012), (Miller & Volkas, 2007), (Leveton & Volkas, 2010). Having had the opportunity to return to Nanjing three times has brought up important questions and challenges about my work that I would like to reflect upon here.

At the post-workshop symposium held at Normal University in Nanjing in September 2013 and the report by psychotherapist and expressive arts therapist Aya Kasai on the study she conducted of the 2011 Remembering Nanjing project, it became clear to me that while Chinese participants went home from the encounter reporting that they had had transformative experiences, many Japanese participants went home after the 4-day workshop feeling bad. So much shame had come up during the workshop and many Japanese participants felt like they had nowhere to process it.

At the Nanjing Massacre Museum, Japanese participants reported feeling like targets, hoping that they would not be recognized as Japanese so as not to activate Chinese rage. In private communications with me, Japanese attendees expressed their feeling that they did not have the emotional right to express their pain from a legacy of perpetration. They were concerned that their Chinese hosts would be offended. Japanese participants felt like they had to hide their more complex feelings and only speak about them privately.

As an HWH facilitator, I believe that there is no reason to guide people into exploring their personal and collective trauma unless I am able to help them create some meaning out of their experience. I felt like I was letting Japanese participants down in some way. As representatives of their culture in the Nanjing workshop, participants were courageously exploring the dark side of Japanese history, but were possibly not able to get enough emotional and spiritual support from the process.

Looking back on each of the three Remembering Nanjing encounters I had facilitated, I observed that Japanese participants had a resistance to admitting their difficult feelings or taking up too much emotional space. In the face of coming to understand the extent of the enormous trauma their ancestors had perpetrated upon the Chinese, they seemed to get emotionally stuck.

After many years of working with Germans on their legacy of Nazi perpetration, where I was able to help them work through their guilt and shame to a feeling of redemption, I wondered why the Japanese participants were not able to do the same. Perhaps it was the result of the limitations of working as a psychotherapist with a group of 35-40 participants, where it is impossible to address everyone's emotional needs. Was it possibly the fact that I had to rely on Japanese and Chinese interpreters to help me facilitate the subtleties and nuances of a complex emotional process with a large

group and as a result couldn't go very deep and move past barriers to self-revelation. Perhaps it was the cultural values around saving face that prevented Japanese participants from moving into and then through their shame. I began to wonder if, in fact, HWH was the most appropriate tool for this emotionally complex encounter.

Two Layers of HWH: Micro-level and the Macro-Level

The Healing the Wounds of History encounter is conceptualized on two levels. The first level is the psychological one that looks at the meeting between two groups in conflict and addresses the feelings and needs of the participants that are stirred up by the process. The therapeutic goal is a cultural exchange where the participants get to know and humanize each other and integrate their legacy of victimization or perpetration in a personal and regenerative way. The objective is the psychological integration of their experience in the workshop and to gain insight into their inherited collective trauma and how they carry it in their cultural or national identities. The impact is more personal in nature than collective. The goal is for each participant to be stimulated by their experience and absorb it into their lives with a sense of hope and resilience.

The second layer of the encounter is conceptualized as a therapeutic intervention on society. Society itself is the client. The participants in the workshop are seen as carriers of the collective trauma of their people. They are participating in the workshop as representatives of their cultures. So even though the participants may be doing deeply personal work at the micro-level, the HWH therapist is also tuned in to the macro-level and thinking about how this work may ripple out into the society as social change.

In the fall of 2013, everyone involved in the Nanjing Project was aware of the dangerous tension building between China and Japan. It was the elephant in the room. The Chinese people clearly want, or even demand, an

acknowledgement and an apology for countless atrocities committed by the Japanese military during the Sino-Japanese War, but a series of Japanese governments have struggled with shame and denial. It has been my hope since the beginning of the Remembering Nanjing Project that the HWH process could create a model for how Japan could move through this impasse to reconciliation. It has been my belief that if Japanese participants could move through the steps of apology authentically at the micro-level, then perhaps Japan itself could also find its way to an honest diplomatic apology at the macro-level.

Questions

Since collective shame seemed to be the primary obstacle in the way of working through the micro and macro levels in the Remembering Nanjing process, I decided to take a deeper look into the nature of shame and guilt. I wanted to see if I could learn how to help Japanese people move through these paralyzing feelings and integrate them in a positive way.

As I explored the literature on shame and guilt several questions emerged:

What are shame and guilt and what are their purposes in human psychology, society and cultures?

How do cultures with legacies of perpetration work through guilt and shame to personal and collective psychological health? How do they integrate a legacy of perpetration with a positive cultural or national identity?

Guilt

Guilt is a cognitive or an emotional experience that occurs when a person realizes or believes—accurately or not—that he or she has compromised his or her own standards of conduct or has violated a moral standard, and bears significant responsibility for that violation.

Collective Guilt

Collective guilt is the emotional reaction of a group of individuals who perceive that their family, tribe or society has illegitimately harmed members of another group. It often appears as a result of a shared social identity and where the group's actions represent a threat to the positive feeling of the group. There are several causes of collective guilt: strong group identity, collective responsibility, and perception of unjust actions committed by the group.

An individual has to believe the actions caused by their "perpetrator" group were unjustifiable, indefensible, and unforgivable. If an individual can justify the actions of the hurtful group, this can lessen the feeling of collective guilt. This is a common response by Turks when discovering that their ancestors may have been involved in genocidal actions. Their justification is that the killings occurred during WWI as the Ottoman Empire was collapsing and that modern Turkey need not take responsibility for this. They are therefore dismissive of the accusations of genocide. Only when an individual views the perpetrator group's actions as reprehensible, will that individual feel the collective guilt of their people. (Branscombe, 2004)

An instructive example of dealing with collective guilt can be found in Germany after WWII. In the post-War era, the entire German nation was forced to confront its violent and destructive past and carry its collective guilt. Held for the purpose of bringing Nazi war criminals to justice, the Nuremberg trials were carried out between 1945 and 1949. The defendants, who included Nazi Party officials and high-ranking military officers along with German industrialists, lawyers and doctors, were indicted on such charges as crimes against peace and crimes against humanity. Through this process, the entire German people were metaphorically put on trial. Germany, more than any other nation with a history of perpetration, has

made large gestures of reconciliation: formal political apologies, multiple Holocaust memorials, financial reparation to Holocaust and WWII victims, a rigorous Holocaust education curriculum and the creation of a national Holocaust commemoration day.

Honor

Honor is related to shame. It is fundamentally the public recognition of one's social standing. This is a value that is prevalent in Mediterranean cultures including Turkey. One's basic honor level is inherited from the family or group. Each person takes on the general honor status that the group possesses in the eyes of the larger group, and therefore honor comes directly from group membership. It is not based on something the individual has done. The relationship with the group is important for the identity of an honor-based society. Honor status comes primarily from group recognition. With honor as a primary cultural value in Turkish culture, one can see how an accusation of genocide would be dishonoring. (Moxnes,1993)

Shame

Shame is a painful feeling of humiliation or distress caused by the consciousness of wrong or foolish behavior, shortcoming, or impropriety. It is a condition of humiliating disgrace or disrepute. Shame and humiliation are so unpleasant that human beings have over time established sets of archetypal responses to shame that aim to avoid the negative effect of shame without addressing the original cause. (Nathanson (1992). See Compass of Shame below.

Shame Culture

In cultural anthropology, a shame culture is the concept that, in a given society, the primary device for gaining control over children and maintaining social order is the instillation of shame, often paired with the threat of ostracism. In a shame-oriented culture, every person has a place and a duty in the society. One maintains self-respect, not by choosing what is good

rather than what is evil, but by choosing what is expected of one. In this system, Japan, China and Turkey are considered shame cultures. (Hiebert 1985)

Guilt culture versus Shame Culture

I am aware of the controversy around the discourse about guilt and shame cultures. It first surfaced in the 1940's in **The Chrysanthemum and the Sword**, by Ruth Benedict (1946), when she compared Japan as a shame culture to the United States as a guilt-based culture. In studies and models that followed, individualistic cultures were accused of viewing guilt as “good” and shame as “bad” moral emotions. In reality, shame may be a better adaptation for a collectivist society that operates on a more relational basis. I would like to be clear that I am not making a value judgment about which coping mechanism is better. Rather, my aim is to examine the impact of shame and guilt on the ability of certain cultures to move through the pain from a legacy of perpetration.

Shame and guilt are members of a family of emotions called the self-conscious emotions as they rely on the human ability to reflect on and evaluate the self by reference to a set of internal or societal standards. Societies are classified according to the emotions they use to control individuals, swaying them into norms of obedience and conformity. A guilt-based society is one in which control is maintained by creating and continually reinforcing the feeling of guilt---the idea that you may be punished now or in the afterlife for certain behaviors condemned by society. The primary method of social control is the instillation of feelings of guilt for behaviors that the individual has internalized and believes to be undesirable.

Shame cultures are typically based on the concepts of maintaining pride and honor. Maintaining appearances and “face” are valued in shame-based cultures, as opposed to individual conscience in guilt-based cultures.

Guilt is a feeling that arises when we violate the absolute standards of morality within us, when we violate our conscience. A person may suffer from guilt although no one else knows of his or her misdeed. Guilt is relieved by confessing the misdeed and making amends. Guilt-based cultures rely on an internalized conviction of a shameful offense as the enforcer of good behavior. Shame-based cultures, by contrast, rely on external sanctions. Guilt cultures emphasize punishment and forgiveness as ways of restoring the moral order. (Hiebert 1985)

When people feel shame, they feel bad *about themselves*, whereas when they feel guilt they feel bad about a *specific behavior*. Empirical research supports that this differential emphasis on *the self* (“I did that horrible thing”) versus *a specific behavior* (“I *did* that horrible *thing*”) leads to very different emotional experiences, patterns of motivations and subsequent behavior (Tangney, Steuwig & Mashek 2007).

Of the two emotions, shame is considered the more painful of the two, since in shame the entire core self is at stake and therefore shame is often associated with a sense of shrinking or of “being small” as well as a worthlessness and powerlessness. Guilt, on the other hand, is deemed less painful because the object of concern or condemnation is a specific behavior rather than the entire self; consequently people experiencing guilt are not challenged to defend the self, but rather are drawn to reflect on their specific behavior and are more able to consider its consequences, especially for others.

On the whole, empirical evidence evaluating the action tendencies of people experiencing shame and guilt suggest that guilt promotes constructive, proactive pursuits, whereas shame promotes defensiveness, interpersonal separation, and distance. (Tangney, Steuwig & Mashek 2007).

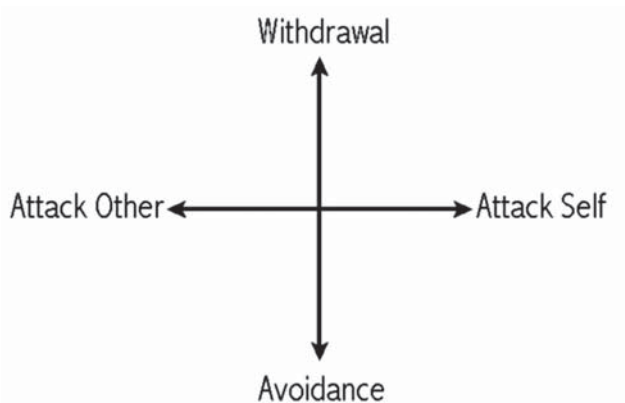
Tangney & Dearing (2002) report that shame is associated with attempts to deny, hide or escape the shame-inducing situation. The act of trying to avoid

dealing with the cause of the shame is articulately described by Nathanson's Compass of Shame (Nathanson,1992). By contrast, guilt has been found to be associated with motivation towards reparative actions including confessions, apologies, and undoing the consequences of the behavior (Tangney & Dearing 2002).

The Compass of Shame

Nathanson (1992) has described the four major sets of responses or “scripts” which he believes that human beings use to avoid dealing with an experience of shame, and which he arranges as the poles on the *Compass of Shame*. Each of the four poles of the compass describe ways of behaving in response to the experience of shame.

Figure



Withdrawal

At the Withdrawal pole of the compass are those behaviors that alleviate the negative effect by severing the connection with others so as to avoid their presumed scrutiny and judgment. The downcast face of the person experiencing shame and the breaking of eye contact with those that they may perceive to be judging them, are typical physiological responses to

shame. Withdrawal alleviates the negative effects of shame by removing the person from the glare of others.

Attack Self

People may respond to an experience of shame with behaviors that range from putting oneself down through humor to masochistic and self-destructive behaviors. The person in pain attempts to regain control of the situation by, at least, controlling their self-condemnation. In other words, they attack themselves first, before anyone else can.

Avoidance

The Avoidance pole of the compass involves behaviors that draw attention away from the cause of the shame experience. This redirects attention onto some aspect of the self that is not defective. The attempt is to restore some status to the individual.

Attack Other

At the final pole of the compass represents behaviors that enable us to feel better by shifting the blame or by making someone else smaller. This set of scripts range from seemingly harmless banter and good-natured teasing, through to malicious and hurtful insults and even physical aggression. In these responses the painful experience of shame is lessened through making someone else the target in order to enhance one's own status.

Nathanson (1992) considers each of the four sets of responses described in the Compass of Shame as maladaptive because it does not enable or require us to examine and address what the spotlight of shame has highlighted about us, or our behavior.

Japanese Collective Shame and Guilt

As the HWH workshop in Nanjing is taking place in September of 2013, the tension between China and Japan over the oil and fishing rights to the tiny

islands in the China Sea is mounting. Incidents have erupted where ownership of the islands is contested between China and Japan and have produced an outpouring of rage against the Japanese. Vandalism of Japanese businesses and protests break out in cities all over China. The issues that are being grappled with are political, historical as well as emotional in nature and are taking place on the global stage. The two powerful neighbors back nervously away from the tension for, left unfettered and allowed to follow through to a logical emotional conclusion, one could imagine the political posturing taking place between Japan and China could eventually lead to war. This tense and dangerous situation, I believe, has its roots in the unresolved and tangled collective memory of WWII.

Japan has not been as repentant as Germany or other countries that have confronted the darker sides of their past. It has apologized for waging aggressive war and oppressing its neighbors. But, those apologies have been fumbling and awkward, and have often been undercut by revisionist statements from right wing Japanese politicians. Japan has offered relatively little compensation to the victims of WWII. And to this day, there are no nationally sponsored museums or monuments that acknowledge Japanese aggression or atrocities. At the same time, the image of the bombings of Hiroshima and Nagasaki are seared into the synapses of Japanese elementary school children who go on field trips to visit the Peace Museum in Hiroshima.

Bitterness in China persists over the brutality of the Japanese during the Second Sino-Japanese War and the atrocities committed by the military like the Nanjing Massacre. The perceived lack of a straightforward acknowledgment of such atrocities, Japanese government employment of known past war criminals, and Japanese historic revisionism in textbooks enrages the Chinese public.

These perceptions are nurtured by the Chinese government. Hatred of

Japan becomes a unifying force in Chinese identity. In elementary school, children are taught about Japanese war crimes in detail. For example, thousands of children are brought to the Museum of the War of Chinese People's Resistance Against Japanese Aggression in Beijing and the Nanjing Massacre Museum was filled with elementary school children viewing the horrific photos of the atrocities the three times that I visited in 2009, 2011 and 2013.

After viewing the museum, the children's hatred of the Japanese people was reported to increase significantly. Despite the time that has passed since the end of the Second World War, discussions about the Japanese conduct can still trigger powerful emotions today, in part because most Japanese are aware of what happened but their society has never engaged in the type of introspection that was common in Germany after the Holocaust. (Forney 2005, 2008), (Lague, 2013)

With this history as a backdrop, I have enormous respect for the Japanese graduate students and faculty who have created and participated in the Remembering Nanjing Project since 2007. They are the conscience of their people and are bravely and willingly diving into uncharted emotional waters. Coming to Nanjing is to face the ghosts of World War II. Japanese participants are inviting shame to visit them and to face the immoral choices that their ancestors made on the very soil upon which they are standing. Making the choice to come to Nanjing, it is not possible to feel "good" at the end of a 4-day workshop with the descendants of the Chinese victims. One making this pilgrimage must expect to feel shame. However, an important value in the HWH process is to be able to move through the guilt, rage, shame and grief that is a part of this work to a place of meaning, integration and restoration.

How do cultures with legacies of perpetration work through guilt and shame to personal and collective psychological health? How do they integrate a

legacy of perpetration with a positive cultural or national identity?

Human beings are tribal in nature and have a need to feel good about the tribe to which they belong. When this pride of association is disrupted through a history of war trauma, humiliation, defeat, or perpetration, it negatively affects the collective self-regard in the form of internalized oppression. Members of a culture can begin to shame themselves. This can influence the way individuals view or value their own culture. This is clearly happening for the Japanese participants.

My HWH approach usually involves direct apology and it seems that the Chinese people want a direct acknowledgement of their suffering. However, it also seems clear that direct face-losing apologies are not commonly offered in Japanese culture. So, I would want to explore in future workshops what the steps are in a Japanese apology. Does apology need to be indirect and nonverbal? Is weeping visibly an apology? Is bowing silently an apology? Is coming to Nanjing at one's own expense to be a witness to the atrocities and hear the Chinese people's pain an apology?

In the end, I wonder if HWH, which is based on Western individualistic psychological and emotional value systems around working through shame and guilt, the appropriate approach to working with the collectivist Japanese and Chinese?

If I am invited back to Japan or China these are some of the questions I would want to explore.

References

- Benedict, R. (1946). *The Chrysanthemum and the Sword*. Boston: Houghton Mifflin.
- Branscombe, Nyla R.; Bertjan Doosje (2004). *Collective Guilt: International Perspectives*. Cambridge University Press.
- Forney, M. (2005, December 10). *Why China Bashes Japan*. Time Magazine.

- Halvor, M. (1993). Honor and Shame. *Theology Bulletin: A Journal of Bible and Theology*, (23), 167-176.
- Hiebert, P. G. (1985). *Anthropological Insights for Missionaries*. Grand Rapids: Baker Book House.
- Lague, D., & Lanhee Lee, J. (2013, May 25). Special Report: Why China's film-makers love to hate Japan. Reuters.
- Leveton, E. & Volkas, A., (2010) Healing the Wounds of History: Germans and Jews Facing the Legacy of the Holocaust. In *Healing collective trauma using sociodrama and drama therapy*, Leveton, E (Ed.), (pp. 127-146) New York, NY: Springer.
- Miller, R. & Volkas, A., (2007) Healing the wounds of History. In A. Blatner & D. Wiener (Eds.), *Interactive and improvisational drama: Varieties of applied theatre and performance* (pp. 34-44). New York: iUniverse.
- Nathanson, D. L. (1992). *Shame and Pride: Affect, Sex, and the Birth of the Self*. New York: W W Norton & Company.
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and Guilt*. New York: Guilford Press.
- Tangney, J. P., Steuwig, J., & Mashek, D. J. (2007). Moral Emotions and Moral Behaviour. *Annual Review of Psychology*, 58, 345-372.
- Volkas, A. (2002). Armand Volkas keynote address. *Dramascope: The Newsletter of the National Association for Drama Therapy*, 23 (1), 6-9.
- Volkas, A. (2009) Healing the Wounds of History: Drama Therapy in Collective Trauma and Intercultural Conflict Resolution. In D. Johnson & R. Emunah (Eds.), *Current approaches in drama therapy* (pp. 145-171), Springfield, IL: Charles C. Thomas.
- Volkas, A., (2010) Healing the Wounds of History: Japanese and Chinese Cultures Facing the Legacy of the Nanjing Massacre., In *Ritsumeikan human services research*, Muramoto, K. (Ed.), (pp. 130-156), Kyoto, Japan: Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University.
- Volkas, A., (2012) A Facilitator's Reflections on Remembering Nanjing 2011, In *Ritsumeikan human services research*, Muramoto, K. (Ed.), (pp. 350-364), Kyoto, Japan: Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University.
- Volkas, A. (2013). Drama therapy in the repair of collective trauma. In D. Johnson & N. Sajjani (Eds.), *Trauma-informed drama therapy: Transforming clinics, classrooms, and communities*. Springfield, IL: Charles C. Thomas.

3-2 集団的な恥辱感と罪責感を癒す

アルマンド・ヴォルカス MFA, MA MFT, RDT/BCT

カリフォルニア統合学大学院准教授

Living Arts Counseling Center 所長

Living Arts Playback Theatre Ensemble 代表

Healing the Wounds of History: Center for Peacebuilding and the Arts 創設者

armandvolkas@gmail.com

www.livingartscenter.org

(510) 527-5577

アウシュヴィッツ / ビルケナウ、ポーランド 1995 年 8 月

ドイツの学生達の一団が、小さなシャベルやスコップで敬虔な態度でアウシュヴィッツ / ビルケナウ収容所の地面を掘り起こしている。まるで宗教儀礼に参加しているかのような普段とは違った意識状態で、ガス室に送られ殺害されたユダヤ人たちから奪われた持ち物を黙々と探している。悪魔の所行の証拠を急いで隠滅するために、ナチスは収容者たちから没収した貴重品でいっぱいの巨大な倉庫を燃やした。炎のあまりの強さに、金属はすべて溶け、地面に埋まってしまった。50 年の時を経てドイツの若者たちが見つけたへし曲がった眼鏡や壊れた腕時計、溶けた銀食器を拾い上げ、保護された格子にうやうやしく入れると、それらは堆く山のように積み上げられた。

学生たちが歴史的記憶を探し求め地面を掘ることで、この場所に漂う三百万もの死者の霊が明るみにだされる。彼らは、ドイツ人としてのアイデンティティとの結びつきを粉碎され、途方もない痛みを抱えながら、ユダヤ人犠牲者たちに敬意を表することで自らの個人的、集団的な痛みを和らげようと無駄にも思える試みを重ねていく。

カリフォルニア州バークレー 2007 年 3 月

頬を涙で濡らせたトルコ人の若い女性が、満席になったバークレーの講堂で震えながらマイクに向かって立っている。聴衆は、ただひたすら沈黙し彼女の言葉を待っている。恐怖におののきながらも断固として真実を語ろうとする彼女の決意は、その目や顔つきにはっきりと見て取ることができる。アルメニア

とトルコの人々が参加し、まる一日をかけた「歴史の傷を癒す」ワークショップの直後に、観客と演者が交流する劇を通して二つの文化が抱えてきた歴史的な遺産についての対話や振り返りを行う夕べが行われている。「アルメニアの友人たちよ、私はこれまでわがトルコの人々が否認してきたアルメニア人の大量虐殺であな方が受けた傷、屈辱、そして体験の風化を感じました。私は政府のために言葉を発することはできませんが、祖先のためにあなた方に謝罪するために行動を起こします。」

トルコの刑法第 301 条はアルメニアの人々に起こったことを「大量虐殺」と呼ぶことは、トルコ人とトルコ国家を侮辱し不名誉に陥れる犯罪だとしている。この女性は国に戻ると逮捕されるかもしれないのだ。この若いトルコ人女性の勇気は、中年のアルメニアの男性にははっきりと伝わっていた。大量虐殺の生き残りであり孤児だった彼の母親は 1915 年シリアのデリゾール砂漠を裸足で横断させられた。米国に渡ってきたアルメニア人移民の多くが孤児の子孫であり、150 万人ものアルメニア人が四世代に渡って殺害されてきた記憶と痛みを受け継いでいた。そのアルメニア人の男性は「生きている間にトルコ人から謝罪の声を聴こうとは夢にも思わなかった」と驚きのあまり嗚咽の声をあげた。

中国南京市 2009 年 10 月

それは、揚子江岸にある南京大虐殺記念碑の下での儀式の最後だった。八人の日本人女性のグループが輪になって互いを支えながら、ここからの苦しみの表現として咽び泣きながら嘆き悲しんでいる。彼女たちの悲嘆の根底には、四日間に渡る「歴史の傷を癒す」ワークショップで積み重なった重みがあり、それが今ようやく解放されている。

京都の立命館大学から来た学生と教員たちとそのパートナーたちが南京師範大学に集まって、戦争の遺産と一緒に向かい合った。彼らは日中戦争の間に日本の祖先が中国人に犯した身も凍るような虐殺と痛み、恥辱、残酷さを目に見える形で詳細にドキュメントしてある南京虐殺記念館を訪れた。南京大虐殺の生存者が語る家族の殺戮や日本兵による強姦、そして九歳の少年が生存をかけた傷ついた妹の命を救おうと必死に戦う話に耳を傾けた。ドラマセラピーや表現アートセラピーを使って、困難な遺産に感情的に立ち向かい、それを乗り越えようとした。中国の参加者達は、その記念碑の下で日本人女性達が苦しむ姿をじっと黙って見守っている。彼女たちの眼からとめどなく流れる悲しみと恥

辱の涙は、やがて揚子江の激しい流れとひとつになっていくようにも思えた。

カリフォルニア州サンフランシスコ 2013年11月

2013年9月の「南京を思い起こす」は、私がファシリテーターとして関わる三度目の機会となった。このプロジェクトでの出会いと、過去25年に渡り関わってきた異文化間の衝突を変容させる仕事を振り返って私は、加害者の子孫たちが自ら受け継いできた困難な遺産に直面する勇氣にとっても感銘を受けてきた。上に書いた短いエピソードは私がファシリテートしたドイツとユダヤ、トルコとアルメニア、そして日本と中国の出逢いのなかで遭遇した体験から引用したものだ。これらはこの仕事の感情的な複雑さを示している。ドイツ、トルコ、日本の文化は、罪責感、恥辱感、悲嘆を表現している。心理療法師、ドラマセラピスト、平和構築に携わる者として私は、これまで二〇以上もの文化間の対立、集団的トラウマに取り組み、こうした感情的に継承してきたものと取り組むために芸術をベースにした心理学モデルを開発し、それを「歴史の傷を癒す(HWH)」と名付けた。(Volkas 2002、2009、2010、2012; Miller & Volkas, 2007; Leveton & Volkas, 2010) 南京を三度も訪問する機会をもつことができたことで、私の開発したモデルに関する重要な問いと挑戦が浮かんできた。それをここで振り返ってみたいと思う。

2013年9月に南京師範大学で行われたワークショップ終了後のシンポジウムでは、心理療法師であり表現芸術療法師でもある笠井綾が2011年の「南京を思い起こす」プロジェクトについて行った調査結果を報告した。それを聞いて明らかになったのは、中国人の参加者は帰宅後大きな変化をもたらす体験をしたと報告しているのに対し、多くの日本人参加者は四日間のワークショップを終えて帰宅すると不快な気持ちになっていることだ。ワークショップの間にたくさんの恥辱の気持ちが沸き上がり、多くの日本人参加者はそれをどうにも処理できないと感じていた。

南京虐殺記念館を訪れた日本人参加者は、まるで自分が標的になっているかのように感じ、中国人の怒りを誘発しないように、できれば自分が日本人だと分からなければ良いのにと願っていたと報告している。個人的に話した日本人出席者は、加害の遺産から自分たちの痛みを表現する感情的な権利をもたないと感じていることを吐露してくれた。中国のホストたちを傷つけるのではないかと気にしていたのだ。日本人参加者たちは自らのより複雑な感情を隠し、プ

ライブートにだけそれについて話すべきだと感じているようだった。

HWH のファシリテーターとして私は、人々が個人的集団的トラウマを探るよう導くためには、そうした体験から何か意味を見出すように彼らをサポートすることができなければならないと信じている。私は日本人参加者がある意味落ち込ませるようにしてしまったように感じた。南京ワークショップではそれぞれの文化の代表者として参加者は勇敢にも日本の歴史の暗黒面を探っていた。しかし、そのプロセスから十分な感情的精神的サポートを得ることができなかったのかもしれない。

「南京を思い起こす」での出逢いをファシリテートした三回の経験を振り返って、日本人参加者は自分の感情を認めたり感情的なスペースを十分にとることに抵抗があるように思う。彼らは自分たちの祖先が中国の人々に犯した加害からくる膨大なトラウマの程度を理解するようになると、彼らは感情的に身動きがとれなくなるようだ。

ナチスの加害の遺産についてドイツ人と長年関わり、罪責や恥辱に直面しそこから救い出される感情に至る手助けをしてきたが、なぜ日本人参加者は同じことができないのだろうと不思議に思う。おそらく心理療法家として三十五〜四十人もの参加者がいるグループワークをするという私自身の限界のためだろう。全員の感情的な必要性を引き出すことなど不可能だから。あるいは大きなグループで複雑な感情プロセスの微妙なニュアンスをファシリテートするのに、日本人と中国人の通訳に頼らなければならないことで、結果的に十分に深くいけずに自分のなかにあるものを発見する壁を打ち破れなかったのかもしれない。おそらく面目を保とうとする文化的価値観のために、日本人参加者は恥の体験に直面しそれを乗り越えることができないのかもしれない。HWH はこの感情的に複雑な出逢いの一番相応しいツールなのかも疑うようになってきた。

HWH の二つの層：ミクロとマクロのレベル

「HWH：歴史の傷を癒す」での出逢いは二つのレベルに概念化できる。第一のレベルは心理学的なもので、対立する二つのグループが遭遇することに注目し、そのプロセスによってかき乱される参加者の感情や必要性を表面化していく。治療的な目的は、文化的な交流で参加者たちが互いに知り合い、人間であることを確認し、個人的に被害と加害の遺産を統合し、修復していくことである。目標とするのは、ワークショップでの体験を心理学的に統合し、自分たち

が受け継いできた集合的なトラウマや、文化的国家的アイデンティティにそれがどのように受け継がれてきたかの洞察を得ることだ。こうした影響は個人的であるよりも、集合的な性質をもつ。参加者一人一人が自分の体験に刺激を受けてそれを自らの生き方に受け入れ希望と回復の力を実感することが目的である。

出逢いにおけるもう一つのレベルは、社会への治療的介入と概念化できる。社会そのものがクライアントであるということだ。ワークショップに参加する人たちは自分の国の人々の集合的トラウマを担った者とみなすことができる。つまり、自らの文化の代表者として参加していると考えなのだ。だから参加者が極めて個人的なワークをミクロのレベルで行ったとしても、HWHの治療家はマクロのレベルに注目し、どうすればこのワークが社会にさざ波のように伝わり変革をもたらすかについて考える。

2013年の秋、南京プロジェクトに関わっているものはみな、日中間の危険な緊張状態を意識していた。まるで部屋に巨大な象がいるかのようだった。中国人たちは日中戦争の間に日本軍が犯した数え切れない虐殺をはっきりと認め謝罪することを要求している。しかし、日本政府はずっと、自らの面目を保つために否認に終止してきた。この「南京を思い起こす」プロジェクトの初めから、HWHのプロセスによって日本がこの行き詰まりを乗り越え和解に移る一つのモデルを作りだしたいというのが私の望みだった。日本人参加者たちがミクロのレベルで真剣に謝罪するステップを経ることで、日本全体がマクロレベルでの真摯な外交的謝罪への道を見出すことができると信じてきた。

様々な問い

「南京を思い起こす」のプロセスにおいて、集合的な恥辱感がミクロとマクロのレベルで主な障壁になっているように思われる。そこで恥辱感と罪責感の本質についてもう少し深く考えてみたい。日本人がこうした麻痺の感情を乗り越えそれらを肯定的に統合するにはどのように関わっていけばよいかを学べるかどうかを検討してみたいと思う。

関連の文検を読み進めていくと、いくつかの疑問がわいてきた。

- 恥辱感や罪責感とは何であり、人類の心理や社会や文化においてどのような用途があるのだろうか？
- 加害の遺産を抱える文化が、個人的、集合的に心理的な健康に至るには

どのように罪責感や恥辱感と取り組めばよいのか。加害の遺産を肯定的な文化的国家的アイデンティティとどのように統合するのか？

罪責感

罪責感は認知的感情的体験であり、人が正しかろうがそうでなかろうが自分の行動基準に反したり、倫理的規範を逸脱したり、そうした違反に重大な責任を負っていると信じたり実感する時におこる。

集団的罪責感

集団的罪責感とは、自分の家族や仲間、社会が法に反して他のメンバーを害したことを認めたときに、集団のメンバーがそれぞれみせる感情的な反応である。その集団の行動が肯定的な感情に脅威を及ぼすときに、共有された社会的アイデンティティの結果として現れることがよくある。集団的罪責感を引き起こす原因にはいくつかある。集団のアイデンティティが強い場合、集合的責任感、その集団によって行われた不正な行為の認知などである。

それぞれの個人は「加害者」の集団が引き起こした行為が不当で、弁護のしようがなく、容赦できないものであると信じる必要がある。もし危害を加えたグループの行為が正当化できるなら、集合的罪責感を弱めてしまう。これは自分の祖先が大量虐殺に荷担していたかもしれないことに気づいたトルコ人に共通に見られる反応である。彼らは殺戮はオスマン帝国が崩壊した第一次世界大戦の間に起こったものであり、現代トルコはこれに責任をもつ必要はないというように正当化し、大量虐殺への非難を無視する。加害者集団の行為が不届き極まりないと見なされるときにのみ、自分たちの集団的罪責を感じる。

(Branscombe, 2004)

集合的罪責感についての対処で示唆的な例が、第二次大戦後のドイツで見られた。戦後ドイツは国家全体でその暴力的で破壊的な過去に直面し、その集団的罪責感を担わさせられてきた。ナチスの戦争犯罪人たちを裁きの場に立たせるために、ニュルンベルク裁判が1945年から1949年まで行われた。被告であるナチス黨員や軍の高官、それにドイツの実業家、弁護士、医師たちは平和への罪と人道に反する罪で告発された。このプロセスを通じて、比喩的にはドイツ中の人々が裁判にかけられたといえる。ドイツは、加害の歴史をもついかなる国よりも和解のジェスチャーを見せた。公式の政治的謝罪、ホロコースト

の記念館をいくつも建て、ホロコーストや第二次大戦の犠牲者への経済的賠償、ホロコーストについての厳格な教育カリキュラム、それに国家レベルでのホロコースト記念日も制定している。

名誉

名誉は恥辱感と関係しており、基本的には社会的な立場の公式な認知である。トルコを含む地中海諸文化に広くみられる価値である。基本的なレベルの名誉は家族や親族から受け継ぐ。一人一人は一般的な名誉のステータスを身につけており、それはより大きな集団において所有されるもので、個人が成し遂げたことに依拠しているわけではない。集団との関係は、名誉を基盤とする社会のアイデンティティにとっては重要である。名誉のステータスは集団のなかでどのように認められているかによることが多い。トルコ文化では名誉が文化的価値の主要なものであるので、大量虐殺を責めることがどれほど不名誉なことであるか理解できる。(Moxnes,1993)

恥辱感

恥辱感とは間違った行動や愚かな行動、あるいは弱点や不正行為だという意識が引き起こす屈辱やストレスによる痛みを伴う感情である。自尊心を傷つけるような不名誉な状態あるいは人の評判を落とす状態である。恥辱感と屈辱はあまりに不快なので、人類は進化の過程で恥辱感にある元型的な反応を構築してきた。それによってたとえば元々の原因が何であったかを問うことなく恥辱感の否定的な影響を避けようとする。

(Nathanson 1992).

※下記の「恥辱感のコンパス」を参照

恥の文化

文化人類学的にいうと恥の文化は、ある文化で子供をコントロールし社会秩序を維持するための主要な方法であり、しばしば追放の強迫と一緒にあって恥辱感を与える。恥辱感が中心の文化では、あらゆる人は社会である立場と義務をもつ。悪ではなく善を選択することではなく、ある期待されることを選択することで人は自尊心を維持する。こうしたシステムの観点からいえば、日本や中国、トルコは恥の文化と見なせるだろう。

(Hiebert 1985)

罪責の文化 対 恥の文化

罪責の文化と恥の文化についての議論が論争になっていることはもちろん知っている。こうした論争は、1940 年代にルース・ベネディクト（1946）が「菊と刀」で日本を恥の文化、米国を罪責の文化として比較した時に最初に表面化した。それ以後の研究や様々なモデルでは、個人主義の文化は罪責感を「善き」とするのに対し恥辱感を「悪しき」倫理的感情として追究してきた。現実には、恥辱感の関係性を基盤とする集合的社会によりフィットするものである。ここで明確にしておきたいのは、私自身はどちらかの対処メカニズムが良いという価値判断をしているわけではないということだ。むしろ私の目的は、恥辱感や罪責感が、ある文化において加害の遺産に由来する痛みを乗り越える力にどのような影響があるかを吟味することにある。

恥辱感と罪責感は自己意識の感情と呼ばれるある感情群に属する。どちらも内的、社会的基準を参照しながら自己を振り返り評価する能力に依拠している。個人をコントロールし服従と適合の規範に向けるためにどのような感情を用いるかに応じて社会を分類することができる。罪責感を重視する社会は、罪責感を生みだし継続的にそれを強化することでコントロールを維持する社会である。そうした社会では、社会が非難するような行動に対して、現在あるいは死んだ後も社会が罰を与えるかもしれないと考えられ、個人が内面化し望ましくないものと信じている行動に罪責感を抱かせることで社会をコントロールする。

典型的な恥の文化では、誇りと名誉を維持するという概念に基づくことが多い。罪責感を重視する文化では個人の良心に価値がおかれるのに対し、恥辱感を重視する文化では、外面を保ち「顔」をたてることに価値がおかれる。

罪責感は、内なる絶対的な倫理規範を犯したり良心に反する時に生じる。その人が悪いことを行ったことを知る人が誰もいなくても、人は罪責感に苦しむ。罪責感は、悪行を認めて、補償することによって軽減される。罪責感に基づく文化では、恥すべき罪をこころの中で確信することによって、善なる行動が強化されていく。恥辱感に基づく文化では、それとは対照的に、外的な制裁に依拠する。罪責感に基づく文化では、倫理的秩序を再構築する方法として懲罰と許しが強調される。

(Hiebert 1985)

人が恥辱を感じる時に悪いのは自分自身であるのに対し、罪責を感じる時には特定の行動が悪いだけである。実証的な研究によれば、自己（「酷いこと

をした私』)と特定の行動(「私がしてしまったあの酷いこと」)のどちらを強調するかで、感情的な経験や動機のパターン、それに伴う行動も大きく違ってくる。(Tangney, Steuwig & Mashek 2007).

二つの感情のうち、恥辱感の方がより痛みを伴うとされている。というのも、恥辱感においては核となる自己のすべてが悪いとされ、それゆえに恥辱感は一歩しば自分を「取るに足らない存在」と矮小化したり価値のない人間と感じさせ、無力感ともつながる。それに対し罪責感、それほど痛みを伴わないものだと考えられている。なぜなら非難の対象となるのは自己すべてではなく、特定の行動だからである。結果的に罪責感を体験する人は自己を守らねばならないような挑戦を受けることなく、特定の行動を反省するように仕向けられるし、特に他者に対するその影響を考慮することができる。

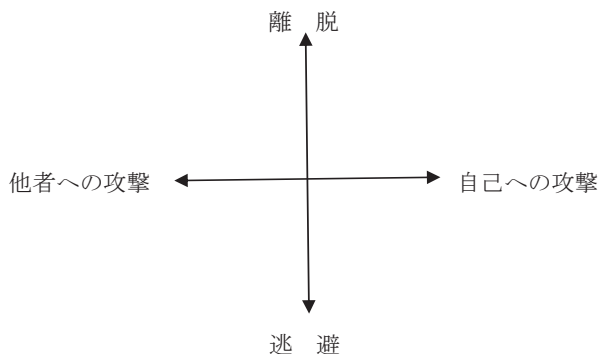
概して、恥辱感と罪責感を体験する人の行動の傾向を評価する実証的研究が示しているのは、罪責感は建設的で能動的に進むのに対し、恥辱感により防衛的で人との距離を深めるように進む。(Tangney, Steuwig & Mashek 2007).

タンゲニーとデーリング (Tangney & Dearing 2002) は、恥辱感恥を生じさせた状況を否認したり、隠蔽したり、逃避しようと試みることにつながると報告している。恥の原因に対処することを回避しようとする行為は、ナサンソンの著作「恥のコンパス」(Nathanson, 1992) に明瞭に述べられている。対照的に、罪責感はその行動の告白や謝罪、あるいはその結果を取り消すような修復的行為への動機につながっている。(タンゲニー及びデーリング 2002)

恥の羅針盤

ナサンソン (1992) は、人間が恥の体験に対処することを回避するために用いる反応の四つの主要な集合あるいは脚本について述べている。彼はそれらを「恥辱感の羅針盤」に四つの極として配置した。羅針盤の四つの極はそれぞれ、恥辱感の経験に応じて取られる行動を述べている。

図：



離脱

羅針盤の「離脱」の極にあるのは、ありうる詳細な調査や審判を避けるために他者との関係を断ち切ることで、否定的な影響を軽減するような行動である。恥辱を経験した人が顔を下に向けたり、自分を審判していると感じる人と視線を合わせることを避けるのは、恥辱感に対する典型的な生理的反応である。離脱は他者の厳しい眼差しを取り除くことで、恥辱感の否定的な影響を軽減する。

自己への攻撃

人々は、ユーモアで自分を卑下することから、マゾヒスティックなあるいは自滅的な行動に至るまで様々な行動で、恥辱の経験に対応する。痛みを感じる人は、少なくとも自己非難をコントロールすることでその状況に対するコントロールを取り戻そうとする。つまり、他の誰よりもまず自分自身を攻撃するのだ。

逃避

羅針盤の「逃避」の極には、恥辱の体験の原因から注意を引き離す行動がある。自己の不完全ではない側面に注意を向け直すことで、その個人の地位を回復しようとするのだ。

他者への攻撃

羅針盤の最後の極には、責めをすり替えたり他の誰かを低く扱うことで、気分を良くするような行動がおかれる。こうした台本には、一見無害な冗談とか悪気のないいじめから、徹底的に悪意のある人を傷つけるような侮辱、場合によっては身体的な攻撃までがある。こうした反応において、自分自身の地位を強化するために他の誰かをターゲットにすることで、恥辱のつらい経験は軽減される。

ナサンソン（1992）は、「恥の羅針盤」で述べた四つの反応はいずれも適応不全だとみなしている。というのは、いずれも恥辱感が自己や自己の行動についての何を明るみに出しているのかを吟味したり明らかにすることを妨げるからである。

日本人の集合的な恥辱感と罪責感

南京での HWH のワークショップが2013年9月に行われている時、東シナ海の小さな島の石油と漁業権を巡る日中の緊張が高まっていた。その出来事が勃発したとき、島の帰属を巡って日本と中国は対立し、日本人に対する怒りがあふれかえり、日本企業への暴行と抗議が中国中の都市で起きていた。取り組まれている問題は、政治と歴史の問題であると同時に、感情的なものであり、地球のあちこちでみられるものだ。二つの強大な隣人の関係が神経質な緊張感をもって悪化し、論理的感情的対立のままにほっておかれたら、日中間の政治的なポーズがいずれは戦争にまで至るであろうことは想像に難くない。この緊張した危険な状況は、第二次大戦の未解決でもつれ合った集合的記憶にその根を持っていると、私は考えている。

日本はドイツや過去の暗黒面に直面してきた他の国々のように悔いていない。侵略戦争を行いその隣人を圧迫したことを謝罪はした。しかし、それらの謝罪はぎごちないもので扱いにくく、右寄りの日本の政治家たちの修正主義的言動によってしばしばその価値を下げられてきた。日本が第二次大戦の犠牲者に対して行ってきた補償は比較的少ない。そして今日まで、日本の攻撃性や極悪さを認める国立の博物館や記念碑はない。同時に、広島や長崎への原爆投下のイメージは、広島 of 広島平和記念資料館を遠足で訪れる日本の小学生の脳裏に焼き付けられている。

中国における苦い思いは、南京大虐殺のように軍隊が行った残虐行為や第二次日中戦争における日本人の残虐性に対してずっと抱かれている。そうした残虐行為を率直に認めないまま、日本政府には過去の戦争犯罪者がおり、教科書には歴史的修正主義者たちが関わることで、中国民衆の怒りに火を注いでいる。

こうした受け取り方は、中国政府によってさらに助長され、日本に対する憎悪が中国人のアイデンティティを強める力になっている。小学校では日本の戦争犯罪について詳細に教えられる。例えば、何千人もの子供達が北京の中国人民抗日戦争記念館に連れてこられ、南京の南京大虐殺記念館にはたくさんの小学校の子供達が残虐行為の怖い写真を見ている。私もそこを 2009 年、2011 年、2013 年と三度訪れた。

博物館を見学した後、日本人に対する子供達の憎悪の感情はとても増加することが報告されている。第二次大戦が集結してから長い時間が過ぎているにも関わらず、日本人が行った行為についての議論は、今でも強い感情を引き起こす。その原因の一つは、たいていの日本人は何が起きたかに気づいているが、社会全体はホロコーストの後にドイツで共通して見られるような内省に取り組むことがなかったからだろう。(Forney 2005, 2008), (Lague, 2013)

こうした歴史を踏まえると、2007 年から南京を思い起こすプロジェクトを立ち上げそれに参加してきた日本人の大学院生と教員たちに、大いなる尊敬の念を覚える。彼らは日本人の良心であり、海図のない感情の海に勇敢に飛び込んできた。南京に来ることは第二次大戦の亡霊に直面することでもある。日本の参加者たちは、恥辱感をかき立て、記念館を訪れ自分たちが立っているまさにその土地の上で祖先が行った不道德的な選択に直面しようとしている。南京に来ることを選択しても、四日間のワークショップ終了後に中国の犠牲者達の子孫と心地よくいられるわけではない。この巡礼を行う人は、恥辱を感じることを予想しなければならない。この巡礼をしている人は、恥を感じるのを予想しなければならない。しかし、HWH プロセスの重要な価値は、罪責感、怒り、恥辱感、それに悲嘆を体験し通すことで、意味や統合や回復の場に至ることができることにある。

加害の遺産を引き受ける文化がどのようにして罪責感と恥辱感をに取り組み、個人的集合的に心理的な健康に至ることができるのか。加害の遺産を肯定的な文化的国民的アイデンティティに統合できるのだろうか。

人間は本質的に同族的で、自らが属する民族について肯定的な気持ちでいる

必要がある。このつながりへの誇りの気持ちが戦争のトラウマや屈辱、敗北あるいは悪事の歴史で崩れる時、集合的自己愛に否定的な影響を与え、内在化された抑圧の形をとる。そうすると、その文化の構成員は自らを恥ずかしく思うようになり、自らの文化に対する視点や価値観に影響を与える。日本人の参加者にこうしたことが起きていることは明らかだ。

私の HWH のアプローチでは、直接の謝罪を必要とすることが普通であり、中国人は自分たちの苦しみを直接認められることを求める。しかし、直接に面目を失うような謝罪は日本文化では一般的ではないのは明らかである。だから、将来のワークショップでは、日本人の謝罪がどのようなステップとなるのかを探っていきたいと思う。謝罪は直接的ではなく、非言語で行われる必要があるのだろうか。人前でむせび泣くことは、謝罪なのか？静かに跪くことは謝罪なのか？南京に自ら赴き残虐行為を目の当たりにし中国人の痛みを聞くことは謝罪なのだろうか？

つまるところ、恥辱感と罪責感と取り組むという西洋の個人主義的心理学と感情に価値を置くシステムに基づく HWH は、集合的な日本人や中国人が行うのに適したアプローチなのだろうか。

もし私がまた日本や中国に招待されるなら、こうした問いを探っていきたいと思う。

参考文献

- Benedict, R. (1946). *The Chrysanthemum and the Sword*. Boston: Houghton Mifflin.
(邦訳「菊と刀」講談社学術文庫 2005)
- Branscombe, Nyla R.; Bertjan Doosje (2004). *Collective Guilt: International Perspectives*. Cambridge University Press.
- Forney, M. (2005, December 10). Why China Bashes Japan. *Time Magazine*.
- Halvor, M. (1993). Honor and Shame. *Theology Bulletin: A Journal of Bible and Theology*, (23), 167-176.
- Hiebert, P. G. (1985). *Anthropological Insights for Missionaries*. Grand Rapids: Baker Book House.
- Lague, D., & Lanhee Lee, J. (2013, May 25). Special Report: Why China's film-makers love to hate Japan. *Reuters*.
- Leveton, E. & Volkas, A., (2010) Healing the Wounds of History: Germans and Jews Facing the Legacy of the Holocaust. In *Healing collective trauma using*

- sociodrama and drama therapy, Leveton, E (Ed.), (pp. 127-146) New York, NY: Springer.
- Miller, R. & Volkas, A., (2007) Healing the wounds of History. In A. Blatner & D. Wiener (Eds.), *Interactive and improvisational drama: Varieties of applied theatre and performance* (pp. 34-44). New York: iUniverse.
- Nathanson, D. L. (1992). *Shame and Pride: Affect, Sex, and the Birth of the Self*. New York: W W Norton & Company.
- Tangney, J. P., & Dearing, R. L. (2002). *Shame and Guilt*. New York: Guilford Press.
- Tangney, J. P., Steuwig, J., & Mashek, D. J. (2007). Moral Emotions and Moral Behaviour. *Annual Review of Psychology*, 58, 345-372.
- Volkas, A. (2002). Armand Volkas keynote address. *Dramascope: The Newsletter of the National Association for Drama Therapy*, 23 (1), 6-9.
- Volkas, A. (2009) *Healing the Wounds of History: Drama Therapy in Collective Trauma and Intercultural Conflict Resolution*. In D. Johnson & R. Emunah (Eds.), *Current approaches in drama therapy* (pp. 145-171), Springfield, IL: Charles C. Thomas.
- Volkas, A., (2010) *Healing the Wounds of History: Japanese and Chinese Cultures Facing the Legacy of the Nanjing Massacre.*, In *Ritsumeikan human services research*, Muramoto, K. (Ed.), (pp. 130-156), Kyoto, Japan: Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University.
- Volkas, A., (2012) *A Facilitator's Reflections on Remembering Nanjing 2011*, In *Ritsumeikan human services research*, Muramoto, K. (Ed.), (pp. 350-364), Kyoto, Japan: Institute of Human Sciences, Ritsumeikan University.
- Volkas, A. (2013). *Drama therapy in the repair of collective trauma*. In D. Johnson & N. Sajnani (Eds.), *Trauma-informed drama therapy: Transforming clinics, classrooms, and communities*. Springfield, IL: Charles C. Thomas.

4-1 南京を思い起こす 2011 参加者インタビュー経過報告

カリフォルニア統合学研究所
イースト・ウェスト心理学博士過程在籍 笠井綾

カリフォルニア統合学研究所の笠井綾と申します。戦時中私の祖父は中国で憲兵をしていました。祖父は中国で何をしていたのか、私に話してくれたことはありませんでしたが、2007 年にはじめて中国を訪れた時は日本が中国で行った事を知り深い悲しみを感じました。私の父は戦争が終わる一週間前に中国で生まれ、祖母は産まれたばかりの父と二人の子どもを連れて歩いて日本に帰りました。中国と朝鮮を通して帰るのに一年かかりましたので、途中で中国や朝鮮の人々に食べ物をもらったり、寒い時には家庭や学校などに泊めてもらったりしたと聞いています。そうして繋がれた命を受け取って今自分がここに生きているので、平和のために何かできたらという思いもあって 2007 年から関わらせていただいて、南京に来るのは今回で 7 回目になります。このワークに関わらせていただいて、またいつもあたたかく迎えていただいて本当に感謝しています。

私は 2011 年の参加者、主に戦争体験者の 3 世にあたる若い世代の学生の方々に去年の 10 月、ワークショップが終わって約一年後にインタビューをさせていただきました。

この「南京を思い起こす」の試みは、アルマンド・ボルカス氏が開発した Healing the Wounds of History（歴史の傷を癒す、以後 HWH）という心理／ドラマセラピーのアプローチを中心とした、約 4 日間の対話プログラムです。HWH は 6 つのステップによって和解が促されるとしています。6 つのステップとは、①タブーや沈黙を破る、②一人一人が物語と顔を持つ人間であることを認識する ③すべての人の中にある加害者になる可能性に気付く ④深い悲哀の共有 ⑤パフォーマンスや儀式など、統合としての表現や共同作業 ⑥社会的奉仕や創造的活動への変換、です。

実際の参加者の体験やワークショップの効果とはどのようなものだったのか、また参加する事の難しさは何か、個々の体験の多様性を記録したり、この試みの意図と参加者側の実際の体験の間に生じるギャップを理解したり、共有したりして今後に活かしたいと思いました。これまでに 40 名程の参加者の中

から学生を中心に 15 人の方へのインタビューを行ないました。天津から夜行列車に乗って来てくださった方もいて、みなさんのご協力にとても感謝しています。15 人の内訳は、中国人 8 名、日本在住の中国人 1 名、日本人 5 名、在日朝鮮人 1 名です。

まだ分析中なので経過報告ですが、三つのテーマ、①ワークショップの効果、②ワークの中で体験した難しさ、③謝罪、について簡単にご紹介したいと思います。これは 2011 年のことで、今年のワークショップは参加者も内容も変わっていますから、その体験や影響はまた違ったものであると思います。2011 年のワークショップの特徴は、参加者のストーリーを即興で演じて共有するプレイバックシアターという手法を、日中の劇団が協力して行なったこと、謝罪のテーマを探索するエクササイズや、お互いの声を演じる椅子のワークをグループ全体で行なったことなどです。

①ワークショップの効果

まず、中国人参加者の方です。ワークショップは主に国や国民についてのイメージに変化を与えたようです。日本人とあまり交流したことがなく、主にメディアと歴史教育などを通じて日本や日本人に対するイメージを持っていた参加者の方々からは、ワークショップで日本人と対話をしてから、メディアに流れる日中関係の報道に影響されにくくなった、また、歴史に向き合おうとする日本人と交流することで、国や政府と一般市民を分けて考えるようになった、という声が多く聞かれました。参加者の中には、自分の周りの人々が日中関係について明らかに報道に影響を受けていると思われる話し方をしているときには、その会話に参加しなかったり、または理性的になるよう論したり、ワークショップの中で自分が出会った日本人や自分の体験について伝えるようになった人もいました。また日本企業で働いた経験がある、またはもともと日本の学生と交流があった参加者からは、日本人との間で歴史のテーマがタブーでなくなった、日本人に対して遠慮なく意見を言えるようになった、また、これまでよりも日本人との関係が深くなったという声が多く聞かれました。参加者には歴史、心理、日本語の学生さんがおられましたが、心理または日本語が専門の参加者は歴史の大切さや、自分と歴史の関係について以前より感じたり考えるようになったりした方が多かったようです。逆に歴史が専門の方は、心理的な視点を自分の研究に取り入れたり、より中立的な立場で研究を行なうよう

になったりしたという方がおられました。インタビューを受けてくださった方全員が機会があったらまたこのようなワークショップに参加してもよいと言ってくれました。

次に日本人参加者の効果の実感です。南京大虐殺の史実や犠牲者の数字について、頭で考えることから少し離れて、日本兵達が行なったことや、生存者の個人のストーリーや気持ちを受けとめることができるようになった。一人でも何万人でも殺してはいけないという思いをあらためて確認した。中国の人々が感じたり考えたりしていることを実際に体感して、お互いに受けた教育の違いから来る考え方の違いに気付いた。思想が違っていても関係はずっと続いていくものなので、お互いを変えようとするのではなく、違いを受け入れて共存していく姿勢を大切に、その器の深さを日中関係に限らず普段の生活や仕事の中にも取り入れたいなど、歴史をこれまで史実としてとらえていた参加者は、相手の気持ちを受け止める、または、考え方が異なってもそれに耳を傾け共存して行こうという、受容と共存に関する変化が実感されているようでした。また、集団が暴力に向かって行くのは実際にあることだということを実感して、今の日本の政治についてよく考えるようになった、メディアで日中関係についての報道を見る時に、やはり過去のことが色々影響しているということを意識して見るようになった、など、歴史と今現在の状況との繋がりをより意識している方もおられました。これらは日本人男性のインタビューからまとめたもので、日本人女性の体験について現在分析中です。一つ言えることは、このワークショップは、南京大虐殺という暴力の中の、日本の加害と中国の被害の関係を扱うことが多いのですが、私達が南京で見聞するストーリーの中では女性や子供が被害者であることが多く、女性は被害側にも強く共感し、受容的な態度で参加しながら、同時に加害の責任を感じることも引き受けていることが多いようです。このことが日本人女性参加者の体験を複雑にしているのではないかとインタビューを通じて感じています。

② ワークショップの難しさ

ワークショップの中での難しかった体験についても聞いてみました。例を一つ挙げます。2011年のワークショップの中には日本と中国の立場から対話をするという椅子のワークがありました。その中で日本人参加者が、中国側の役を演じて、日本に向かって怒りを表現するというシーンがありました。それは、

多くの中国人参加者にとっては、変化のきっかけになったと認識されている大切なシーンでした。中国人参加者が日本人参加者に向かって直接表現しにくいことを日本人が代弁した事がとても印象的だったようです。

このような重要なシーンだったのですが、それは日本人にとっては重く感じられる場面でもありました。一人の参加者は、「何もできない。何も言えない。しんどくて、その場にいられなくなるような感じがあった。その時が一番しんどかった。」と感じ、また別の参加者は、このシーンに限らず、四日間の間に、日本の加害と向き合うことで、深い罪悪感を感じて、何を見ても、何をやっても、申し訳なくて、涙がとまらなくなってしまう、中国人の学生の方々に「あなたがやったことではないのだから」と、慰められるけど、それに対してもし訳ない、という辛さを体験しました。これらは問題意識を持つことに繋がる貴重な体験だという側面もあるかもしれませんが、負担が大きすぎると、統合に時間がかかったり、せっかく持った問題意識や関わりを持続する妨げになる場合があります。このような体験をした二人の日本人参加者は、そのような気持ちを他の参加者とシェアしたり、参加者達とワークの外でも楽しい時間を過ごせたことや、日本に帰っても参加メンバーと繋がっていることが助けになったそうです。インタビューをした時には、社会に対して無力感を感じるけれど、出会った仲間達との関係を大切にしていきたいという思いを持っておられました。

これは加害に向き合うプロセスの中で体験するチャレンジの一つの例ですが、このワークに限らず、歴史と葛藤に個人として向き合う時には、圧倒的な体験をすることがあります。ボルカス氏は、ユダヤ人とドイツ人のワークの経験から、加害側の参加者は、自分のアイデンティティーの加害の側面だけでなく、アイデンティティーの多層性を維持することが助けになると言います。例えば、この難しさを体験した男性参加者も、書道を通して中国人参加者との交流があり、日中の関係を書道での繋がりと精神性でとらえることが大きな資源となっていました。このようなアイデンティティーと歴史の多層性をどの瞬間にもある程度維持していられるような、レジリエンシーを促すエクササイズや、加害と被害の二極に集約しない対話ワーク、日本の被害についても触れるワークがもっとプログラムの中に組み込まれることが非常に重要なのではないかと思います。

また、ワークが終わってすぐにはわからなかったワークショップ効果の実感

を、インタビューを通して両国の参加者に伝えることで、参加者の難しさの感覚が薄れるところも見られました。日本政府と国民を分けて考えるようになったという中国側の声を聞いて、日本人参加者は嬉しく思う様子が見られましたし、自分達が難しいと感じたシーンがとても意味があったことを聞いて安堵感を示した人もいました。ですから、インタビューを通してお互いのその後の様子やワークショップの効果をすることもワークの続きになっていると感じました。

③謝罪のテーマ

2011 年のワークでは、謝罪のステップについて体験的に考えるエクササイズがあり、謝罪についての探求は一つのテーマでした。その体験の多様性と葛藤について触れてみたいと思います。

まず中国側から見ますと、9 名中 4 名の方は、一般市民が過去の歴史について謝罪することに疑問を持ったようです。この中には、民間の和解の努力は意味があるが、日本政府の謝罪が広く一般に認識されることの方が両国の関係を良くするためになると思うという方が 2 名、大切なのは政府の謝罪で、市民の謝罪はまったく必要ないと思う方が 1 名、また、民間がいくら努力しても政府がそれを軽視する態度を取れば、民間の謝罪は意味がないと言う方が 1 名おられました。また、政府からの謝罪がなくても、民間の謝罪があれば、政府と国民を分けて考えることに繋がるため、民間の謝罪はやはり必要であるという人が 9 名中 2 名おられました。政府が軽視するなら民間の謝罪は意味がないと言われた方も、日中が共同で行なった追悼式で一緒に献花し死者を慰めたことが一番心に残ったと言われていました。殆どの方は政府からの謝罪がほしいと言われており、これは 2011 年の日本人参加者の多くがワークショップの中でも無力感を感じた部分でした。

次に、これに対する日本人側の体験と葛藤の例です。日本人男性参加者の 2 名は、日本人の参加者グループの中でも、ワークショップの中でも、謝罪のプレッシャーを感じたと言います。参加者の一人は、日本人も中国人もこの戦争で亡くなったので、両国の死者に対してお参りをするという気持ちで参加しており、謝罪に関する文化の違いや、お互いにとってそれが何を意味するかについて十分な対話をする前に形式的に謝罪を表現することは、逆に中国の人達に対して失礼になると感じ、葛藤したと言います。彼は中国側参加者との交流か

ら、安易な謝罪よりは同世代としての対話を求められていると感じており、一度謝罪して終わるのではなく、これから何度もお参りと対話をしに来ることを大切にしたいそうです。またもう一名の参加者は、謝罪するべき歴史があったことはよく理解できるが、自分がやっていない事に対して膝をついてまで謝るべきかと悩みました。ワークショップは日本人参加者に、中国人に対する謝罪を強要するものではありませんが、年長の他の参加者が膝をついて謝罪を表現したり、深く頭を下げている場面を目の当たりにすると、強要はされていなくても、目上の人よりも軽い姿勢で表現することがはばかれる。この二名は、追悼式で目上の参加者に習って膝をついてみた場面もあったが、後に後悔を感じたそうです。

在日朝鮮人の参加者とのインタビューの中でも一緒に謝罪について考えました。謝罪とは何のために、誰のためにするものなのか。それぞれの文化にとって謝罪とは何か考え、対話してさらに意識化していく必要があります。謝罪をすると、被害側の参加者に許しや癒しを与えなければならないというプレッシャーが発生します。実際、ナムムの家でも謝罪をする日本人訪問者に対して「許す、癒す」役を引き受けている元従軍慰安婦がいるそうです。辛いのは女性のほうであるにも関わらず、日本側の参加者が謝ってスッキリし、これで解決したというような感覚を持ってそれで関係が終わってしまいそうなことに疑問を感じるそうです。誰のための、何のための謝罪なのか、許しや癒しを安易に求めるのではなく、加害と被害の二極性を乗り越えて、一緒に問題意識を持ち続けることを大切にしたいほうが良いのではないか、という問いが浮かび上がりました。

ワークの中でよく謝罪が表現される場面は二つあります。一つは生存者の証言を聞くとき、もう一つは揚子江で共同で追悼式をするときです。2011年の時も、証言をしてくださった夏さんに対して参加者が膝をついて個人的な謝罪の気持ちを表現する場面がありました。夏さんは、それを阻止し、「あなた達がやった事ではないのだから、日中の若者達は仲良くしてください。」と、参加者を救うような言葉をかけてくださいました。

揚子江の追悼式の捉え方は様々で、「一緒に死者を慰める」と思っている中国人参加者もいれば、「お参り」ととらえている日本人、または悲しみや謝罪の気持ちを表現したい日本人参加者もいます。しかし確かに、日本人学生にとっては、中国の方々に見守られながら年長者が深々と頭を下げている横で、それ

以下の姿勢でいることは、いくら「好きなようにやりなさい」と言われても難しいでしょう。若い世代の参加者がこのように感じていることや、文化間、世代間のスタンスの違い、謝罪や追悼の意味などを考慮して、これからも対話を続けていく必要がありそうです。

2013年の今回はこの部分に配慮して、参加者にも意見を出してもらい、どんな風に追悼式を行なうかを話し合って決めました。これまでとは、お花の種類も追悼のスタイルも変わり、日中韓米混合のこれまでより自由な雰囲気 of 式になりましたが、参加者のみなさんはどんな感想をお持ちになったのでしょうか。また感想を聞かせていただけることを楽しみにしています。

簡単ですが、三つのテーマについてお話ししました。私自身参加して思うのは、このようにしてワークで浮かび上がって来た様々なテーマを、共に模索し続けていくことに意味があるとあらためて思っています。今回のワークショップでは世代間の感じ方の違いによるテーマも多く浮かび上がったように思います。これまではボルカス先生の HWH をどのように日中間やアジアの問題に応用していけるか、その「型」を模索して来たように思いますが、そうではなくて、様々なエクササイズを応用しながら、毎回異なる参加者が、グループと個人の課題を探索しながら、ファシリテーターと協力して毎回みんなでワークショップそのものをつくりあげていくことが良いのではないか、と思うようになりました。決まったレシピがあるのではなく、みんなで材料を持ち寄って、その時その場でしか作れない、味わえないものを料理長と協力して作っていくようなイメージです。いつか日中の参加メンバーがチームで料理長となって、このようなワークショップのファシリテーションができるようになればいい、と思っています。

今回のワークでは、私はどちらかというと一参加者として体験させていただき、色々な学びがありました。村本邦子さん、村川治彦さん、アルマンド・ボルカスさん、張連紅先生、羅萃萃先生、陶琳瑾さんをはじめ、今までこの試みに関わってくださった名前をあげきれないたくさんの方々や参加者のみなさんに、本当に感謝しています。ありがとうございました。

4-2 Remembering Nanjing 2011 Participants Interview

Aya Kasai

California Institute of Integral Studies, East West Psychology Student

My name is Aya Kasai. I'm a student at California Institute of Integral Studies. My grandfather was a military police officer in China. He never told me what he did but in 2007, I visited Nanjing for the first time and learned what the Japanese military did. I felt deep grief. My father was born in China a week before the war ended, and my grandmother walked back to Japan with three children. It took them a year to walk from China to Korea and to take a boat back to Japan, they were given food and shelter along the way. I am here today because they survived and I feel grateful for the help they received. So I wish to do something to build peace. This is the 7th time that I've visited Nanjing. I truly appreciate being part of this project and your warm welcome every time.

I interviewed participants of the 2011 gathering who are the third-generation of Sino-Japan war. Most of the interviews were conducted about a year after the workshop. This Remembering Nanjing project is a dialogue program that applies Healing the Wounds of History developed by Armand Volkas. HWH facilitates reconciliation by focusing on 6 steps: 1. Breaking the taboo, 2. Recognizing humanity in each other, 3. Recognizing the potential perpetrator in all of us, 4. Sharing grief, 5. Act of creativity and integration, 6. Working together to create ritual, performance, 6. Transforming trauma into acts of service or creativity.

My interest is in finding out how the participants experienced the workshop, what the challenges were. Documenting and understanding the wide range of experiences and the gap between the intention and experience can help us in creating the next steps. From approximately 40 participants, more than 15 people have participated in the interview. Someone had taken a night train from a distant city just for the interview and I truly appreciate your cooperation. The 15 participants include 8 Chinese, 1 Chinese resident

in Japan, 5 Japanese, and 1 Korean in Japan.

I'm still in the midst of analyzing the data but here, I would like to share my findings on 3 themes; 1. Perceived outcome of the workshop, 2. Challenges, 3. Theme of apology. What I am going to share is from 2011. Every year the content of the workshop as well as the participants changed, so my sharing is only specific to 2011. Some characteristics of the 2011 workshop was an incorporation of playback theatre, exploration of the theme of apology, chair work that encouraged participants to act as the other.

1. Effect of the Workshop

For Chinese participants, the workshop seemed to have changed the image of Japan and its citizens. For Chinese participants who had little or no interaction with Japanese people before but gained impressions only from the media and history education, dialoguing with Japanese people helped their attitude toward Japan be less affected by the media. They also said that it helped them to think of nation/government and its people separately. Some of these participants stated that when people around them are making general comments about Japan and Japanese people, they either don't participate, suggest people to be rational, or share their experience of the workshop and interaction with Japanese people. Some participants who have had interactions with Japanese people through work or their study stated that the subject of war history became easier to talk about, and their relationships deepened. Participants included students of psychology, history and Japanese language. Some psychology and Japanese language students stated that they think about history and how they relate to it more. On the other hand, some history students stated that they bring a psychological point of view to their history studies as well as take a more neutral stance. All interview participants stated that they would participate in a workshop like this again if they have a chance.

Some Japanese participants stated that they moved away from thinking about history in terms of historical facts and numbers of victims, but accepted the fact that the Japanese soldiers committed violence, and the

personal stories and feelings of the survivors. One participant stated that he renewed his belief that even one person should not be killed. He got to see how Japanese and Chinese people think differently about things because of the different education they received. He thought that no matter how differently they think, instead of trying to change one another, we can perhaps value the capacity to accept the difference and to bring that capacity beyond a China-Japan relationship but to his life and his work as a clinician. This person mainly experienced change in his capacity for acceptance and tolerance for the differences. One person also stated that he is more aware of the fact that a group can collectively move toward violence and thinks often about current Japanese politics. Another person became more clearly aware that the current political problems he sees on the media are affected by the past. These are from the interviews with the Japanese male participants and I am working on the women's interviews. One thing I might be able to say is that perhaps women participants identify more deeply with the victims because the stories they encounter in Nanjing often contain violence against women and children by male Japanese soldiers. Women participants can empathize strongly with the victims but also accept responsibility of the perpetration and this complicates their experience in the long term. This is my impression from the interviews so far.

2. Challenges

In the past, participants often shared with me their challenges personally so I wanted to document these as well. Here I will share one example from the interview. In the 2011 workshop, there was chair work that encouraged the participants to step into each other's role. Japanese participants took on the role of the Chinese participants and expressed anger toward Japan. This was remembered as a transformational moment for many Chinese participants. People were impressed to see Japanese participants expressing what Chinese people felt but was difficult to express.

This was an important scene for the Chinese participants; it was also

experienced by some Japanese participants as one of the most difficult scenes. One participant reflected, "I couldn't do anything, I couldn't say anything. It was difficult to stay present. That was the hardest moment." Another participant stated that during the four days, she felt deep guilt as she faced Japan's perpetration and there were moments when she became flooded with tears no matter what she saw or what she did. Many Chinese students offered her consolation by saying, "You did not do this, it is not your fault," but she felt sorry for burdening them with the effort to console her. This kind of experience may be important in recognizing an emotional connection to history but when it is strong, it may take a long time to integrate or becomes the cause of being overwhelmed that inhibits further interest. Fortunately, these two participants were able to share their feelings with other participants within the four days and were able to receive support. They recognized that the fun time they were able to spend with other participants during the four days and being connected to other participants helped them as well. At the time of the interview, they felt powerless against the society at times but also felt committed to nurture their personal relationship to people they are now connected to.

This is an example of challenges experienced by the participants when facing perpetration. When facing history and conflict as an individual emotional experience, a feeling of being overwhelmed is inevitable at times. Learning from his work with Germans and Jews, Volkas suggests that it helps the participants to sustain a multi-layered nature of their own identity in order to be able to face the history. The male participant who experienced difficulty interacted with a Chinese participant through their common interest in calligraphy. He recognized that being able to see a China-Japan relationship through the calligraphy culture served as a great resource. So it may help the young Japanese participants if we bring in more exercises that foster resiliency in maintaining the multiplicity of their identity throughout the workshop, as well as more dialogue work that does not focus on the bi-polar relationship between perpetration/victimhood.

In addition, it seemed important that participants should know how

others are doing and what impact their efforts made on the others in the long term. Interviewing them and communicating to each group what others had experienced seemed to alleviate some of the unfinished feelings the Japanese participants experienced. They seemed happy to hear that their presence had helped Chinese participants see the nation/government and people separately. They also experienced relief in learning that the scene they experienced as difficult, had a great impact on the Chinese participants. So I felt that keeping in touch with the participants and learning about each other's experience is an important continuation of the work.

3. Apology

In 2011, there were exercises that encouraged the participants to explore the steps of apology and forgiveness. Here I will attempt to capture the variety of their experiences and some of the themes that arose.

For the Chinese participants, four of the nine interviewed enquired about a citizen expressing the feelings of apology personally. Within them, two people felt that even though the attempt for reconciliation by citizens has meaning, the apology by the Japanese government being widely recognized would be more helpful. One person felt that the citizen's effort is meaningless if the government does not recognize or act as if they do not care. Two people expressed that even if the government does not give an apology, the citizens effort will help people to think separately about the government and its people, therefore the citizen's apology is important. Even the person who felt that the citizen's effort is meaningless unless the government acts differently stated that his most memorable moment of the four days was the memorial service when they went up the steps in pairs of Japanese and Chinese and offered flowers to the memorial site. Most people expressed that they wanted a government apology and this was also one of the things that some Japanese participants felt helpless about in the workshop.

On the other hand, two Japanese male participants named their

challenges as feeling pressured to apologize in the workshop itself and among the participants. One of them shared that he recognized both Chinese and Japanese people died in the war, so his stance in participation is that of commemoration for all victims. He also stated that apologizing without enough dialogue about what that means and our cultural difference in apology is more disrespectful to Chinese participants. When he interacts with the Chinese participants he receives spoken and unspoken messages that they just want to connect as young generation. Instead of apologizing once and feeling done he would rather come back again and again to dialogue and to commemorate. Another participant understood that there was history that deserves an apology but questioned the degree in which to express, i.e., kneeling. The workshop does not force the Japanese participants to apologize to the Chinese but when older participants kneel down to express apology and when they bow deeply, they hesitate to go any lighter. Both of these participants have an experience of kneeling at the memorial service to go along with the other participants but regretted it afterwards.

In an interview with a Korean woman in Japan, we thought about the meaning of apology together. What is apology and who is it for? Further discussion and exploration of apology in each culture is needed. When apology happens, there is a pressure for forgiveness. In fact, at The House of Sharing in Korea, there are comfort women who are obligated to give forgiveness to the Japanese visitors who come and apologize. If Japanese people apologize and feel healed as a result, the relationship may end there even though it is the comfort women who continue to be in pain and this issue needs continued interest from people. Is it more important that we overcome the polarity of perpetrator and victim and to continue to have awareness of these unresolved issues rather than acting out apology and forgiveness among citizens? It is a question that keeps arising.

There are two places where apology is usually expressed in Remembering Nanjing Workshop. One is when we listen to the survivors and the other is when we conduct the memorial service. In 2011, some

participants tried to kneel to express apology personally. The survivor prevented the participants from going down on the floor and said, “You didn’t do this. Young people please learn each other’s language and be good friends.” I felt the survivor said this as if to save us from feeling bad. At the memorial service, the stance of participation varies from consoling the victim’s spirit, prayer for peace, expression of grief and apology. However for the young Japanese students, when they are being observed by the Chinese participants and older participants are bowing deeply, it may be difficult to express freely even though they are told to express their feelings however they want to. We may need to continue discussing this, considering how young participants feel, the meaning of apology for different cultures and age groups. In 2013, we took these into consideration and asked the participants to co-create the rituals. The ritual felt more free style this year and I wonder how participants experienced it. I look forward to hearing the voices of the participants.

I talked about the three themes. I think it is important for us to continue to explore these themes that were stimulated in the workshop. During this year’s workshop, I witnessed a big generational gap. Up till now, we have been exploring how we can apply Volkas’ method to China-Japan problems and in other Asian context and I was in search of a form. But perhaps what we need to do is for the participants to have a more collaborative stance with the facilitator in co-creating the workshop. We cannot have a recipe because the participant’s age and how they think and feel about the history changes every time. So I imagine a facilitator is like a chef and we bring different ingredients and co-create something unique every time. I hope that one day Chinese and Japanese people will be able to take on the role of the chef and facilitate workshops like this in future.

During this workshop I was more of a participant and learned so much. I would like to thank, Kuniko Muramoto, Haruhiko Murakawa, Armand Volkas, Zhang Lianhong, CuiCui Luo, Linging Tao and many other people who have participated in making these gatherings possible. I truly appreciate your effort.

5-1 直面创伤 共同成长

陶琳瑾 南京师范大学心理学院

大家下午好！我叫陶琳瑾，来自南京师范大学心理学院。2009 年的这个时候，我参加了为期四天的 HWH 工作坊，当时我在备战博士论文，正因为论文的主题“宽恕”跟工作坊主题的相似性，我才决定参加，没想到体验了一次奇特的旅程。5 年来，与工作坊和这个团队的不断深入的联接，让我觉察到自身与此有关的成长。

第一个方面，我对这个工作坊和这个课题的防御心理降低，感受到内心的开放。

在此之前，我已经有好多年有意无意地让自己避免过多地卷入战争的残酷画面了，因为来到南京，自然就背负起了历史的沉重。也许这可以用荣格的集体无意识概念来解释。刚知道有这样一个活动时，我仅仅是被活动主题的附属因素所吸引：Aya 研究表现性艺术治疗，而我此前对绘画治疗产生了兴趣；我的研究课题“宽恕”跟这一活动似乎有些关联。但我心存疑惑，人为的灾难总会带来仇恨、排斥，对于这样一类涉及政治、历史、社会的事件，我不确信心理学能在这其中起到多大的作用。事实上，我参加的时候，因为他们的这个主题，其实我的内心是一种隔离的状态，只是抱着想看到底是怎么回事的想法和心情。

但是第一次的工作坊以后，我的这种隔离状态就在慢慢被内心的柔软所替代。印象深刻的一个细节是，当 Armand 要求一名日本学生和一名中国学生面对面玩“‘You hurt me!’、‘I’ m sorry!’”的游戏时，我对着我的 partner 大声喊着“你伤害了我！”，可是我发现我的声音越来越小，原因是，我盯着对方小姑娘那双清澈的眼睛，这双眼睛明亮、纯净、善良，没有一丝遮掩，它触动了我内心最柔软的部分。最后两个人竟然是调皮的语气，虽然语言不通。安全感从此开始在心底悄悄蔓延。在工作坊最后，我们有个小组讨论，我就表示了一个疑惑，就是说，这样一个吃力不讨好的事情，就像星星之火一样的，以后怎么去做下去，我一直有这样一个困惑。是好事，但是这个力量好像很小。当时我们小组里的高原瑜加则说，至少我们可以做一些力所能及的事情。当时我印象很深刻。这个也是我从工作坊以后，也是自己的心里增加的一个内容。

一开始 09 年我参加工作坊的时候，我参加活动的投入程度其实不是那么高的，没有办法控制自己完全投入，但 5 月份参加日本的工作坊，也是阿曼德带领团体，我就感觉自己真的是完全投入进去了。而且我还上去做了表演，每一个组表演一

个故事，当时我演了一个日本老兵，当时的情景是，这个日本的老兵在医院里面受到中国女孩子的友好对待，可他心里面一直埋藏着一件心事：他年轻的时候在中国干过坏事。但在养老院里，却得到了中国女孩的悉心照顾，我演了这样一个日本老兵的角色，我很少演角色，但觉得自己投入程度非常高。我确实体验到那种犯了错误，却又感受到友好的那种矛盾心理，一方面要掩盖所犯的错误，因为这种否认是人最基本的也是不成熟的防御机制，一方面要去否认这样的一些罪行，然而另一方面，自己又开始良心发现，所以就产生矛盾的心理。

我去年暑假去了一趟云南腾冲，在那里参观了国殇墓园，这是当年云南人民保卫自己的国家不受侵略的见证。当时边境的人们，男的去参军，女人和孩子、老人参加修建滇缅公路，在国殇墓园里，埋着这些因战争而死亡的灵魂，一个人一个碑，大概有 8000 个墓碑，我是第一次看到这么大的墓地，非常震撼。还看到一些雕塑，用石头做成的妇女和儿童拉石头、铺路的情形。旁边还有一个坟墓，叫倭冢，当时那边的人解释，是为了显示人道主义，当时的日本兵阵亡之后，也埋了，碑是给他们立的。就像我们回忆历史的时候，心里面所放的东西，里面的这种庄严、悲伤，但也有这样一种人道的情怀吧。我现在回忆这个历史时，心里面也有一个国殇墓园，把一些东西放在里面，它会跟我有联结，如果以前没有参加这么一个活动，可能就只有纯粹的愤怒，或者是同仇敌忾的那种气势，但是现在我的情感会在另外一个更高的、超越的一个层面来看待和体验这些。这是人类共同的课题。

第二个方面，我发现自己能接纳与这个课题联接时内心所涌现的认知和情绪。

我跟工作坊的结缘源于我当时要做的论文，因此我在工作坊里的几次发言和访谈都提到了我的论文，但一直没有机会展开讲。今天，我想花一点时间解释一下让我跟工作坊发生联系的这个另外的研究。我做的论文题目是《高特质愤怒青少年的宽恕干预》，针对那些比一般人更容易愤怒、更容易跟身边人发生冲突的青少年，帮助他们去宽恕生活经历中对他们产生重要影响的冒犯者，最后发现，经历宽恕的历程，他们不仅宽恕的程度变多了，而且在一项衡量对内心和他人和谐性的指标也显著增高，同时，对理解他人的想法和体验他人的情感的指标，比如：人际敏感性和共情都有显著改善。甚至有研究对象报告，在干预期间，跟同伴发生一次激烈冲突，正想狠狠反击时，脑子里面想到了我们的宽恕团体，于是他抑制了自己的冲动攻击，而当他停止了攻击之后，对方也开始出现一些友好和补偿的行为，我的研究对象也开始注意到这些友好的反应，这是以往他没有觉察到的。

在对这部分研究结果进行解释时，我发现美国研究者 wilkowski 的一个对反应型攻击者的理论模型，当个体遭遇敌对情境时，容易愤怒的个体更可能将这些情境解释为是针对自己的冒犯情境，进行敌意解释，进而引起气愤、攻击，或者反复沉思，放大这种愤怒和攻击的情绪和行为，但是在这种敌对情境中，其实还能启动一种认知资源，叫努力控制资源，当个体能够运用这种资源时，就能对敌意解释进行重新评估，进而可以抑制愤怒表达和攻击行为。现在的研究者还没有找到公认的办法如何来增加一个人的努力控制资源，但我认为，我在宽恕干预时给研究对象所提供的宽恕视角，就可以帮助他们增加原有的努力控制资源，因为他们获得了应对日常人际冒犯、冲突、敌对的另一种有效的办法。

我在上面提到，说我在参加工作坊之后心里增加了一个内容，这是说，至少我从认知上，会多了一种看问题的视角。有些人会陷入一种非理性，像去年有段时间的非理性排日现象。当然现在中国已经比以前好了，去年五月份我去日本之前，我中学同学知道了我要去日本，他们在 qq 群里面，我是回来之后才看到的，他们就说不要买日货啊，抵制日货啊什么的，会有这样的一些言论。然后我会跟他们说，要理性的爱国，不要情绪化的什么都抵触。有的时候很多人就是一种从众，而且也是一种习惯，一种条件反射，听到日本人就会抵触。但是生活中也不全是这样的人，包括日本人里面也不是全部是不友好的人。我这样在想法上的改变，也许可以解释为，我在这几年跟这个项目的联结中，也增加了自身的努力控制资源。

在参加这个工作坊的过程中，我发现自己曾一度被一种矛盾的情感所包围，感觉自己的内心被搅动了，我想在座也会有人有同样的感受。作为一个中国人，面对另一个集体对本集体犯下的罪行，不堪回首，难掩愤怒，而作为一个人，面对同样善良、无辜的下一代，我也没有办法掩饰自己心里自然流露出来的温情。这种我自己深刻体验到的正反两种情感共存的状态，在我写论文的过程中，我在我的研究对象身上也捕捉到了，通过两个月的干预我也没有让研究对象从憎恨伤害他们的人转而完全宽恕或和解，于是我专门用一章内容来讨论这样一个状态，也就是我的研究对象心里的恶和善、内心仇恨和柔软共存的状态。当时我一直在思考，我的这种状态算不算已经宽恕了或者正在宽恕呢，最后我觉得宽恕应该是一个过程，就是像我们这样的一种体验，善恶共存的一种状态，应该算作正在宽恕的路上。这实际上就来自我从工作坊的受益，否则的话我会更纠结或遗憾于研究对象那些依然消极的认知和情绪。其中描述宽恕到底是什么，它不一定非要指最后的结果，比如像我们这样的活动，最终也不可能达到完全和解的结果，而是

善恶共存的很长的一个阶段，这也可以是治疗的目标。我想，宽恕的确不是一件容易的事，但至少我可以有随时迎接它到来的开放心态，而且我也不必掩饰内心的真实感受。

我在第一次活动后的感想里写到的，我们参观南京大屠杀纪念馆，当时村本老师在门口，看到那个大的石像，她就已经忍受不了在那边哭，在那一瞬间会有抵触心理，我就想里面的比这个外边的惨烈多了，里面的是真的，外边的只是石像，当时就那一刹那，会感觉她有点不真实。慢慢深入的了解之后，尤其是去了日本之后，看到他们立命馆大学有个博物馆，据说日本好多的博物馆都是国内的立场，但是他们那个和平馆，各种立场都有，包括有很多的中国的立场，也有一些大屠杀的资料，所以他们还是一个相对公平的立场。而且我也听那边的学生讲，村本老师在日本做了很多这样的工作，我从心里面由衷的佩服。我也由衷感觉到他们在国内开展这样的工作很不容易。尤其是这次听说这次工作坊是最后一次了，心里面会有些遗憾。但我就在想，任何的这种技术上的治疗，可能都比不上让人看到，在恶和仇恨中间所浮现出来的这种善和真诚，这是最重要的。我想这是最重要的疗效因子。

刚才说的认知方面，情感方面有的时候会有一种担心，当然更多的会是一种牵挂。中国有一部电视剧叫【大宅门】，里面讲到抗战时期，有两家人，一家中国人，一家日本人。他们之间是世交，建立了深有的友谊，但是仗打起来了，这个日本朋友的后代跑到中国来，他也是一个士兵，他也有自己的立场。当这两种立场代表两个民族、国家利益的时候，就开始有了激烈的冲突。就像他们去年十月份过来访谈时，中国当时的那个形势，因为钓鱼岛事件，很多中国人特别愤怒，也有一些过激的行为，所以从一开始我就会有点担心，他们出行时会不会遇到什么麻烦。那天他们去郑和公园，我把他们送上出租车，当时心里面还担心这个出租车司机不要发泄什么情绪。但我发现我们酒店的保安还挺好的，还用简单的日语跟他们会话。所以我还是选择相信人和人还是有分别的。我真诚的希望，在日本，像立命馆大学里这样的立场和声音会更多一些，也希望日本政府能像德国一样，减少自己的一些防御，承认历史上的错误，面向未来，共同发展。因为我不希望看到我们民间建立起来的这份友谊有一天遭遇两难的情境。18号晚上在Aya的房间参加了她的表达性艺术治疗团体，最后我的作品是一个女子划着一条船，我说这叫“飘扬过海去看Aya”我希望这是个浪漫的象征，而不是一个无奈的象征。

在第一天晚餐时，张连红老师提到，我将来可以设法去开一门与此有关的课

程，找机会邀请村本教授一行来给更多的同学讲座，虽然我目前会面临一些困难，但我想这个约定我会记在心上，在将来创造机会，朝这个目标努力！

最后的最后，我祝愿大家能因为这个工作坊，与内在的自我相连接，直面内心原本不愿意面对的东西，迈出成长的一步！世界永远不是我们理想的那样，但会是我们相信的那样！

谢谢大家！

5-2 ト라우マに直面しながら共に成長していく

陶琳瑾 南京师范大学心理学院

皆さん、こんにちは！私は南京師範大学心理学院からきたもので、陶琳瑾と申します。2009年の今頃は、私は4日間にわたったHWHワークショップに参加しました。当時、ちょうど博士論文を書いていました。論文の研究テーマは「許し」で、このHWHワークショップの内容と関連性があると思って参加させてもらうことにしたのです。意外なことに、HWHワークショップで、私はとても奇妙な旅を体験させられました。5年来、このHWHワークショップとこのプロジェクトのグループとの付き合いが深まっているうちに、私自身もこの研究とともに成長してきていることに気がつきました。

まず一つ目は、このワークショップとこのプロジェクトに対する心理上における警戒がなくなり、オープンにするようになりました。

このワークショップに参加する何年も前から、意識的に無意識に残酷な戦争画面に多く巻き込まれることを避けてきていました。なぜかというと、南京に来てから、歴史的な重荷を自然に背負ってしまうようになったからです。多分、これは「ユング的」集団無意識的概念で説明することができるかもしれません。このワークショップのことを知ったばかりの時に、ただ、このイベントのテーマと関連している付属の要素に惹かれただけです。

一つは、綾さんの表現アーツセラピーという療法です。これまでは、絵画の療法に興味がありました。

私の「許し」という研究テーマはこのプロジェクトとなにか関連性があるの

ではないかと考えてきたのですが、やはり疑惑を持っていました。人的な災難には常に憎しみや排斥がついています。ですから、このような政治的、歴史的、社会的災難事件に対して、心理学はどれぐらい役に立つのかと、とても半信半疑な気持ちでした。事実上、参加していても初めの時は、こんなテーマのため、内心はずっとある種の隔離状態となって、ただ、HWH ワークショップとはどういうものなのかとずっと観察したいという気持ちを抱えていました。

しかしながら、一回目のワークショップを体験した後、内心の隔離状態は徐々に柔らかな状態に変わってきました。特に印象に深く残ったささやかなことがあります。それは、アルマンド先生が「You hurt me !」、「I'm sorry !」というゲームをしなさいという指示に従って、中日の学生は互いに見合いながらゲームをしている時に、私は、私の partner に大声で「あなたが私を傷つけた！」と叫び続けました。しかし、私の声がだんだん小さくなっていくことに気がつきました。どういうわけなのか、実は、相手の女の子の澄んだ目を見つめたときに、あの目はとても澄んで、単純で、優しく、すこしも偽りはありませんでした。あの目こそ、私の内心にある最も柔らかなところに触れたと思います。結局、二人とも、なんとやんちゃな口調で遊んでしまうようになりました。互いに言葉が通じなかったけれども、その時から、安全感はそれぞれの胸の底から知らないうちに湧いてきたのだと思います。

ワークの最後に、小グループのディスカッションというステップがありました。その場で、私は1つの疑問を出しました。つまり、こんな骨折りで効果の出てこないことはまるで小さな一つの火花のようなものですが、これから如何にして、広く展開していこうかという疑問でした。実は、この疑惑をずっともっていました。このプロジェクトは確かに素晴らしい事ですが、あまりに力弱いものではないか。私の疑問に対して、グループメンバーの高原瑜加はこう言いました。「私たちは少なくともできる限りのことがやれるのではないか。」と言いました。高原瑜加の話はとても印象的でした。これもワークショップに参加してから、自ら増えた一つの内容です。

2009年に、初めてこのプロジェクトに参加する時、それほど投入していなかったと思います。なぜかというと、どうしても自分を完全にワークに投入させることができなかったのです。しかし、その後、その年の5月に日本に行って、そこで行われたワークショップに参加させてもらいました。あそこのグループも、アルマンド先生が指導しているグループです。その時、自分が本当に完

全にワークに投入したと感じ、しかも、私も、一つの演技を示しました。グループごとに一つのストーリーのパフォーマンスを表現するときに、私は元日本軍の老兵を演じました。

そのストーリーは次のものです。ある老兵は病院で中国の女の子がやさしく介護してくれたが、老兵の胸の底にずっと一つのことを秘めていました。つまり、彼が若い時に中国で悪事をしたことです。しかし、それでも老人施設である中国の女の子が行き届いた介護してくれたというストーリーです。私が演じた役はこの日本老兵でした。私はあまり演技をしたことはなかったが、その時の自分は、その役を演じるのに無我夢中でした。その罪を犯したが友好に取り扱われたという複雑な心理をその時、確実に体験しました。

犯した誤りをひたすら隠そうとする否定行為は、人間の持っている最も基本的で未熟な防衛的メカニズムです。だから、犯した罪をひたすら隠そうとします。一方、自分の良心が働き、葛藤する心理が生まれてきたのです。

去年の夏休みに中国雲南省の騰衝というところに見学に行きました。そこで国難墓地に参拝にいきました。それは、雲南省民が侵略から国を防衛した証です。当時、国境に住んでいた人々は、男は軍隊に入り、女、子供と老人は雲南・ミャンマー道路建設に参加しました。その戦争で犠牲になった人々がその国難墓地に埋められ、それに、一人に一つの石碑があり、約 8000 個の墓碑がそこに立っています。こんな巨大な墓地を見たのは初めてで非常に驚きました。また、いくつかの彫像を見ました。それは、石作りの女性と子どもの彫像で、石を載せた車を引いたり、道路を舗装したりして働いている場面です。そのすぐそばに、もう一つ墓があり、石碑に倭冢と書いてあります。ガイドの説明によると、人道主義を示すために、その戦争で戦死した日本兵も埋めたそうです。石碑は死んだ日本兵のために立てたものです。このことは、まるで、歴史のことを思い起こすときに、いろいろなものが湧いてくるのですが、厳かなもの、悲しいもののほかに、人情というものもあるようなことでしょう。

今現在、私はその歴史を振り返る時も、心には常に、国難墓地があり、いろいろなものを中に入れておき、それらのものは、私と繋がってくると思います。もし、このようなワークショップに参加しなかったら、心には、おそらく、単なる怒りしかない、あるいは敵愾心ばかりが燃えるかもしれません。しかしながら、今の気持ちはまたもっと高くても今までの層面を超える視野から、この歴

史のことを体験し、見るようになりました。これは人類共通の課題だと思うようになるからです。

二つ目は、この課題に触れる時に内心から湧いてきた認識と情感を受け入れられるようになったことに気付きました。

このワークショップと縁を結んだのが博士論のため、グループ活動において何回も発言をし、インタビューを受けた時に、すべて博士論に言及しました。しかし、研究内容についてはずっと展開して話す機会がなかったので、この感想で、少し時間をかけて私とこのワークショップを繋げる研究内容について説明しようと思います。

私の博士論の研究課題は『高特質憤慨青少年への寛容による介入』です。研究対象は普通より怒りやすい、周りの人と衝突を起こしやすい青少年です。狙いは、普通の生活経験の中で彼らに重要な影響を与えた、つまり彼らを侵害した者を寛容にするように助けることです。

結局、寛容の過程を経験して、彼らが他人に寛容になる程度は高くなり、しかも、自ら他人と協調する程度を測る指標も明らかに高くなったことがわかりました。それと同時に、他人の考え方を理解することや、他人の感情を体験する指標、たとえば、人間関係に対する敏感程度と同感も著しく改善されたことがわかりました。

さらにある研究対象からの報告によると、介入の期間中、仲間との間に、衝突が発生し、その相手をさんざん反撃しようとする時、寛容グループのことを思いだすと、自ら衝動的攻撃を抑えたとのことでした。そうして、一旦自分からの攻撃をやめたら、相手からもいくらか友好を示してくれて、補償的行為さえしてくれたとのことでした。本研究の研究対象も相手からの友好的反応にも気づき始めたようです。いままで彼がこのことに気づいたことはなかったようです。

このような研究結果について分析する際に、アメリカ研究者 wilkowski の反応型攻撃者の理論模型を見つけました。すなわち、一人が敵対的環境に置かれた時、怒りやすい人間はこのような環境が自分に向かって犯す環境だと思い込みがちなので、敵対的環境だと思ってしまい、結局、怒ったり、攻撃したりするようになります。あるいは、繰り返して考え込んだりして、怒りと攻撃の情感や行為を拡大してしまいます。それにしても、実は、このような敵対環境に

おかれても、ある認知資源というものを呼び起こすことができます。これは、「努力制御資源」というものです。すなわち、個体はこの資源が運用できるようになると、敵意に対する解釈を見直すことができ、そして、怒りの表現や攻撃行為を抑えるようになるということです。ただし、如何にして個体の「努力制御資源」を増やすのかについて、今の研究者はまだ公認の方法を見つけていません。

しかし、容赦介入研究にあたる研究対象に容赦という視野を提供すれば、研究対象の中に既存する努力制御資源をさらに増やすことができます。というのは、彼らは普段の人間関係にある侵害、衝突、敵対に対応する別種の有効的手段を獲得したからです。

また、ワークショップに参加してから、私は自ら一つの内容を増やしたと前に言いました。これは、少なくとも、今の私は物事を認識するにあたって、もう一つ新しい視点を持つてみるようになるということです。

一部の人々は非理性的な境地に陥りがちです。例えば昨年起こった、彼らが起こした非理性的日本製ボイコット現象です。もちろん、今の中国は、前よりずっと良くなりました。昨年5月に、私が日本へ行く前に、中学校のクラスメートは、私の訪日のことを知って、ネットのQQコーナーで、「日本のものを買わないでよ」とか、「日本製ボイコットをしてね」とかと言ったようです。でも、彼らの議論は私が帰国してから見たのです。見てから、愛国はいいですが、理性的でなければならないとか、なんでもかんでも区別なしに抵抗するように感情化してはいけないよと彼らに言いました。

人が多く集まったらみんな流れに従いがちになることがあります。これは一つの習性であり、一種の条件反射でもあるでしょう。中国人には日本人だと聞くと抵抗するようになってしまう人々がいます。でも、全てそうではないと思います。日本人もそうでしょう。全て不友好な人ではないでしょう。

私の考え方はこのように変わってきました。この原因を探してみれば、ここ数年来、このプロジェクトと連結しているうちに、私自身の「努力制御資源」も自ら増えてきたと説明してもよいのではないかと考えています。

このワークをしている過程に、私自身は、一時、ある葛藤した気持ちに包まれ、内心がかき回されたように感じました。さぞ、参加者のみんなも私と同感だろうと思います。中国人として、本集団を侵害した別の集団の罪に直面する時に、

過去を振り返るのに忍びなく、怒りを隠せない。しかし、一人の人間として、自分と同じように善良で、また、無罪の次世代に向かう際に、自分の中から自然に湧いてきた温情をごまかすこともできません。このような私自身が深く体験した表裏の感情が共存している状態を、論文に書いているとき、研究対象からとらえたこともあります。しかしながら、二ヶ月をかけて介入しても、研究対象を彼らを侵害した人への憎しみから完全に容赦や和解に転じさせることはできなかった。それで、一章で専らこのような状態、つまり、研究対象の中に共存している善と悪、憎しみと柔軟な状態を分析しました。

その時、ずっと考えていたことがあります。つまり、私のような状態はすでに許した状態なのか、あるいは許している途中の状態なのか。最後、許すという行為は実は一つの過程だと思います。まるで、今の私たちのような体験で、つまり善悪が共存している状態で、許しに向かっている途中だといえるでしょう。この認識は、私がこのワークから得た収穫だと思います。そうでなければ、私はもっと纏れこんでしまうか、あるいは、研究対象が持っている依然として相変わらず消極的認知と感情に対して残念な思いをするほかないと思います。

許しとは一体何であろうかということを述べる一節があります。つまり、許しはかならずしも最後の結果を指すのではない。たとえば、今、私達がやっているワークのような活動は、最後になっても、完全和解という目的に辿り付くことは不可能でしょう。ただ、善悪共存という長い段階にとどまるのではないかと思います。しかし、これも、治療の目標だと考えてもいいのでしょうか。許しということは確かにたやすいことではありませんが、少なくとも、私自身はいつでもそれを迎えるオープンにする心理を構えており、それに、本当の気持ちを抑える必要もなくなりました。

初めてのイベントの後、次のような感想を書きました。南京大虐殺記念館を見学したあとの印象です。その時、村本先生は記念館の玄関で、ある大きな石の彫像を見たとき、もう堪えられずに、像のそばで泣いてしまいました。その場面を見た瞬間、違和感がして抵抗的心理になってしまいました。なぜかという、外の彫像より、部屋にもっともっと悲惨なものが多いし、しかも、外のただの石像より、部屋にあるのは、すべて真実なものだからです。だから、その一瞬湧いてきたものは、彼女のちょっと不真実さへの感じでした。しかしながら、村本先生のことを少しずつ深く理解した後、特に日本に行ってから、

立命館大学にある平和博物館を見学してから、村本先生に心から感心するようになりました。

なぜかという、日本のミュージアムはほとんど、日本国の立場にたつてものを展示しているそうですが、立命館大学の平和博物館だけは、いろいろな立場も含められ、中には、中国の立場に立って展示するものも多いし、南京大虐殺の資料までもあります。だから、立命館大学の平和博物館は相対的に公平な立場だと言えます。さらに、学生の話によると、村本先生はこのような仕事をたくさんやってきたそうです。また、日本でこのような仕事を展開することは本当に難しいことだとしみじみに感じます。だから、心から先生のことをとても感心するようになりました。

今度のワークはもう最後になると聞いて少し残念に思いますが、いかなる技術上における治療よりも、悪の憎しみの間から浮かんできた善と真摯のほうがもっと大切で、これこそ、もっとも重要な医療効果をもたらす要素だと思います。

前に書いたのは、認知面のことです。感情面については、少し気がかりなところがあります。実は、気がかりより、気になることでしょうか。中国では、【大宅門】「大きな屋敷」というテレビドラマがあります。それは、抗日戦争時期の物語です。ストーリーは二つの家庭があり、中国人家庭と日本人家庭です。二つの家庭は、代々つきあって、深い友情が結ばれています。しかし、戦争が起こってから、日本人の子孫が兵士として中国にやってきて、彼なりの立場があります。二つの立場は二つの民族や国家利益を代表する時にあたって、激しい衝突が起こってしまいました。まるで、昨年10月にHWHワークショップのみなさんが中国に来てインタビューをするときの事情とよく似ていると思います。

当時、中国では、尖閣諸島事件のため、多くの中国人がとても憤慨して、過激な行動までしていました。それがために、最初、プロジェクトのメンバーが出かける時に、私は少し心配していました。何かひどい目にあうのではないかと思いましたから。その日、日本側のみなさんが鄭和公園へ行きたいと言ったので、彼らをタクシーに乗せました。しかし、その時、タクシードライバーが自分の怒りを彼らに発散するのではないかと私は心配していました。しかし、ホテルの門番の態度は友好的で、簡単な日本語で話しかけるまでしました。こ

れを見て、やっぱり人と人は違うと信じたほうがいいと思いました。

日本に立命館大学のような立場と声がもっと多くなること、日本政府はドイツ政府のように自己防衛を少なくし、歴史上の誤りを認め、未来に向かって、共同発展を図るようになることを期待します。なぜかという、民間人がやっと築きあげた友好的な絆を板挟みの境地にさせることを見たくないからです。

今回、18 日夜、綾さんの部屋で彼女のアーツセラピー活動に参加させてもらいました。一番最後に、私は自分の彫刻作品を披露しました。一人の女の子が船に乗って向こうに漕いでいる彫刻でした。この彫刻に「海を渡って綾に会いに行く」という名前を付けました。これは無力の象徴ではなくてロマンチックなシンボルになってほしいです。

初日の夕食の時に、張連紅先生から、このプロジェクトと関連するコースを設けなさいと言われたが、これから、なんとかして必ずコースを設けようと思います。それに、チャンスを作って村本教授一行を招き、もっと多くの学生に受講をするようにと約束しておきます。現在、いくつかの困難があるので、すぐにはコースは出来ません。でも、このことをしっかり約束します。これからこの目標を実現するように努力します。

最後に、皆さんはこのワークショップのおかげで、自分の内心と繋がるようになり、もともと直面したくない内心にあるものに直面できるように、成長の一步を踏み出すことをお祈りします。世界はいつまでも理想のようなものにならないが、きっと私たちが信じるようなものになると思います！

ありがとうございました！

6-1 文化的国家的アイデンティティと責任主体のあり方

村川治彦（関西大学）

1. 7 年間の振り返り

私たちは 2007 年以来、東アジアの戦争記憶と暴力の問題にドラマセラピストのアルマンド・ボルカスが開発した Healing the Wounds of the History (HWH) の手法を応用する試みを続けてきた。この間、領土問題や従軍慰安婦

についての政治家の発言をきっかけに日本と中国、韓国の関係は戦後最も危険な状態にまで至ってしまった。過去の紛争に関する集合的記憶が、現在の紛争プロセスにどのような影響を与えるのかを検討した Paez と Liu (2012) は、Bar-Tal の主張を引用しながら、「過去の紛争、特に戦争に関するさまざまな感情に彩られた集合的記憶 (collective memory:CM) は、人々に恐怖や不信を植えつけ、協調的解決を目指した交渉を事実上不可能にしてしまう」と指摘している。「過去の紛争に関する CM は内集団と外集団のカテゴリー化や区別を明確にし、内集団の優位性を高める」が、Paez と Liu が述べている次の一節は過去の紛争の影響が反映された日本の現状を端的に表現したものと言えるだろう。

どのタイプの文化においても、人々は自分たちの戦争を神話化する一方で、外集団犠牲者のことは忘れがちである。社会は内集団の英雄や兵士を記憶し、自集団の犯罪行為や悪行は忘却するので、内集団成員を被害者、外集団成員を攻撃者・加害者として定義し、それを反すうし続ける。こうして、暴力こそが報復の正しい形式であると解釈するようになる。過去の社会的表象は、攻撃行動を活発にし、戦争や集合的暴力を、外集団による過去の攻撃に対する合理的で正当な反応だとみなし、互いに競い合うように被害者意識を強めるといった悪循環を生みだす。(p.126)

第二次世界大戦の終結から 70 年近く経つが、これまで日本でも戦争体験の継承 (福間 2009) や戦争責任のあり方 (熊谷 2009) についての様々な議論が行われてきた。また暴力問題や戦争題材を扱う狭義の平和教育から構造的暴力や異文化理解、人権問題、環境問題を扱う広義の平和教育も幅広く行われてきた (村上 2009)。にも関わらず東アジアにおいて戦争の記憶はこのように非常に緊張を生みだしている。こうした状況のなかでは第一に、「敵対集団の非人間化をやめて人間化を行い、彼らの苦しみを理解することが和解を前進させる重要なステップである」と Paez と Liu は指摘しているが、2007 年以来アルマンド・ボルカスの協力を得ながら私たちが行ってきた「南京を思い起こす」プロジェクトは、日本人と中国人が信頼と友情関係を基盤に歴史の事実をふまえて共に手を携えて未来の関係を築いていく土台作りを目指して進められてきた (村川 2012)。2011 年からは科学研究費の助成を受けてきたが、その最終年度

である今年を一つの区切りとして、これまでの成果と今後に向けての課題をまとめていく作業に入っている。詳細なデータの分析はまだ中途であるので、ここでは 2013 年 9 月に南京師範大学で行われた国際会議で報告した仮の成果と課題について簡単に述べておきたいと思う。

京都と南京ではほぼ隔年のペースで東アジアの問題にフォーカスした HWH を行ってきたが、成果としては次の 3 つが考えられる。

① 人間としての共感を共有する：

この HWH では、南京大虐殺記念館の訪問や生存者の話を聞いた後で、参加者がそれぞれの感じたことを表現するエクササイズを行った。また最終日に燕子磯の記念碑で追悼セレモニーを行い哀悼の気持ちを表現してきた。悲惨な歴史の事実に対して、日中の参加者が哀しみや怒りなど様々な感情を率直に表現しあうことで、互いの理解が進み、親密な感情を共有することができた。

② 歴史を自分の問題として捉える：

日本と中国のそれぞれの教育の違いを乗り越え、共感をベースに自らが直接関わったものではない加害や被害の体験を自らの感情を励起する直接的な体験とすることができた。また戦後の歴史教育によって東アジアの人々と戦争体験について共通理解が欠如している日本人にとっては、日本人家族のつながりのなかで伝えられてきた戦争体験をてがかりに戦争体験を過去のものではなく現在に生きる自分の問題として捉えることができた。

③ 世代間伝達的重要性：

日本と中国の間の社会的文脈の違いだけでなく、それぞれの社会においても様々な戦争体験伝達のパターンがあることが明らかになった。特に日本も中国も時代の変遷のなかで戦争体験に対する世代間の違いが大きくなっており、世代間の体験伝達的重要性が明らかになった。

またこれまでの参加者の感想やスタッフの振り返りなどから、以下の課題が浮かび上がってきた。

① 参加人数の限定による影響力の小ささ：

心理療法の枠組みで行う HWH では、参加者が安心できる安全な空間を作り上げることが必要不可欠な条件とされている。このため、毎回の参加者は 20 - 40 名に限定して行ってきた。3 - 4 日という長い時間をかけて

こうした少ない人数を対象に行う心理学的ワークショップには、こうした時間的、空間的制約が大きく、日中間で現在大きくなっている対立に与える影響はほとんど皆無に等しい。

② 成果の社会還元と個人のプライバシー保護の葛藤：

参加人数の制約を乗り越えるためには、直接 HWH に参加した人たちの体験を学会発表や論文はもちろん、印刷物などを通して広く社会に伝えていく必要がある。しかし、体験型のワークショップの内容を公開していくことは、個人やその家族のプライバシーの問題にも関わり容易ではない。

③ 文化的国家的アイデンティティと責任主体のあり方：

ドイツとユダヤの和解をモデルにした HWH は、西洋近代自我を前提にした心理的プロセスに基づいており、東アジアにおける和解のプロセスに当てはめる際には、文化的自己の特徴についての慎重な考慮が必要である。特に、国民国家の枠組みに基づくアイデンティティを前提にした罪責感や謝罪のあり方を目的としている HWH のあり方について改めて検討する必要がある。

以上の成果と課題報告のなかで、特に課題の三つ目としてあげた「文化的国家的アイデンティティと責任主体のあり方」については、HWH の前提やエクササイズのあり方に対する批判として小田（2012）があげた問題とも密接に関係しており、この稿でもう少し掘り下げて考えてみたいと思う。

2. 国家的アイデンティティの強化と戦争責任

ボルカスは「HWH 歴史の傷を癒す」のモデルの中心にある前提の一つとして「歴史的トラウマは否定的な影響を文化国家的アイデンティティや自尊心に与える可能性がある。人間は本質的にある集団に属する存在であり、自分が所属する集団を肯定的に感じる必要がある」をあげている（ボルカス 2012）。この前提に基づき HWH では文化国家的アイデンティティの肯定的な面を自覚することで、そうしたアイデンティティを強化することを目指している。しかし、現在の東アジアの紛争状況を考えたときに、この前提は HWH がもつ最大の難点を浮き彫りにしている。すなわち Brewer（2012）が指摘しているように、「アイデンティティー特に、集団的アイデンティティもしくは集合的アイデンティ

ティーは集団紛争の起源と維持に重要」であり、しかも「諸悪の根源は集団的アイデンティティそれ自体ではなく、むしろ個人の愛着と所属への複雑さを単純なわれわれ—彼らという区分に還元してしまう単一アイデンティティ」である。ボルカスの前提は、戦争加害の責任主体として自らが「日本人」であることを積極的に引き受けることを求めるが、それはたとえアイデンティティを肯定的に変化させることを目的として設定されているにしても、そうした加害を生み出す根源としての集合的アイデンティティを強化してしまう危険性を孕んでいる。

この HWH に参加する「日本人」は第二世代、第三世代であり、直接加害に関わった経験をもたないが、戦争被害者の経験に耳を傾ける「日本人」としての集合的責任を引き受けることで、「自分が所属する集団を肯定的に感じる」ステップを進むことが求められる。しかし、ドイツのように戦前と戦後の政治体制が明確に断絶しておらず、しかも政府の高官や一部の政治家が戦争責任を否認する言動を繰り返している日本では、自らを（加害者である）「日本人」としてアイデンティファイすることは、自らを肯定的に感じるどころかそうした加害を生み出した集団主義に結びつくというジレンマを抱える。そうした矛盾に陥るのを避け自己肯定感を抱くためには、歴史修正主義者たちのように戦争加害の側面を否認し恣意的に美化した「日本」に同一化するしかない。そうすると HWH で暗黙の前提とされている「(主体的に戦争責任を引き受ける)日本人」への帰属を強化することは、現在まさに直面している東アジアの紛争の根底にある国民国家主義の強化につながってしまうのだ。

こうした「日本人」というアイデンティティと戦争責任の複雑な問題について、1995 年の加藤典洋の「敗戦後論」を契機に「歴史主体論争」をめぐる様々な議論が起こった（安彦他 2012）。ここではその中でも斉藤純一（2012）による論考「政治的責任の二つの位相—集合的責任と普遍的責任」を手がかりに戦争責任のあり方について整理をしてみる。

斉藤はまず、従軍慰安婦や南京虐殺の幸存者など戦争の被害者たちを（ハンナ・アーレントのいう）「暗闇」に追いやってきた時間の経過は、実際に暴力が起こった半世紀前の時間にもまして重要であり、『暗闇』に沈んだ半世紀をもたらししたのは、被害者自身の声に耳を傾けようとする用意の欠如であり、忘却もしくは『忘却の忘却』というよりもむしろ、アテンションの端的な不在である」と指摘している。このアテンションの偏りこそ、斉藤が日本社会にお

ける戦争責任のあり方において最も問題視する点である。このアテンションの偏りを是正するために、斉藤は集合的責任に加え普遍的責任を担うことを提起し次のように述べている。

戦争責任をめぐる近年の言説には、集合的責任を担う主体の形成を急務の課題と見なすあまり、『日本人』という集合的アイデンティティを強調する傾向が見受けられるが、そうした立場は、『国民的アテンション』の修正という他者の求めに対して適切に応じうるだろうか。私たちには、集合的責任への問いのみならずアテンションを脱一集合化する普遍的責任への問いも同時に提起されているのではなかろうか。

(斉藤 2012、p.79)

斉藤はこのアテンションを（日本という）国家・国民に内向的に向けることが戦後の戦争責任論議の中で一貫しており、例えば一億総懺悔のような責任の所在すら明確にしない曖昧模糊な論は言うまでもなく「国民を能動的な責任主体へと形成する」ことで戦前の超国家主義への反省とその乗り越えを目ざした丸山眞男を典型とする戦後デモクラシーさえも戦争に対する自己反省のあり方という点では同じ問題を反復しているという。同じ問題すなわち他者の不在である。斉藤が問題視しているのは、戦争責任を担う責任主体を形成するという点において、「日本人」であることにアテンションが向けられることは、「他者」を排除することにつながってしまうという点にある。つまり、「強調されるのは、責任主体に向けての能動的な自己形成であり、国民の他者との関係において、自らを問いかかけられ、呼びかけられる受動的な位相に置くことは、歴史的責任を省みるうえで不可欠の事柄とは考えられていない」点において、戦後の戦争責任論はいずれも「内向きのアテンションをもつ国民的主体のモノローグの構造」なのだ。

このHWHでは参加者がひとりずつみんなの前に立って、「私は日本人です」「私は中国人です」と発言するエクササイズがある。HWHに参加している中国人にとって私は、村川治彦という個人である前に、「日本人」参加者として受け止められる。もちろんこのエクササイズの意図は「まず第一に、文化的国家的アイデンティティを明らかにし、それを解体すること」であるが、「私が、他者から一方的に（私自身の行為や意見とは無関係に）何者か（what）とし

て集合的に括られるとすれば、それは明らかに私に加えられる暴力である」(斉藤 2012、p.88) と感じる参加者もいるに違いない。

しかし一方で、親族が日本兵に殺された経験をもつ幸存者のお話を聞いている私が、一方的に自分が日本人として受けとられることを拒否することはできない。斉藤が言うように、「他者による名指しを私が拒否することが、他者が私に加える以上の暴力を他者に対して遂行的に行使することにならざるをえない関係性が、私を『日本人』と名指す他者との間には現に存在している」からだ。いみじくも斉藤が指摘しているように、アジア太平洋戦争において日本が中国大陸を侵略し多くの中国人を殺戮した「関係性においては、他者による名指しを拒むことは、その他者対話の関係性を結ぶことの拒絶を意味し、翻ってそうした拒絶は、私が『日本人』として集合的に括られざるをえないような既存の関係性を再び強化する効果を生み出すにはないだろう」(p.88)。日本と中国(あるいは他のアジア諸国との) こうした「関係の非対称性」は歴史的なものであり、「戦後世代が集合的責任を負うべき理由は、私たちが、数多くの不正義を刻んだ歴史的関係性を先行する世代から継承し、私たち自身もそうした関係性をすでに生きてしまっているという事実」(p.89) を拒否することはそのまま今ここの関係性を拒否する暴力となるのだ。

しかしこうした整理を踏まえたうえで斉藤は、他者から「日本人」として名指しされた場合、それを拒否するべきではないと同時に、それが自らを「日本人」として定義することに結びつく必要はないことを強調している。斉藤がいうように「私たちを『日本人』と呼ぶとき他者が名指しているのは、「国家への帰属 (citizenship) そのものではなく、被害者との間にあるこうした歴史的関係性にほかならない」のだ。「日本人」としての名指しを受け入れるべきなのは、「そのように問いかける他者との間で再-交渉 (re-engagement) のプロセスを開始するためであって、加害者集団のアイデンティティをもって被害者集団に向き合うためではない」(p.90) のだ。重要なのは、「集合的主体をアイデンティファイすることではなく、自-他の間にある問題をアイデンティファイすること」である。そしてまた、そうした呼びかけのベースとなる歴史的関係性の非対称性は、そこで固定されるべきものではなく、自己と他者の双方に新たな語りを生み出す機会となるべきだと斉藤は指摘し、次のように述べている。

他者の立場にたつということが根本的に不可能であるという自覚を求める

けれども、そうした歴史的経験の違いは、双方の間に私のものでも彼らのものでもない公共の認識や記憶を形成していくことを妨げるものではない。むしろ、それぞれの国民が自らの過去を排他的に所有するのではなく、国民の境界を横断する記憶や歴史認識を共有していくためには、同じ出来事をまったく違った仕方でも経験してきた他者との語り（narrative）の交換こそが不可欠である。（p.91）

このような新たな語りの可能性を実現するためには、「ある特定の他者との歴史的関係性のゆえに、そうした他者によって問われる」ものとしての「集合的責任」とは区別される「普遍的責任」（Ardent 1994）について考えなければならない。なぜなら、「（南京虐殺や従軍慰安婦だけでなく）私たちの生は現在へと引き渡されている過去の不正義の上に築かれており、私たちは—私たちの生を形づくりながらも、私たち自身には記憶されていない—そうした不正義を生きてしまっている。過去の不正義を知らないということが、あるいはまた特定の仕方では知らないということが、私たちの生、現在の『生活形式』をつくりあげ、私たちと他者との関係を歪んだ仕方でも規定している」（p.95 - 96）からである。この認識のうえに立ってアテンションを特定の国民や国家から世界や人類、あるいは生命一般にまで広げるところに普遍的責任への視座が成立する。

たとえ周囲の支配的な判断に抗してでも自ら自身が悪をなさないよう自己を条件づける「個人的責任」や、自国による過去の犯罪にたいして謝罪と補償を果たす「集合的責任」は、必ずしも「世界への配慮」をもたらすわけではない。普遍的責任は、「われわれの関知するところではない」という「暗闇」の領域を世界のなかにつくらないようにする配慮、誰かを「見捨てられた境遇」に放置しないアテンションのあり方を求める。それは、私たちのアテンションをある閉域のなかに鎖さないという意味で「普遍的」なのである。（斉藤 2012、p.94）

斉藤が集合的責任から普遍的責任に言及するのは、集合的責任から眼を背けるためではなく「集合的責任を引き受けることの緊要さを力説する言説の多くが、他者にではなく『われわれ』に方向づけられた関心を遂行的に再

生産しているように思えるから」(p.96-97)である。戦争被害者からの「日本人」という呼びかけに呼応するのは、その呼びかけに応えることで『日本人』としての誇りを回復する」ためではない。それは「『国民の他者』の苦難に眼を閉ざさないことによって信頼を形成する」ためであり、さらにはそうした信頼を基盤に同時代を生きる人間としてともに普遍的責任を果たしていく道を探るためでもある。集合的責任を抜きに普遍的責任を語ることはもちろん論外であるとしても、生まれる以前の行為に対する個人的責任をもたない私たちが普遍的責任への視座を抜きに集合的責任の境界に留まってしまうと、意に反してアテンションを国民国家の境界へと限定することになってしまう。そうした時に、「『過去の暴力の亡霊』一人種主義、植民地主義、性差別といった亡霊—は、国民の境界を跨いで徘徊しており、集合的責任を成立させる加害者と国民との結びつきはほとんど妥当しない。加害者と被害者の境界が国民と国民の境界に一致するとは限らない」(p.96)という普遍的責任という視座を導入することで、アテンションを国民国家に限定する自己愛的な内向化の危険性を回避できる。

3. 今後に向けて

能動的な責任主体としての「日本人」にアイデンティティを固定することによってではなく、他者に向き合い他者からの名指しに応えることで集合的責任を果たしていく姿勢は、Brewer (2012) が紛争の鎮静化に有効な方法として提示した次のようなアイデンティティの複雑性の認識につながるだろう。

他方、自己のアイデンティティを多くの愛着側面から成るものとみなすと、ある側面は民族の過去と結びついているが、他の側面はそうではない。ある側面は宗教的伝統と結びついているが、他の側面はそうではないということに気がつくと、・・・その人は、他の人々とも、また自分自身の「仲間」ともこれまでとは異なる関係に入っていく。もはや「彼ら」と「われら」という問題は存在しない。・・・そうしてみると、「われわれの」側に存在する人々と私はほとんど共通点がないということがある一方で、「彼らの」側には私が非常に親密に感じる人々がいるという・・・。

(Maalouf 2003, Brewer 2012 p.145 に引用)

2009 年から 2013 年まで京都と南京でワークショップを重ねてきたが、参加

者の感想からはワークショップの終了後、Maalouf が示唆するような異なる集団への親密感に基づく「交差的連帯」が自然発生的に生じていたことが伺える。そうした連帯感を感じることは、Paez と Liu のいう「内集団と外集団のカテゴリー化や区別」を曖昧にすることで、「内集団の優位性」を解体することにつながり、ひいては「過去の紛争に関する CM」を書き換えることにつながるだろう。（これができたのは、ひとえにアルマンド・ボルカスの心理療法師としての深い技量と存在感があったからこそである。彼が創り出してきた安全な場においてこそ、日本人・中国人の参加者が互いに深い感情を表現することができ、信頼を醸成することができた。）

2014 年度からはこれまでの成果や課題を踏まえ、HWH の諸前提やエクササイズのある方を検証していく予定である。この稿で検討した集合的責任と普遍的責任という視座も含め、日中双方の参加者が共有できるような新たな平和教育の枠組みを構築し、戦後最も危険な状態にまで至ってしまった東アジアの情勢に何らかの寄与をしていきたい。

参考文献

- 安彦一恵・魚住洋一・中岡成文（編）（1999）「戦争責任と『われわれ』—『歴史主体論争』をめぐる」 ナカニシヤ出版
- Brewer, Marilynn B.（2012）アイデンティティと紛争「紛争と平和構築の社会心理学—集団間の葛藤とその解決」バル・タル, D.（編著）熊谷智博・大淵憲一（監訳）所収 北大路書房
- 福岡良明（2009）「『戦争体験』の戦後史：世代・教養・イデオロギー」中公新書
- 熊谷伸一郎（編）（2009）「私たちが戦後の責任を受けとめる 30 の視点」 合同出版
- 村上登司文（2009）「戦後日本の平和教育の社会学的研究」 学術出版会
- 村川治彦（2012）一人称から歩み直す「戦争体験」—体験心理学に基づく歴史・平和教育の構築に向けて「共同対人援助モデル研究 3」立命館大学人間科学研究所
- 小田博志（2012）南京と『和解』—歴史の深淵に橋をかける 「共同対人援助モデル研究 3」立命館大学人間科学研究所
- Paez Dario R. and Liu, James Hou-fu（2012）紛争の集合的記憶 「紛争と平和構築の社会心理学—集団間の葛藤とその解決」バル・タル, D.（編著）熊谷智博・大淵憲一（監訳）所収 北大路書房
- 斉藤純一（1999）政治的責任の二つの位相—集合的責任と普遍的責任 「戦争責任と『われわれ』—『歴史主体論争』をめぐる」安彦一恵・魚住洋一・中岡成文（編）

所収 ナカニシヤ出版

竹内久顕（編著）（2011）「平和教育を問い直す―次世代への批判的継承―」法律文化社
ボルカス、アルマンド（2012）「HWH 歴史の傷を癒す」プログラムの基礎と応用 「共
同対人援助モデル研究 5」立命館大学人間科学研究所

6-2 Cultural and National Identity and Responsible Subjectivity

Haruhiko Murakawa (Kansai University)

1. Reviewing the past seven years

Since 2007, we have continued to apply the method of Healing the Wounds of History (HWH), created by drama therapist Armand Volkas to the issues of violence and war memories of East Asia. Recently the relationship between Japan, China and Korea have become the worst since World War II, due to territorial disputes and statements made by politicians in regards to comfort women. Paez and Liu (2012), examining the effects of collective memories of past disputes on current dispute processes by citing Bar-Tal's argument as support, claimed "past disputes, especially those collective memories filled with wartime emotions implant fear and distrust in people making it practically impossible for negotiations aimed at a coordinated solution." He further maintained, "Collective memories regarding past disputes are categorized and clearly distinguished between internal and external groups, while prioritizing the internal groups." The following excerpt from Paez and Liu clearly expresses the effects of past disputes reflected in the current state of affairs in Japan.

In every culture there is a tendency to glorify their wars and to forget about the foreign victims. Society will remember the heroes and soldiers from their own group while forgetting the crimes and evil acts they

committed, which results in a repeated process of defining their own members into victims and those opposing into perpetrators and assailants. Thus, violence becomes interpreted as the correct method of retaliation. Past social representations resulted in actively increasing aggressive behaviors by justifying war and collective violence as a proper and logical response to past attacks by others. This resulted in a vicious cycle of mutually strengthening their sense of being victimized. (P.126)

It has been almost 70 years since the end of World War II, and in Japan there have been numerous discussions in regards to the inheritance of wartime experiences (Fukuma 2009) and the proper ways of taking wartime responsibility (Kumagai 2009). There have also been specific peace education movements focusing on violence and wartime subject matters to broader peace education movements focusing on structural violence, intercultural understanding, human rights, and environmental issues (Murakami 2009). Despite this, wartime issues and memories in East Asia have created extreme tension. In such a situation Paez and Liu claim that “the important step to promote a peaceful settlement is to first stop the dehumanization of opposing groups and to begin humanizing them by understanding their pains.” However since 2007, what our project “Remembering Nanjing” has been trying to accomplish with the help of Armand Volkas, is to create trust and friendship between Japanese and Chinese people and using this as a foundation to create a mutual understanding of history and a relationship for the future (Murakawa 2012). Since 2011 we have received a research grant for this project, and as we are in the final year of this grant, we are in the process of summarizing and reviewing our past efforts and examining our tasks for the future. As we are still in the process of examining the detailed analysis of our data, I would like to present the results and future tasks presented at the international meeting, which took place at Nanjing Normal University in September 2013.

There are three major results that have been a product of the HWH workshops focusing on East Asian issues, taking place in Kyoto and Nanjing.

1) Sharing humanly sentiments:

In this HWH, we performed an exercise where participants expressed their feelings after visiting The Memorial for compatriots killed in the Nanjing Massacre by Japanese Forces of Aggression and listening to stories told by survivors of the Nanjing Massacre. Subsequently, on the final day, participants expressed their sympathy after offering condolences at the Yanziji. Japanese and Chinese participants were able to share intimate emotions and increase mutual understanding after expressing and sharing their honest feelings of anger and grief about the tragic wartime realities.

2) Grasping history as a personal issue:

By overcoming the differences of Japanese and Chinese education and using their shared sentiments as a foundation, participants were able to perceive experiences of violence and victimization that they did not directly take part in as a more personal emotional experience. Additionally, Japanese participants who lack a mutual understanding of the wartime experiences with the rest of East Asia due to postwar educational agendas, used wartime experiences passed down through Japanese family relationships to grasp the perception of wartime issues as a personal, current issue.

3) The importance of generational transmission:

It became apparent that the transmission of wartime experiences differs not only between Japanese and Chinese social contexts, but also within both societies. Especially as times changed, the generational gap increased regarding the wartime experiences, and the importance of transmitting experiences between generations became apparent for both the Japanese and Chinese.

Through the responses and reflections of past participants and staff members, the following tasks became apparent for the future.

1) Limited influence created by limited number of participants:

For HWH, as a psychotherapy workshop, it is of utmost importance that there is a safe and comfortable environment for the participants. For this reason, we have limited the number of participants to between 20 and 40 every time. For a psychological workshop that targets a few members for an extended period of 3-4 days, time and spatial limitations are great. For a Japanese-Chinese relationship that is currently increasing in opposition, the influences these small groups have are close to none.

2) The conflict between making a social impact and maintaining personal privacy:

In order to overcome the issues presented by the limited participant numbers, there is a need to spread social awareness through presentations and publications of the experiences of those who attended HWH programs. However, to release the contents of an experiential workshop would mean to enter the realms of not only personal privacy, but those closely affiliated with the individual, and is not an easy topic to resolve.

3) Cultural and National identity and the way of responsive subjectivity

HWH uses German and Jewish reconciliation as a model and bases its psychological processes with the premise of the existence of the modern Western ego. However in order to apply this to the reconciliation processes in East Asia, there is a need for careful examination of the characteristics of cultural self-awareness. There is especially a need to reexamine the way of HWH, which sets its objective on guilt and apologies straining from an identity based on the nation-state.

Especially the third task presented of "Cultural and National Identity and the way of responsive subjectivity" is one, which is closely related to the criticisms and problems raised by Oda (2012) towards the premises and method of exercises of HWH. As such, I would like to examine this issue further in this paper.

2. A dilemma between reinforcement of national identity and war responsibility

One of the "HWH" premises Volkas (2012) suggested is "Historical

trauma can also have negative effects on cultural or national identity and self-esteem. Human beings are tribal in nature and have a need to feel good about the tribe to which they belong." Based on this premise, HWH aims at helping the participants aware of the positive side of cultural or national identity and accordingly reinforcing such an identity. However, taking the current conflict in the East Asian regions into consideration, this premise may highlight the difficult point of HWH. Because, as Brewer (2012) suggests, "identity, especially group identity or collective identity, plays an important role to originate and maintain the conflicts among groups." Moreover, "what is the worst is not the group identity itself, but rather a simplified identity which reduces the complexity of individual attachments and belongings to the simple distinction of we-they." The premise Volkas takes may ask for the Japanese participants to accept actively "the Japanese identity" as a responsible subject for the war perpetrator, which, though aiming at transforming their identity positively, may be in danger of reinforcing the collective identity which might be the origin of such perpetrations.

Japanese participants in these workshops, who are second or third generations and have no direct experiences of perpetrations, are encouraged to take a further step in order to "feel good about the tribe to which they belong," especially in accepting the collective responsibility as "Japanese" who are listening to the stories of war victims. However, for a Japanese, accepting an identity of "Japanese" brings about a problem to connect to the collectivism, which was an origin of such perpetrations rather than finding the positive side of their identification. This is because, in Japan, different from Germany where the political system was interrupted between pre and post war, some high government officers and politicians keep denying the war responsibility. Avoiding such a dilemma and feeling positively towards "Japan" we need to deny certain part of Japan and identify with arbitrarily idealized "Japan" which is exactly what the historical revisionists have done. Therefore, as the result of a HWH premise, reinforcement of identification with Japanese, even if they are actively accepting the war

responsibility, may reinforce the nationalism which is exactly the origin of conflicts in East Asian region we are now facing.

Regarding this complex issue of "Japanese" identity and war responsibility, in 1995 "After the lost war" by Norihiro Kato brought about serious discussions on "Historical Subjectivity" (Abiko and others 2012) Following those discussions, especially "Two Aspects of political responsibility-collective responsibility and universal responsibility" by Junichi Saito, we will examine this issue.

What Saito viewed as the most serious problem was the deflection of attention. He first pointed out that those war victims (i.e., comfort women and Nanjing massacre) have been put into a position of "obscurity", in terms of Ardent, over a half century, and such a course of time was as important as the time itself such violence was originally conducted. Then he stated "what put them into that position of "obscurity" for a half century was the lack of willingness to listen to the voices of those victims, which was caused by the absence of attention, rather than forgetfulness or forgetfulness of forgetfulness." In order to correct this deflection of attention, Saito proposed that we should accept not only the collective responsibility but also the universal responsibility. He explained this in the following:

In the recent discussions on the war responsibility, some people emphasize the establishment of the subjectivity, which can take the collective responsibility, and the collective identity of "Japanese." However, I am wondering if such a position can respond to a claim by others who request the reformation of "attention on the nation." I think that we are asked for not only taking the collective responsibility but also the universal responsibility which requires the de-collectivization of attention." (Saito 2012, P.79)

As Saito pointed out, this attitude of focusing the attention inwardly on nation/citizen (of Japan) has been in common among the discussions on war

responsibility after the war; this is shared by not only an obscure "national confession of Japanese war guilt" but also after war democracy, exemplified by Masao Maruyama who aimed at reflection on and overcoming the pre-war ultra-nationalism by driving the Japanese citizens to establish the active responsive subjectivity. What Saito claims as the problem here is that focusing on "Japanese" lead to the elimination of "others" even if their intention was establishing the subject who can take war responsibility. In sum, all the discussions on war responsibility after the war have the same "structure of monologue by the citizen subject with inward attention" in that "they emphasize the active self-establishment towards responsive subject, and do not put themselves in the passive position in which they are questioned and called by the national others."

In an exercise of this HWH, the participants are encouraged to state, "I am a Japanese and I feel...." or "I am a Chinese and I feel..." in front of the group members. In this exercise, I am regarded as a "Japanese" not as an individual, i.e., Haruhiko Murakawa, by Chinese participants. Although the purpose of this exercise is good in "recognizing and deconstructing cultural or national identity" (Volkas 2012), but some participants may feel "the obvious violence forced on me, if others one-sidedly bind me in a category without considering my personal behaviors or opinions." (Saito 2012 p.88)

On the other hand, if I was listening to survivors whose family was killed by Japanese soldiers, I cannot reject one-sidedly being called as Japanese. As Saito suggests, "In a relationship between me and others who call me "Japanese" my rejection of the calling by others results in stronger violence than by others. Saito furthermore points out that "in the relationship (in which Japan invaded China and killed numerous Chinese during the Asia-Pacific War) if we reject the calling by others, it means the reject of making the relationship with those others. That is, such a rejection inevitably reinforces the existing relationship in which I am forced to be categorized into Japanese." (p.88)

This "asymmetry of relationship" between Japan and China (or other Asian Nations) is historical in nature and if we reject "the fact that we

ourselves have already lived such a relationship which we succeed to the historical relationship from the previous generations who have engraved numerous injustice and therefore we post war generation should take collective responsibility (p.89)," then that brings about the violence to reject our current relationship.

Based on such an examination, however, Saito also emphasizes that even if others call us as "Japanese," it does not have to be tied to defining myself as "a Japanese." He claims, "When others call us "Japanese," what they call is not our citizenship or belonging to the nation itself but this very historical relationship with the victims." The reason that we should accept the calling for "Japanese" is that "it is a start of re-engagement with others who call, but not that we with an identity of a group of perpetrator face with a group of victims." (p.90) What is significant is "to identify the issues between me and others, not the collective subjectivity." Saito further suggests that the asymmetry of historical relationship which is a basis of such calling should not be fixed as it is, but should be an opportunity to make new narratives both for others and me. He explains this as:

Although we require ourselves to acknowledge that it is fundamentally impossible to be in the place of someone else, these sorts of differences in historical experiences does not get in the way of forming a mutual understanding and memory that is neither explicitly ours nor theirs. If anything, people should not hold the past of their country as something exclusive, but rather exchange their narratives as experiences that resulted in similar emotions but were experienced in different ways, in order to create a mutual historical understanding and memory that crosses national borders. (p.91)

In order to realize the possibility of such narratives, there is a need to think about the "universal responsibility" (Ardent 1994), which distinguishes itself from the "collective responsibility" presented by "the questions posed by a certain individual who has a specific historical relationship". This is

because “ (in ways not limited to the Nanjing Massacre and comfort women) Our current life is built upon the injustices of the past that are passed down, and having our lives shaped by these injustices which we do not even remember ourselves is in itself an injustice which we live with everyday. The fact that we do not tangibly know of these past injustices, or know of them only in very specific ways, creates our lives and our current lifestyles and regulates our distorted relationships with others” (p. 95-96). By realizing this and expanding our attention from specific citizens and nations to the world and humanity, or even to life in general is a way to form the viewpoint of universal responsibility.

Both “personal responsibility” and “collective responsibility” do not necessarily result in “universal consideration”. Universal responsibility requires a consideration to not create an area of “obscurity” where we dismiss things as none of our concern, and an attention to not leave someone as a “lost cause”. This is “universal” in the sense that we do not chain our attention into a closed system. (Saito 2012, p.94)

The reason that Saito switches his focus from collective responsibility to universal responsibility is not to look away from collective responsibility but because, “it seems as though much of the discourse on the importance of taking collective responsibility is focused not on others but more on reproducing the concerns that ‘we’ align ourselves with” (p.96-97). When war victims refer to us as “Japanese”, the reason we respond is not to “regain our pride and honor as ‘Japanese’”. Rather, we respond in order to, “Constitute trust through keeping our eyes open to the hardships of the ‘non-Japanese people’.” Furthermore, we use this trust as a basis for finding a way to accomplish universal responsibilities with people living in the same generation. Although it would usually be impossible to talk about universal responsibilities without talking about collective responsibilities, if we, who have no personal responsibilities for actions taken before we were born, are stuck in the boundaries of collective responsibilities without a viewpoint on

universal responsibilities, we end up limiting our attention to the boundaries of nation states. When this happens, “the ghosts of past violence’ – such as racism, colonialism, and sexism – wander without regards to national borders and the ties between perpetrators and a nation, which is at the basis of collective responsibility ceases to exist. Thus, the boundary between victims and perpetrators and the boundary between two nations is not always consistent” (p.96), and by introducing the viewpoint of universal responsibilities, it is possible to evade the dangers of narcissistic introversion caused by limiting our attention to nation-states.

3. Towards the future:

What is important is not to fix our identity on "Japanese" who plays an active agent fulfilling one's responsibility, but rather to take an attitude to fulfill the collective responsibility by facing the others and responding to the calling from them. This might lead to the proposal of Brewer (2012) in which recognizing the complexity of identity is an effective way to resolute the conflicts and showed the citation from Maalouf as follows:

On the other hand, if we regard our identity as consists of various aspects of attachment, we can see that some aspect might relate to the past of our nation but others might not. If we realize that some aspect is related to the religious tradition but others not, that person may get into the different relationship with other people, or even his/her own "peers". Then, the issue of differentiating "them" from "us" does not exist anymore....I might realize that while those who belong to "us" do not share anything in common with me, I might feel very intimate with some people on "their" sides. (Maalouf 2003, citing in Brewer 2012 p.145)

From 2009 to 2013, we have organized workshops both in Kyoto and Nanjing. The participants of these workshops reported that after the workshop, some "social solidarity" based on the intimate feeling with others-

group as Maalouf suggested had spontaneously emerged. Feeling such "solidarity" may dismantle "the primacy of in-group" by making ambiguous "the categorization and distinction between in-group and out-group," and in turn may lead to rewriting the "collective memory of past conflicts." (I should emphasize here that this totally owes to the deep presence and professional skills of Armand Volkas. Without the safe space he created, Japanese and Chinese participants could not have expressed the deep emotions nor established the trust to each other.)

From 2014, we will proceed to examine the results and issues of these workshops and verify the premises and exercises of HWH. Taking the theme of collective responsibility and universal responsibility I discussed here, we will make more effort to establish the new framework for the experiential based peace education method in which we hope that both Chinese and Japanese participants can make some contribution to change this most critical situation after the WWII in the East Asian region.

7-1 「南京を思い起こす 2013」に参加して

中村 正（立命館大学）

私の両親は幼い時に戦争を体験しています。その上の世代である祖父母たちからも戦争体験はよく聞きました。もちろん公害問題に代表されるような高度経済成長の矛盾が噴出していた若い頃、社会問題にも敏感でした。ですので、社会改革への関心は高く、高校の頃には平和運動に参加していました。特に原水爆禁止の運動です。その過程で、第二次世界大戦の全体像を勉強する機会がたくさんありました。世界平和の構築に戦争加害者の末裔として何ができるかを考えていた日々でした。そのことが今回初めてのセミナー参加へと私を駆動した遠因です。

さらに日々の研究と教育と実践がそこに重なります。私の関心は「対人暴力の研究」です。そして性犯罪、ドメスティック・バイオレンス、子どもや高齢

者への虐待、ハラスメントなどの加害者臨床も試んでいます。その研究と実践で心がけていることは、暴力を振るう個人の人格の特性に還元せずに暴力を社会問題と関連づけていくことです。特に男性の暴力として対人暴力を位置づけていくと、社会全体のもつ暴力性がみえてきます。ジェンダーとしても、世代としても、職業的地位としても、そして地政学的な日本の歴史的な位置からしても、どちらといえば加害の側に傾斜することになる自分の立ち位置から、個人や対人関係における暴力から国家間関係における暴力までの多様な形態の暴力の相互関連を把握することに主要な関心があります。

また、私の個人史をとおして、歴史のなかの暴力と加害の責任の理解について、過去をきちんと知ることと、その過去が十分に責任の所在も含めて整理できていない現在を生きるものとしての責務があるので、そのことの自覚のためにも多様な機会を逃すことなく体感してみることが大切だと思っていたからです。

今回の参加をとおして印象に残ったことは、修復・和解と相互理解について世代を重ねて地道に取り組むことの重要性でした。中国で日本語や日本文化を勉強することがもつ大学生たちの苦労と意気込みを実感したのです。若い大学生たちの祖父母の世代は直接の戦争被害者たちです。その孫たちが侵略国であった日本のことを勉強しているのです。その背後には急速にすすむグローバル化があります。日本には中国製品があふれています。比較的安い商品の背景に中国の労働事情を考えざるを得ません。相互依存は歴史や戦争のこととは別次元で進行しています。さらに日本文化を好む中国の若者たちも多く存在しています。いまや文化と経済は急速に相互に浸透しています。それとは対比的に冷たい政治の状況があり、緊張があります。このはざまに日本語や日本文化に関心をもつ若者が置かれていることを実感しました。世代間関係があることがよくわかりました。

他方で、日本の若者はその緊張を受けて、歴史や戦争や責任のことについての無関心を形成しています。これは緊張や葛藤を回避して生きているともいえます。しかし経済の相互依存の恩恵は受けています。双方の若者の置かれた異なりをとおして、その媒介をすべき50歳代の私たちの世代ができることは何であるのかについて直面させられたセミナーとなりました。

こうした意味で考えたことは、教師でもある自らにできることの大きさでした。それは教育のもつ重要性ということです。この種のセミナーに参加するこ

とはもちろんその一環でもありますが、無関心さが支配的な日本の若者へのフィードバックです。しかも押しつけでないようにしてアプローチする工夫が要ると思いました。あくまでも＜現在＞を起点にしていくことを重視し、歴史や戦争や責任という過去とのつながり方を工夫して教育すべきことです。とくに、脱暴力の実践や加害者臨床をしているので、そのこととの重なり工夫をすべきことについて学びがありました。具体的には男性性ジェンダーと暴力の関連においてこの工夫をすべきだということです。兵士たちは男性でした。日本の加害行為も多くは沈黙のなかにあります。社会の暴力への直視ができていないので個人もできにくいのです。社会の脱暴力への臨床と個人の暴力の直視は重なります。ジェンダーの暴力と男性性のあり方は戦争と責任と和解と修復にとっても意味のある取り組みの視点だと実感できたことはとても有意義でした。

7-2 参加「回忆南京 2013」

中村 正（立命馆大学）

我的父母经历过战争，我也听祖父母讲过战争的经历。当代表公害问题的高速经济成长的矛盾喷发的时候我对社会问题很敏感，因此对社会改革越来越关心，高中的时候参加了和平运动。特别是在禁止使用原子武器运动的过程中，获得了很多学习第二次世界大战整体面貌的机会，也因此那段日子一直在想作为战争加害者的后裔，我能为世界和平的构建做些什么。这也是驱使我参加这次研究会的间接原因。

并且我平日研究，教育，和实践的重心也放在这里，主要做「对人暴力的研究」。除此之外我还尝试着做，性犯罪，家庭暴力，对儿童或老年人的虐待，骚扰等加害者的临床。在研究和实践中我会注意，不将问题还原于施加暴力个人的人格特性，而是想它与社会问题的关联。特别是对男性的暴力，把它定位为对人暴力，从社会整体具有的暴力性的角度考虑。不论是从性别，世代，职业地位，还是地政学的日本历史的位置的角度，把重心放在从加害方倾斜的自我定位，从个人或是对人关系中的暴力，到国家间关系中的暴力，把握其多样形态以及相互

的关联。

并且，通过我个人的成长史，对历史中的暴力和加害责任的理解来看，要了解过去，了解过去里包含着责任之所在，而且还有活在未被整理好的当下的人的责任和义务，因此为了自觉这一点，不要错过各种各样的机会，通过身体去感受是件重要的事情。

参加这次研究会，修复·和解和相互理解是需要几代人踏实努力的事，以及其重要性，留下了深刻的印象。也深切体会到在中国学习日语和日本文化的大学生们的辛苦，感受到他们的干劲。年轻的大学生们的祖父母是战争的直接受害者，而他们的孙子在学习侵略国日本的东西，这背后存在着急速增长的全球化现象。在日本到处都是中国制品，我们不得不去思考在比较便宜的商品背后，中国劳动力的现状。相互依存与历史和战争不同，以另次元的方式进行着。并且喜欢日本文化的中国年轻人也有很多。现在已经是文化和经济急速的相互的渗透着。而与此相对比冷淡的政治状况，紧张气氛也存在着。通过这次研究会，对日语和日本文化抱有感兴趣的年轻人深处这样的缝隙里的现状深有感触，也明白了世代间的关系。

而与此相反，日本的年轻一代对这样的紧张气氛，历史，战争，责任的事毫不关心，也可以说是在回避紧张气氛和纠结，但是却接受着经济相互依存的恩惠。这次研究会作为媒介的 50 年代的我们更加思考，在双方的年轻人所处的位置不同的情况下我们该做些什么。

这样的思考是作为教师的我能做的，也是教育所具有的重要性。当然参加这样的研究会也是教育的一环，把毫不关心的现状回馈给被支配的日本年轻人。但是并不是把这些强硬地施加给他们，而是在传达上下功夫。应该重视以<现在>为起点，如何与历史，战争，责任的过去链接的方法上下功夫进行教育。特别应该把它与我做的脱暴力的实践和加害者的临床相结合来考虑。具体来说应该在男性性和暴力的关联上下功夫。士兵们是男性。日本的加害行为大多也是在沉默中进行，因为不能直视社会暴力，所以个人也难以做到。社会的脱暴力的临床与个人直视暴力是有关联的。通过这次研究会，我觉得非常有意义的是，深切地感受到性别暴力和男性性的方式也是理解战争，责任，和解，修复的视点。

7-3 “Remembering Nanjing 2013” Participant’s Report

Tadashi Nakamura Ritsumeikan University

Both my parents have experienced war as children. I have often heard war stories from my grandparents. When I was young, a downside of rapid economic growth such as environmental pollution became apparent. I had a strong interest in social change issues, and as a high school student, I participated in the peace movement, especially the anti-nuclear weapons movement. During my participation I had many opportunities to learn about the overall picture of World War II. During those days, and as a descendent of the war perpetrators, I thought very hard about what I could do to contribute to peace. These are some of the reasons why I decided to participate in this seminar for the first time.

My research and my work as an educator also influenced my participation. My interest is in interpersonal violence, which includes clinical work with perpetrators of sexual offence, domestic violence, child and elderly abuse, and harassment. What I try to keep in mind in my research and clinical practice is not to distill violence to the individual personality traits but to relate violence to social issues. When attempting to place male violence within a larger social context, violence within the larger societal system becomes visible. I realize that I am placed in a potential perpetrators’ position sexually, generationally, occupationally, historically and geopolitically. From this standpoint of a Japanese man, I am interested in understanding the inter-relatedness of all forms of violence that occurs on all levels, from personal, interpersonal to international.

In addition, I think it is very important for me to have the opportunity to experientially learn and to understand through my own personal history, the responsibility of violence and perpetration within history. I have a responsibility as a person living in the present where past history and the issues of responsibility remains unresolved.

Participating in the seminar made me realize again the importance of

continuing to work at reparation, reconciliation and mutual understanding over many generations. I saw the enthusiasm as well as the difficulties of University students willing to study Japanese and Japanese culture in China. Grandparents of these young students are the generations with direct war experience. The grandchildren of these people are studying Japanese, a language from a country that invaded them. Behind this phenomenon is a force of rapid globalization. Japanese life is filled with made-in-China products. When looking at inexpensive products, I cannot help but think of working conditions in China. This economic interdependency is growing on a whole different dimension from war and history. There are also many Chinese people who like Japanese culture. Culture and economy are rapidly and mutually infiltrating. In contrast, there is coldness and tension in our political situation. I was able to grasp that young Chinese people who are interested in Japanese language and culture are placed within this paradox, as well as the fact that there are intergenerational issues.

On the other hand, in general, young Japanese people in the face of this tension seem to be forming growing disinterests in history of war and responsibility. Perhaps we could even say that they live avoiding tension and conflict. However, they still benefit from the interdependency of our economies. In this seminar, facing the situations that these young people are in, I had to think very hard about what we, as people in 50's, can do as mediators for the younger generations.

I realized that there is a lot I can do as an educator and the important role that education plays in this issue. Attending seminars like this is part of these educational efforts but giving feedback to young Japanese people with prevailing disinterests could be another. Of course we need to be crafty in approaching them non-imposingly. It is important to originate the discussion in the current issues, and to educate about the connection between the current and the past that includes history, war and responsibility. Because I practice non-violence and clinical work with perpetrators, there are many overlapping issues and things that I would

like to exercise. In particular, when working with the theme of male sexuality and violence, I would like to use the inspiration gained from this seminar. These soldiers were men. Much of the acts of perpetration in Japan lie in silence. Our society cannot look straight into the eyes of violence and therefore individuals have difficulty doing so. Clinical work for the purpose of creating nonviolence in society has much to do with looking into personal violence. For me looking at gender violence and masculine / male sexuality throughout this seminar gave me a useful standpoint in tackling the issues of war, responsibility, reconciliation and reparation.

8-1 参加《回忆南京》项目随想

南京大学 桑志芹

和村本教授见面有三次以上了，第一次我是在苏州表达性技术会议上我们同台工作坊，谈南京大屠杀历史创伤治疗，那是我知道村本教授在做关于南京大屠杀的研究；第二次是今年7月去日本京都立命馆大学学术访问，我们一起聚餐一起见面，一起上课相互交流学习，第二次见面，在一起有一种亲切感，不知道为什么像一个久违的朋友，那是我就告诉村本教授我回去要联系捐赠南京大学张宪文教授的72卷《南京大屠杀史料集》给立命馆大学和平博物馆，那是我感觉我们俩有一个共同的理想：就是让中日人民记住这段历史，让人间悲剧不要重演，让和平传递永远；第三次见面是2013年9月20日在南京师范大学南山宾馆三楼，《回忆南京》座谈会。

七年来村本教授致力于《回忆南京》的研究，致力于还原南京大屠杀的真实，致力于透过治疗南京大屠杀的历史创伤，不再让创伤代际传承。这是最让我感动的部分，特别是在当前日本右翼否认南京大屠杀历史，歪曲历史真实的今天还有像村本教授这样的学者能够站出来，致力于告诉大家南京大屠杀这个不争的事实时，让我很感动。能够正视历史的人，能够承认历史事实的人，是内在强大的人！我相信像村本教授这样的人在日本不是少数。

因为我工作在南京，生活在南京，我曾经采访过南京大屠杀幸存者，我经历

过聆听幸存者悲惨故事心痛的感觉，我目睹过那一张一张幸存者家中仅存照片的痛苦记忆……对日本军队惨无人道的罪恶行径感到深痛恶绝。

在座谈会上中日学者以理性的态度分析讨论南京大屠杀的事实，以人道主义精神倡导世界和平；看到中日的年轻人在一起泪流满面、依依不舍的分手的情景，让我看到的希望，看到了未来。《回忆南京》是一个非常好的项目，是一个值得去做去推展的项目，希望有更多的中日学者参与进来，希望有更多的中日年轻人参与进来。尊重历史，维护世界和平！

8-2 「南京を思い起こす」に参加した随想

南京大学 桑志芹

村本邦子先生には今回で3度お会いしました。最初は蘇州で開かれた表現性心理療学会で、私たちが南京大虐殺のもたらした歴史トラウマ治療について大会講演を行った時です。私は、その時、村本先生が南京大虐殺について研究を行っていることを知りました。2度目は今年、2013年7月、京都にある立命館大学を訪問した時です。私たちは一緒に食事し、お互いに勉強し合い、交流を深めました。そのとき私は、村本先生に対して、久しぶりに古い友人に会ったような深い親近感を覚えました。中国に帰国し、南京大学張文憲教授が書かれた72巻もある「南京大虐殺史料集」を立命館大学国際平和ミュージアムに贈呈するように働きかけようと考えました。それは、私が村本先生と同じ考えを持っており、日中両国がこの歴史を忘れず、人類悲劇が二度と起こることなく、平和が永遠に後世に引き続くよう願っているからです。3度目は今年の9月20日南京師範大学南山賓館で開催された「南京を思い起こす」の座談会の時です。

この7年間、村本先生は「南京を思い起こす」の研究に尽力されてこられました。南京大虐殺の真実を還元し、南京大虐殺の歴史トラウマを治療することによって世代間の伝達を断ち切ろうと考えています。私が最も感動したのは、日本の右翼が南京大虐殺の事実を否定し、歴史の真実が歪曲されている今日において、村本先生のような研究者が、力強く南京大虐殺という紛れのない事実

をみんなに伝えていることです。歴史を真正面から見つめ、歴史事実を認めることのできる人は、内面的に強い人だと思います。そして、私は村本先生のような人は日本で決して少数派ではないと信じています。

私は南京に暮らし、南京で長く仕事をしてきました。私は南京大虐殺の生存者をインタビューし、彼らの悲惨なストーリーを聞いた時の心の痛みを……また生存者が持ち続けているあの一枚一枚の貴重な写真を見た時の辛さを覚えております……私は日本軍の非人道的な犯罪行為を深く嘆きました。

座談会において、日中の研究者たちは理性的な態度で南京大虐殺の事実について分析・討論し、人道的な精神を持って世界の平和を提唱しました。日中の若者たちがともに涙し、別れがたい場面を目にした時、私は希望を見出し、未来を見ました。「南京を思い起こす」というのは非常に良いプロジェクトであり、広く拡げる価値のあるプロジェクトです。

もっと多くの日中に関わる研究者、日中の若者たちに参加していただきたいと思います。

歴史を尊重し世界平和を維持し、守っていきましょう！